

神崎郡市川町

# サルガク遺跡・沢 構

県道長谷市川線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

平成20（2008）年3月

兵庫県教育委員会

神崎郡市川町

# サルガク遺跡・沢構

県道長谷市川線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

サルガク遺跡 沢構



調査地点遠景 南から（撮影日：平成10年7月13日）



調査地点遠景 東から（撮影日：平成10年7月13日）

## 卷首図版2

沢構



沢構Ⅰ・Ⅱ地区遠景 南西から（撮影日：平成10年3月10日）



沢構Ⅰ地区全景 南から

沢構



沢構遠景 南から（撮影日：平成10年3月10日）



沢構III～V地区遠景 南から（撮影日：平成10年6月25日）

卷首図版4

沢構



沢構IV・V地区出土の律令期の土器（1）



沢構IV・V地区出土の律令期の土器（2）

沢構



沢構IV・V地区出土の律令期の土器（3）



沢構V地区出土の緑釉陶器

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県神崎郡市川町澤に所在するサルガク遺跡、沢橋の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は、県道長谷市川線道路改良工事に関連して、兵庫県姫路上木事務所福崎出張所（現：兵庫県中播磨県民局県土整備部福崎土木事務所）の依頼を受けて、平成6～10年度に実施した。
3. 整理作業については、中播磨県民局の依頼を受けて、平成18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、平成19年度に兵庫県立考古博物館において実施した。
4. 遺物写真の撮影は、谷口フォトと委託契約を交わして、兵庫県立考古博物館において実施した。
5. 本書の各遺構図面で使用している方位は座標北を示し、水準は東京湾平均水準（T.P.）を使用した。なお、座標値については、調査終了後、日本測地系から世界測地系への切り替えが行われたが、日本測地系のまま掲載している。
6. 本書で使用した地図は下記のとおりである。  
第2図 國土地理院1/25,000地形図「寺前」、「粟賀町」、「前之庄」、「北条」
7. 本書の執筆は、各年度の調査担当者が分担して行い、詳細は本文中に記している。編集は、岡崎譲子の補助を得て鐵　英記が行った。
8. 調査・整理にあたっては下記の方々および機関のご協力・ご指導をいただいた。記して謝意を表します。
9. 市川町教育委員会　　福崎町教育委員会　　香寺町教育委員会（調査当時）  
原田昌幸　　出田　直　　堀本裕二　　（順不同・敬称略）

## 凡　　例

### 遺構

本書での遺構名は遺構種類ごとに以下の略号を用いる。調査時に命名したものを踏襲した部分と、その後の検討により遺構名を改めたものもある。そのため、一部に不統一な遺構名があることを理解されたい。

S A : 横列　S B : 掘立柱建物　S D : 溝　S H : 積穴住居　S K : 土坑・木棺墓　S P : 柱穴  
S X : 土器棺墓

なお、遺構番号は各年度あるいは地区単位で付与している。

### 遺物

土器　　土器の断面は、弥生土器・土師器は白抜き、須恵器は黒塗り、陶器・磁器は網掛けである。  
瓦　　他の遺物とは、番号の前に「瓦」をつけて区別している。  
石器・石製品　　他の遺物とは、番号の前にSをつけて区別している。  
金属製品　他の遺物とは、番号の前にMをつけて区別している。

# サルガク遺跡・沢構 本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	1
第1節 遺跡の位置	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査の経緯と経過 .....	4
第1節 調査に至る経緯	
第2節 発掘調査の経過	
第3節 整理作業の経過	
第3章 サルガク遺跡の調査成果 .....	7
第1節 概要	
第2節 遺構	
第3節 遺物	
第4節 まとめ	
第4章 沢構の調査成果 .....	13
第1節 I・II地区の遺構と遺物	
第2節 III～V地区の遺構と遺物	
第3節 まとめ－澤構の歴史－	
報告書抄録	
奥付	

## 卷首図版 目次

卷首図版1	調査地点遠景 南から (撮影日: 平成10年7月13日)
	調査地点遠景 東から (撮影日: 平成10年7月13日)
卷首図版2	沢構I・II地区遠景 南西から (撮影日: 平成10年3月10日) / 沢構I地区企画 南から
卷首図版3	沢構遠景 南から (撮影日: 平成10年3月10日) / 沢構III～V地区遠景 南から (撮影日: 平成10年6月26日)
卷首図版4	沢構IV・V地区出土の伴合期の土器 (1) / 沢構IV・V地区出土の伴合期の土器 (2)
卷首図版5	沢構IV・V地区出土の伴合期の土器 (3) / 沢構V地区出土の縁捲陶器

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置 .....	1	第4図	大形土製品実測図 .....	19
第2図	周辺遺跡分布図 .....	3	第5図	沢構周辺図 .....	33
第3図	調査区の配置 .....	5			

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表 .....	2	第6表	沢構出土遺物一覧表 (3) .....	39
第2表	サルガク遺跡出土遺物一覧表 .....	36	第6表	沢構出土遺物一覧表 (4) .....	40
第3表	沢構出土遺物一覧表 (1) .....	37	第7表	沢構出土遺物一覧表 (5) .....	41
第4表	沢構出土遺物一覧表 (2) .....	38	第8表	沢構出土遺物一覧表 (6) .....	42

## 図版目次

- 図版1 サルガク遺跡Ⅰ地区全体図  
 図版2 サルガク遺跡Ⅱ地区全体図  
 図版3 サルガク遺跡Ⅰ・Ⅱ地区西壁断面  
 図版4 サルガクⅠ地区柱立柱建物SB01～SB03  
 図版5 サルガクⅠ地区層立柱建物SB04～SB06  
 図版6 サルガク遺跡Ⅰ地区遺構図  
 図版7 サルガク遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地区全体図・断面図  
 図版8 サルガク遺跡Ⅲ地区遺構図  
 図版9 サルガク遺跡Ⅳ・Ⅴ地区遺構図  
 図版10 許構Ⅰ・Ⅱ地区全体図  
 図版11 訸構Ⅰ地区遺構配置図・断面図  
 図版12 訸構Ⅰ地区弥生土坑断面図  
 図版13 訸構Ⅰ地区弥生土坑（1）  
 国版14 訸構Ⅰ地区弥生土坑（2）  
 国版15 訸構Ⅰ地区弥生土坑（3）  
 国版16 訸構Ⅰ地区遺構図（1）  
 国版17 訸構Ⅰ地区遺構図（2）  
 国版18 訸構Ⅰ地区柱立柱建物SB01  
 国版19 訸構Ⅱ地区遺構配置図・断面図  
 国版20 訸構Ⅱ地区遺構図  
 国版21 訸構Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地区全体図・断面図  
 国版22 訸構Ⅲ地区遺構図（1）  
 国版23 訸構Ⅲ地区遺構図（2）  
 国版24 訸構Ⅲ地区遺構図（3）  
 国版25 訸構Ⅲ地区遺構図（4）  
 国版26 訸構Ⅲ地区遺構図（5）  
 国版27 訸構Ⅲ地区遺構図（6）  
 国版28 訸構Ⅲ地区遺構図（7）  
 国版29 訸構Ⅲ地区遺構図（8）  
 国版30 訸構Ⅳ地区遺構図  
 国版31 訸構Ⅴ地区遺構図  
 国版32 サルガク遺跡出土の土器・陶磁器  
 国版33 訸構Ⅰ地区出土の土器・陶磁器（1）  
 国版34 訸構Ⅰ地区出土の土器・陶磁器（2）  
 国版35 訸構Ⅰ地区出土の土器・陶磁器（3）  
 国版36 訸構Ⅱ地区出土の土器・陶磁器  
 国版37 訸構Ⅲ地区出土の土器・陶磁器（1）  
 国版38 訸構Ⅲ地区出土の土器・陶磁器（2）  
 国版39 訸構Ⅲ地区出土の土器・陶磁器（3）  
 国版40 訸構Ⅲ地区出土の土器・陶磁器（4）  
 国版41 訸構Ⅲ～Ⅴ地区出土の土器・陶磁器  
 国版42 訸構Ⅳ・Ⅴ地区出土の土器・陶磁器（1）  
 国版43 訸構Ⅳ・Ⅴ地区出土の土器・陶磁器（2）  
 国版44 訸構Ⅳ・Ⅴ地区出土の土器・陶磁器（3）  
 国版45 訸構Ⅴ地区出土の瓦（1）  
 国版46 訸構Ⅴ地区出土の瓦（2）  
 国版47 訸構Ⅴ地区出土の瓦（3）  
 国版48 訸構Ⅴ地区出土の瓦（4）  
 国版49 訸構Ⅴ地区出土の瓦（5）  
 国版50 訸構Ⅴ地区出土の瓦（6）  
 国版51 訸構Ⅴ地区出土の瓦（7）  
 国版52 訸構Ⅴ地区出土の瓦（8）  
 国版53 サルガク遺跡・許構出土の石器・石製品  
 国版54 訸構出土の金属器・サルガク遺跡出土の鉄貨

## 写真図版目次

- 写真図版1 サルガク遺跡・許構 遺跡全景（北から）/遺跡全景（東から）  
 写真図版2 サルガク遺跡・許構 遺跡全景（真上から）  
 写真図版3 サルガク遺跡・許構 遺跡全景（南西から）  
 写真図版4 サルガク遺跡 I地区北半（真上から）  
 写真図版5 サルガク遺跡 I地区南半（真上から）  
 写真図版6 サルガク遺跡 I・II地区全景（北から）/I・II地区全景（南から）  
 写真図版7 サルガク遺跡 SB01 西から/SB01・02 南から/SK01 南から/SB01断面 南から  
 I地区断面（東壁南端） 南西から/SB04 西から  
 写真図版8 サルガク遺跡 I地区 SR02 北から/SB04 西から  
 写真図版9 サルガク遺跡 I地区 南端 西から/SB05 東から/SB06 東から  
 写真図版10 サルガク遺跡 I地区 P234(SB02)西から/P438(SB04)西から/P445(SB04)西から/P522(SB05)西から  
 P572(SB06)北から/P567・568(SB06)北から/P407・487西から/P406西から

- 写真図版11 サルガク遺跡Ⅲ地区 II地区 南上から
- 写真図版12 サルガク遺跡Ⅲ地区 全景 南から／全景 北から／柱穴集中地区 西から
- 写真図版13 屋形構 屋形構／屋形構近景（1）／屋形構近景（2）
- 写真図版14 サルガク遺跡 III～V地区全景 南上空から／III～V区全景 南東から
- 写真図版15 サルガク遺跡 III地区全景 両から／IV・V地区全景 西から／V地区全景 南から
- 写真図版16 サルガク遺跡 III地区・V地区 SK01断面 西から／SK02断面 東から／SK03断面 西から  
SK04断面 西から／SK05断面 南から／SK08断面 西から  
SK09断面 南から／SK13断面 東から／SK13断面 東から
- 写真図版17 沢構 I地区 全景 南東から／全景 北西から
- 写真図版18 沢構 I地区 粘土探査坑群北部 西から／粘土探査坑群南部 西から
- 写真図版19 沢構 I地区 SK16上層出土状況 北から／SK27土器出土状況 北東から／SK67土器出土状況 南から
- 写真図版20 沢構 I地区 SK06 土層断面 南から／SK27土層断面 西から／SK67土層断面 北から／SK60土層断面 南から  
SK65上層断面 南から／SK68～70土層断面 南東から／SK01P61東から
- 写真図版21 沢構 I地区 SD01 南から／SD02 北から
- 写真図版22 沢構 I地区 北西部中近世遺跡群 南から／SD03 北から
- 写真図版23 沢構 I地区 SD04 南から／SD04内石列 南西から
- 写真図版24 沢構 I地区 SK31 西から／SE01 東から
- 写真図版25 沢構 II地区 全景 北西から／SK02 西から
- 写真図版26 沢構 II地区 SE01 南から／SE01断面 南から
- 写真図版27 沢構 III～V地区全景 南上空から／III地区全景 南から
- 写真図版28 沢構 III地区 SD01全景 南から／SD01断面1 南から／SD01断面2 南から
- 写真図版29 沢構 III地区 SD02全景 西から／SD02断面 西から／SK01断面 南から／SK02断面 南から
- 写真図版30 沢構 III地区 SK03断面 南から／SK04断面 西から／SK06・07断面 西から／SK08断面 南から  
SK09・10断面 南東から／SK12・13・15断面 南から／SK14断面 南から／SK16断面 南から
- 写真図版31 沢構 III地区 SK17断面 西から／SK18断面 北から／SK20断面 西から／SK21断面 南から  
SE04断面 西から／SE04 西から／SD03断面 東から／SA01 南から
- 写真図版32 沢構 IV・V地区 IV区全景 南から／V区全景 北から／SK25断面 北から／SK26断面 東から
- 写真図版33 サルガク遺跡出土の土器・陶磁器
- 写真図版34 サルガク遺跡出土の鉄貨
- 写真図版35 沢構 I地区出土の土器・陶磁器（1）
- 写真図版36 沢構 I地区出土の土器・陶磁器（2）
- 写真図版37 沢構 I地区出土の土器・陶磁器（3）
- 写真図版38 沢構 I地区出土の土器・陶磁器（4）
- 写真図版39 沢構 I地区出土の土器・陶磁器（5）
- 写真図版40 沢構 II地区出土の土器・陶磁器
- 写真図版41 沢構 III～V地区出土の土器・陶磁器（1）
- 写真図版42 沢構 III～V地区川土の土器・陶磁器（2）
- 写真図版43 沢構 III～V地区出土の土器・陶磁器（3）
- 写真図版44 沢構 III～V地区出土の土器・陶磁器（4）
- 写真図版45 沢構 III～V地区出土の土器・陶磁器（5）
- 写真図版46 沢構 III～V地区出土の土器・陶磁器（6）
- 写真図版47 沢構 III～V地区出土の土器・陶磁器（7）
- 写真図版48 沢構 III～V地区出土の土器・陶磁器（8）
- 写真図版49 沢構 III地区出土の瓦（1）
- 写真図版50 沢構 III地区 出土の瓦（2）
- 写真図版51 沢構出土の石器・石製品
- 写真図版52 沢構出土の金属器（1）
- 写真図版53 沢構出土の金属器（2）

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 遺跡の位置

サルガク遺跡、沢構が所在する神崎郡市川町は、兵庫県の中央南寄りに位置し、北は神崎郡神河町、南は神崎郡福崎町、東は多可郡多可町、加西市、西は姫路市と接する。旧国では播磨国に属し、但馬と播磨を結ぶ交通の要衝でもあった。

町域は北西が峰山高原、北東が千ヶ峰・笠形山山地、南東が牛尾山地、南西は七種山地で開まれ、中央を市川が南流し、市川低地を形成する。市川低地では流路の両岸に3~4段の河岸段丘が分布し、星形付近には自然堤防がある。

サルガク遺跡、沢構の所在する沢地区は市川西岸の低位段丘でもっとも新しい部分にあたり、サルガク遺跡（標高122m前後）から沢構（標高117m前後）にかけて、北から南へ緩やかに傾斜している。



## 第2節 歴史的環境

第1図 遺跡の位置

市川流域における人類の活動は旧石器時代から始まっており、現在のところ市川町内では旧石器時代の遺跡は発見されていないが隣接する神河町では福本遺跡（6）でこの時期の遺物が確認されている。縄文時代の遺跡も調査例が少ないため、内容が判明しているものとして僅かに先述の福本遺跡と淵ノ坪遺跡（39）が挙げられる。福本遺跡では早期押型文土器が出土しており、淵ノ坪遺跡では縄文時代後期中業を中心として、一部縄文時代晩期・弥生時代後期のものを含む土坑群が検出されている。

弥生時代にはいると町内でも遺跡数が増加する。鶴居遺跡（13）では前期の土器が出土し、中期から後期の土坑、後期の住居跡などが検出されている。坪ノ内遺跡（23）でも土坑や井戸が検出され、仏田遺跡（36）、坂戸遺跡（24）でもこの時期の遺構が検出されている。

古墳時代にはいると前の時代から継続して集落が営まれるとともに、町内でも古墳の築造が始まる。現在のところ、前期に属する古墳としては全長27mの前方後円墳である観音寺山古墳（15）が知られている。観音寺山古墳は盜掘を受け、副葬品は不明であるが4世紀をくぐらないと考えられる竪穴式石室を持つ。直径20mの円墳である倉谷古墳（21）は主室部が竪穴式石室で、発掘調査により鐵劍・鐵刀・鐵鎌などが出土しており、5世紀のものと考えられている。後期になると町内各所に横穴式石室を主室部とする古墳群が形成される。未調査ではあるが山王1号墳（7）、よりど谷古墳群（34）、大谷古墳（19）等で10m程度の長さを持つ横穴式石室が確認されている。この時期の古墳で数少ない調査例である山王2号墳（8）は、片袖の横穴式石室で追葬が認められ、副葬品として金銅製圭頭大刀柄頭、金銅製耳環、鐵製轡、鐵鎌、須恵器が出土している。

古墳時代の集落としては鶴居遺跡、坪ノ内遺跡が赤生時代に引き続き営まれ、古墳時代前期・後期の堅穴住居が検出されている。なお、両遺跡では山陰系帳形土器が出土している。また、寺田遺跡（35）や垣添遺跡（25）でもこの時期の住居が多数見つかっている。

奈良時代から平安時代には、この付近は現都名の淵源となった神塙（神前）郡に含まれる。遺跡としては前述の鶴居遺跡で奈良時代・平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物が30棟以上確認されている。また、今回報告する沢構（2）においても墨書き器等が多数出土しており、サルガク遺跡から沢構の一帯では圃場整備に伴う発掘調査の際に律令期の遺物が多く見つかっている。また、サルガク遺跡に近接して県指定の経筒が埋納されていた山王経塚（11）も営まれていた。また、中筋遺跡（29）では平安時代後期の大型建物が見つかっており、官衙関連遺構である可能性がある。笠形山山麓には平安時代には建立されていたと考えられる笠形寺およびその鎮守である笠形神社があり、付近一帯で草宇の礎石や陶器の散布が認められ、山岳信仰の中心地として機能していた。

平安時代末に神前郡は市川を境に神東郡・神西郡に分かれる。現在の町域の内、神東郡には田中庄、世賀庄、牛尾庄、川辺郷（川述北条）があり、神西郡には永良庄、新野庄、甘地郷があったと考えられる。うち、田中庄（37）、永良庄（18）にあたる地区では条里が残されている。

中世になると谷平野も含め、開発が進み、町内各所にこの時期の遺物が散布する地点が認められる。その中で集落遺跡と考えられるものは戸安遺跡（42）、馬塚遺跡（27）等があげられる。戸安遺跡で鎌倉時代から室町時代のものと思われる掘立柱建物4棟が調査され、馬塚遺跡では室町時代のものと考えられる掘立柱建物7棟と溝・土坑が見つかっている。

また、中世～近世にかけて、この地が播磨と但馬を結ぶ要衝にあることから、様々な勢力が盤踞することとなり、その結果多くの城館が築かれることとなった。寺前城（3）、柏尾城（柏尾山城）、鶴居城、星形陣屋（星形構）、亀山城、千束城、谷城、奥城、河辺城、瀬加山城、クゴ城、御室城等を挙げることができる。ただし、調査例は少なく今回報告する沢構以外には、クゴ城跡で掘立柱建物3棟、柵列、土坑が調査されている程度である。

（鎌）

周辺遺跡一覧表（番号は第2回と一致する）

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	サルガク遺跡	古墳時代～中世	10	星形陣屋	近世	31	龜山遺跡	中世
2	芦原遺跡	古生時代～晩世	17	谷城	中世	32	東川山遺跡	古墳時代
3	寺前城跡	中世	18	永良莊草平	古墳時代	33	花原1～4号塚	古墳時代
4	柏尾城跡	中世	19	大谷吉復	古墳時代	34	よりど谷古墳群	古墳時代
5	延木津浜家塚聚落	近世	20	南城跡	古墳時代	35	南原遺跡	古生時代～平安時代
6	4・5号塚	平安時代～奈良時代	21	合谷古墳	古墳時代	36	仏山遺跡	鎌倉時代
7	山王1号墳	古墳時代	22	美濃城	中世	37	北川中条墓	古墳時代
8	山王2号墳	古墳時代	23	林ノ内遺跡	古墳時代	38	河辺城跡	中世
9	山王3号墳	古墳時代	24	坂ノ岸遺跡	古生時代、中世	39	源ノ岸道路	鎌文時代～平安時代
10	山王4号墳	古墳時代	25	足利遺跡	古生時代、中世	40	瀬加山遺跡	朝町時代
11	山王井戸	平安時代	26	下森城跡	中世	41	クゴ城跡	室町時代
12	鶴居城跡	中世	27	馬塚遺跡	室町時代	42	戸安遺跡	鎌倉時代～(?)朝町時代
13	鶴居遺跡	古生時代～中世	28	池上遺跡	古墳時代～平安時代	43	御室遺跡	中世
14	堅穴城	中世	29	中筋遺跡	古生時代～平安時代			
15	鶴居山古墳	古墳時代	30	黒川山遺跡	中世			

第1表 周辺遺跡一覧表



第2図 周辺遺跡分布図

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

一般県道長谷市川線道路改良事業に伴い、平成4年度に分布調査を実施した。その結果、沢地内の字サルガク・字カマエの広い範囲で遺構・遺物が確認された。字サルガクについては、平成6年度に確認調査を実施し、中世の遺跡が存在することが明らかになったため、サルガク遺跡と命名し、平成7年度と平成10年度の二度にわたって本発掘調査を行った。

字カマエについては平成8年度に確認調査を行い、城館の存在が推定されたため、沢に所在する構ということで「沢構」と仮称した。そして、平成9年度と平成10年度に本発掘調査を実施し、その際に遺跡名を沢構と命名した。その後、兵庫県教育委員会が発行した『兵庫県遺跡地図』(平成12年3月)では遺跡名が地元によるものか「下沢館跡」に変更されているが、本報告では沢構の呼称を用いる。

### 第2節 発掘調査の経過

前節でも述べたが、サルガク遺跡・沢構の調査は平成6年度から行われた。各調査の担当者、調査期間、調査面積は以下のとおりである。

#### 1. 確認調査

##### サルガク遺跡

調査番号	940128
調査担当者	山上 雅弘 所崎 明雄
調査期間	平成6年5月10日～5月16日
調査面積	136m <sup>2</sup>

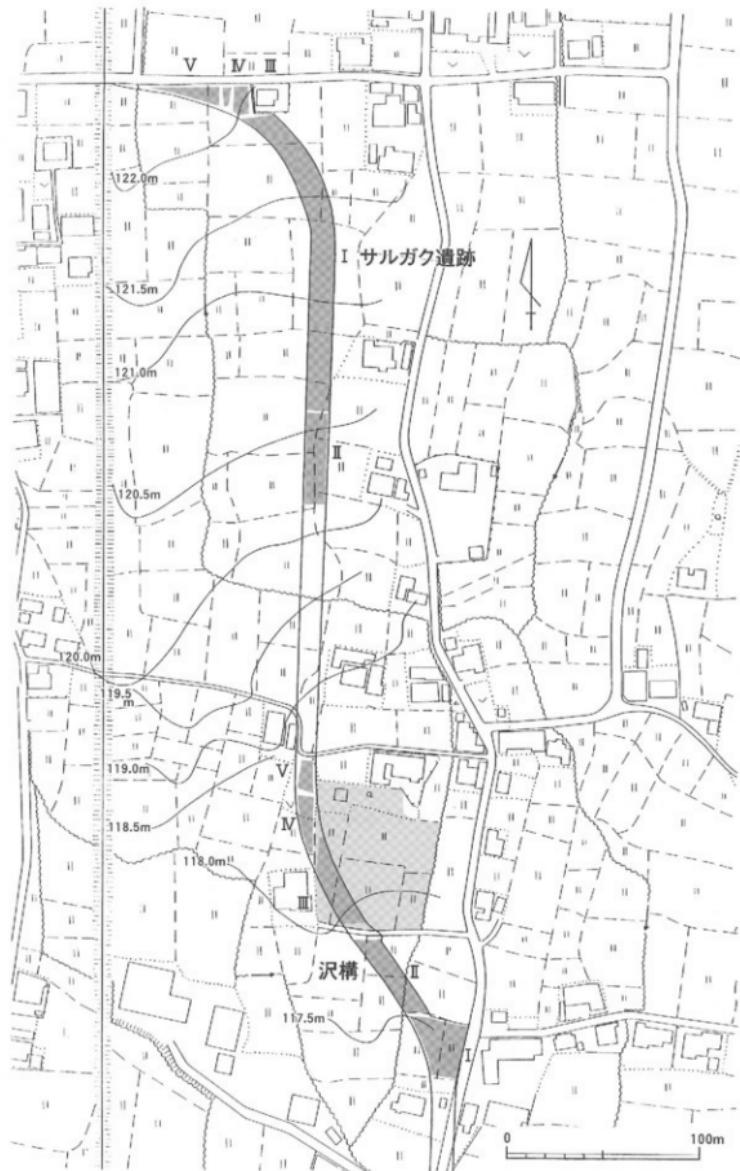
##### 沢構

調査番号	960452
調査担当者	山上 雅弘
調査期間	平成9年2月25日
調査面積	32m <sup>2</sup>

#### 2. 本発掘調査

サルガク遺跡（第1次） 本報告でサルガク遺跡のI・II区と呼称する部分の調査である。

調査番号	950290
調査担当者	山上 雅弘 服部 寛
調査期間	平成7年10月18日～平成8年1月19日
調査面積	2,207m <sup>2</sup>



第3図 調査区の配置

サルガク遺跡（第2次） 本報告でサルガク遺跡のⅢ～Ⅴ区と呼称する部分の調査である。

調査番号 980065

調査担当者 鐘 英記 服部 寛

調査期間 平成10年5月25日～7月17日（沢構2次も含む）

調査面積 325m<sup>2</sup>

沢構（第1次） 本報告で沢構のⅠ・Ⅱ区と呼称する部分の調査である。

調査番号 970419

調査担当者 鐘 英記 池田 征弘 野村展右

調査期間 平成10年1月29日～年3月24日

調査面積 1,205m<sup>2</sup>

沢構（第2次） 本報告で沢構のⅢ～Ⅴ区と呼称する部分の調査である。

調査番号 980064

調査担当者 鐘 英記 服部 寛

調査期間 平成10年5月25日～7月17日（サルガク遺跡第2次も含む）

調査面積 761m<sup>2</sup>（沢構） 325m<sup>2</sup>（サルガク遺跡）

### 第3節 整理作業の経過

サルガク遺跡、沢構の整理作業は、調査時に遺物の洗浄などを行ったあと、平成18年度より報告書刊行に向けた作業を開始した。

#### 平成18年度

埋蔵文化財調査事務所および魚住分館において、遺物のネーミング、接合補強、遺物実測の準備作業を行う。

担当課長補佐 岡田章一 主査 藤田 淳

#### 平成19年度

考古博物館において、図面のレイアウト、遺物の実測、復原、写真撮影、図面のトレース、原稿執筆、編集作業を行い、報告書を刊行する。

担当課長補佐 岡田 章一

主任技術員 岡崎 輝子 伴 悅子 岸野奈津子

(續)

## 第3章 サルガク遺跡

### 第1節 調査の概要

I・II地区（平成7年度）およびIII～V地区（平成15年度）を調査した。調査範囲は小字「サルガク」の範囲をほぼ南北に縦断する。調査区の延長は200mで、北端が標高122m、南端が標高119mを測る。南北の高低差が3mはあるが周囲は緩やかな傾斜を持つ地形のため、大きな傾斜を意識することはない。

サルガク遺跡の調査ではこのほか市川町が実施した（平成5年12月14日～平成6年2月8日、面積合計280m<sup>2</sup>）平成5年度の圃場整備（農林事業地域改善対策事業）に伴う調査がある。この調査では奈良時代～平安時代前期及び中世（13世紀）前期の遺構・遺物を検出している。自然流路と見られる幅3m、深さ30～50cm規模の遺構が検出され、奈良時代の須恵器が多数出土した。

今回の調査によってサルガク遺跡から出土した遺物はコンテナ2箱分で、大別すると弥生時代・古代・中世前半の3時期のものに分けることができる。

調査地の基本層序は耕作土・黒色極細砂層・黄色極細砂層（シルト質）・礫層の順になっている。黒色極細砂層は通称クロボクと呼ばれる火山灰土である。しかし、表層は耕作土として土壤化が進み、下層についても大半が2次的な堆積物と思われる。礫層は人頭大のやや摩滅したもので、河川中流域に認められる堆積物である。この礫層はII地区南側で観察した結果によると、層厚約1.0m以上を測る。

（山上）

### 第2節 遺構

#### I地区（図版1・3：写真図版4～6）

I地区で検出された遺構は掘立柱建物5棟・柱穴・土坑・溝などである。柱穴は調査区全域に渡って検出され、広い範囲に集落が存在したことが明らかとなった。また、広く検出された柱穴群は大半が集落を構成する建物に伴うものと考えられるが、これらの柱穴は北側がSB01までの地区、中央がSB02・03からSB04までの地区、南側がSB05・06およびB地区北側の地区の3箇所に分けられる。

このうち、SB01及び周辺の柱穴に奈良時代の須恵器細片が出土するものがある。このため、北側では古代集落の広がりも推測される。一方、多くの建物の周辺からは13世紀前後の土器が出土する。このため掘立柱建物や柱穴の時期は大半がこの頃のものと推測される。また、中世の土器は調査区北端でも出土する。このため北側では奈良時代と中世の2時期の集落が存在することが想定される。

#### I地区SB01（図版4：写真図版7）

調査区の北側で検出された建物で南北2間、東西2間分が検出された。検出範囲での規模は南北4.4m、東西4.4mである。柱間は2.0～2.3mを測り、柱穴は平面円形で直径30～40cmである。柱穴の深度は10～15cmと浅く、残存状況は良好とはいえない。なお、P10からは奈良時代の須恵器細片が出土し、須恵器杯蓋（6）は建物周辺からの出土である。しかし、柱穴の特徴からするとこの建物は中世段階と考えるのが妥当である。

#### I地区SB02（図版4：写真図版7）

本調査区で唯一全体が検出できた建物で、南東側でSB03と重なる。建物の棟方向は南北を向くもので、桁行3間、梁行3間の側柱建物である。建物の規模は桁行8.7m、梁行6.0m、面積52.2m<sup>2</sup>を測る。平面

プランは南梁行がやや狭くなり、隅柱以外の柱並びは整然としない。ただし、梁行北辺のうちP240・234の間は搅乱によって削平されている。

#### I 地区SB03（図版4：写真図版7）

SB02の南東側で検出された建物で、東側は調査区外に伸びる。検出範囲では南北3間、東西2間が検出された。規模は南北5.2m、東西2.6mを測る。柱間は1~2mであるが、東西辺は1m前後と狭いのが特徴である。

#### I 地区SB04（図版5：写真図版8・10）

SB02・03の南側で検出された建物で、中央を大きく搅乱坑によって破壊される。さらに東側は調査区外に伸びる可能性がある。検出範囲での規模は南北4間、東西3間で、規模は南北5.6m、東西4.0mを測る。柱間は1.2~1.7mで、全体に比較的狭い特徴がある。柱穴は円形のものが多く、直径30~50cm前後を測る。

#### I 地区SB05（図版5：写真図版9・10）

南側で検出された建物で、大半が調査区西側に伸びるために詳細は不明である。南北3間、東西1間が検出された。規模は南北5.7m、東西2.0mを測る。柱間は1.7~2.0mで、柱穴は円形のものが多く、直径30~50cm前後を測る。遺物はP403から土師器小皿（1）・瓦質土器羽釜（3）、P405からは土師器壺（4）・須恵器鉢（5）などの遺物が出土した。

#### I 地区SB06（図版5：写真図版9・10）

調査区南端で検出された建物で、一部が検出された。北辺以外はさらに調査区外に延びる。検出範囲では東西辺が3間分、南北辺が1間で、規模は東西6.2m、南北1.7mを測る。柱間は1.7~2.5mで、柱穴は平面円形、直径20~30cmと小ぶりなものである。

#### I 地区SK01（図版6：写真図版7）

南北に長軸方向をもつ楕円形の土坑である。長軸1.5m、短軸1.35m、深さ0.43mを測る。内部からは土師器片および長頸壺（7）が出土した。これに接合する破片がSD01でも出土している。

#### I 地区SKD01・02（図版6：写真図版7）

調査区の北寄りで、東西方向に横断して検出された。平行して流れる構であるが、2本は湾曲した方向を向くため西側で合流する可能性があるが、搅乱坑のために詳細は不明となっている。

SD01は何本かの構が流れた痕跡で、中ほどでは断面の観察によって南北の2本の溝が切りあうことがわかっている。規模は幅2.0~2.8m、深さ0.7~0.9mを測る。溝は蛇行しており断面形状も一定ではないので自然流路である可能性が高い。出土遺物は須恵器長頸壺（7）・壺（8）があり、これらから溝の時期は古代と考えられる。

SD02は幅1.1m、深さ0.6mの規模で、断面形状は台形に近い溝である。ややカーブするが、SD01に比べると全体的には直線的に流れ断面形状も一定であるため、人工的な構の可能性が高い。埋土の状況からSD01と同じく古代のものと推定される。

#### I 地区SKD03（図版4：写真図版7）

調査区中ほどで検出された溝で、幅0.6m、深さ0.1mである。検出箇所では中ほどで屈曲しているが、搅乱のため、この周辺の詳細は不明である。断面形状が一定しないことからすると自然流路の可能性が高い。流下方向は東から西側へ向けて流れている。

## II地区（図版4：写真図版11・12）

本地区では柱穴・溝・土坑などが検出された。ただし、調査区を縱断して擾乱がおこなわれ、帯状に遺構面を掘削する。このため、遺構の様相を把握する上では良好な状況ではない。

遺構群の中で最も多数検出されたのは柱穴であるが、北側に集中して分布する。残念ながら上記の擾乱などのため、建物を復元できるものはなかったが、状況からみて集落域の建物の柱を構成した柱穴がかなり含まれていることは確実である。また、この柱穴の集中域はI地区の集落域の末端に位置するもので、I地区南部の集落域を確認できた意味で意義があったといえる。

調査区南側は比較的の遺構が希薄になるが弥生時代および古代の上器片が多く出土している。また、柱穴が希薄になる周辺から南側では傾斜地形となり、沢横に向けて緩やかに下る。この傾斜地形の周辺には黒褐色上層の堆積が厚くなり、下層には疎混じり層が厚くなり、南端では顕著な湧水が見られた。

## II地区柱穴群（図版4：写真図版12）

多くの柱穴が検出されたが北側に分布が集中する。大半が平面円形ないし椭円形で、直径30~60cm前後のものである。柱穴内部からの遺物出土はほとんど見られないが、時期はI地区と同じ13世紀前後のものと思われる。

## II地区SD01

調査区中ほどで検出された溝で、幅1.5~0.6m、深さ0.2mほどの規模を持つ。出土遺物には須恵器甕（14）、須恵器壺底部片（15）がある。

## II地区SD02

調査区中ほどで検出された溝で、幅0.6m、深さ0.2mほどの小型のものである。出土遺物には弥生土器甕（9）がある。

## II地区SR01（図版4：写真図版12）

調査区南端で見つかった、自然流路で幅7~15m、深さ50~80cm前後を測る。内部には円礫が堆積し湧水が激しく湧き出ていた。出土遺物は土師器杯A（10）、七郎器高台付椀（11）などがある。長く存続した流路と思われるが、少なくとも奈良時代には開口して水の流れがあったと思われる。

（山上）

## III~V地区（図版：写真図版14・15）

平成10年度の調査は、用水路確保のため調査対象地をIII~V区に分割して調査した。調査地点の東端にあたるIII地区を中心と柱穴状の遺構を検出した。

## III地区SK01（図版8：写真図版16）

調査区西辺中央にあり、一部が調査区外に伸びる。幅0.56m検出面からの深さは0.14mである。埋土は暗褐色シルトである。

## III地区SK02（図版8：写真図版16）

調査区西辺にあり、一部が調査区外に伸びる。幅0.56m検出面からの深さは0.38mである。埋土は下層ににぶい黄褐色の細砂～粗砂が堆積し、上層は暗褐色シルトで埋まっていた。

## III地区SK03（図版8：写真図版16）

調査区西辺南端にある。SK04に接し、ピットに切られる。調査区外に伸びる。幅0.65m、検出面からの深さ10cmである。灰黄褐色細砂～細礫で埋められていた。

### III地区SK04（図版8：写真図版16）

調査区西辺南端にある。SK03に接し、ピットに切られる。径0.74mの不整形な土坑で、検出面からの深さは8cm、下層ににぶい黄褐色の細砂～粗砂が堆積し、上層は暗褐色シルトである。

### III地区SK05（図版8：写真図版16）

調査区南半にある。長軸1.0m、短軸0.64mの歪んだ楕円形、検出面からの深さは12cm、埋土は下層ににぶい黄褐色の細砂～粗砂、上層に暗褐色シルトが堆積する。

### III地区SK06（図版8）

調査区西南にある。SK07を切っていた。直径0.28m、検出面からの深さ24cmで埋土は暗褐色シルトである。

### III地区SK07（図版8）

調査区西南にある。SK06に切られる。1.3m×1.5mの隅丸方形で、検出面からの深さは14cmである。埋土はにぶい黄褐色の細砂～粗砂である、

### III地区SK08（図版8：写真図版16）

調査区東南にある。1.3m×1.5mの隅丸方形で、検出面からの深さ14cmである。褐色シルトの上から暗褐色シルトが切り込む。

### III地区SK09（図版8：写真図版16）

調査区西南にある。長軸0.74m短軸0.3mの長橿円形で、検出面からの深さは14cm、埋土は暗褐色シルトである。

### IV地区SK10（図版9）

調査区西辺にあり、大部分を擾乱で削平されている。検出面からの深さは0.16mで、埋土は黒褐色シルトである。

### IV地区SK11（図版9）

調査区西辺にあり、大部分を擾乱で削平されている。検出面からの深さは10cmで、埋土は黒褐色シルトである。

### IV地区SK12（図版9）

調査区西辺にあり、大部分を擾乱で削平されている。検出面からの深さは12cmで、埋土はにぶい黄褐色シルトである。

### V地区SK13（図版9：写真図版16）

調査区西端にあり、調査区外に伸びる。南北幅は0.7m、検出面からの深さは16cmで埋土は黒褐色シルトである。  
(鐵)

## 第3節 遺物

### 1. 土器（図版32：写真図版33）

I地区から出土した土器は中世のものと古代のものがあるが、細片が多く時期を知りえるものは少ない。図化できたのはわずかに8点である。II地区から出土した土器は弥生時代・奈良時代・中世のものがある。弥生時代の土器はSD02から出土した甕11の1点がある。古代の土器はSR01から出土した土師器杯10・高台付椀11、SD01から出土した須恵器甕15・甕14、包含層から出土した土師器杯12・須恵器杯13がある。中世の土器は包含層から出土した土師器甕16の1点である。III地区的出土遺物は少数で細片が多い。本報告では丹波焼甕17のみを図化した。

#### I 地区SB05 P 403

1は土師器小皿である。手づくね成形で、体部が短く立ち上る。口縁端部は丸く仕上げる。3は瓦質土器羽釜である。口縁部外面に綺かな凹線が施され特徴的である。

#### I 地区SB05 P 405

4は土師器壺である。壺型のもので外面に右上がりの平行タタキが観察される。12世紀末～13世紀前半頃のものである。5は須恵器鉢である。口縁端部が断面三角形状に肥厚し、外面に向けて面を持つ。全体に薄いつくりである。

#### I 地区 P 406

2は土師器中皿である。丸く立ち上がる器形のもので、口縁部のみを横ナデする。内外面に指頭痕跡を残す。

#### I 地区SK01

7は須恵器長頸壺である。頸部に2条の凹線を持つ、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部をすんなりと終える個体と思われる。なお、7はSD01からも破片が出土している。

#### I 地区SD01

8の須恵器壺底部片および7の須恵器長頸壺の破片（詳細はSK01に記述。）がある。8はハの字に大きく踏ん張る高台を有し、腰部はやや湾曲しながら立ち上がる。なお、7はSK01からも破片が出土している。

#### I 地区包含層

6は須恵器杯蓋である。大井部がやや膨らみ、口縁端には小さく屈曲する端部をもつ個体である。つまみ周辺は破片を欠くが、おそらく扁平なつまみを持つ個体と推測される。

#### II 地区 S D01

14は須恵器壺である。口縁部の小片で外反する口縁部外面に面を持つ。頸部はやや短く、器壁がやや厚いのが特徴的で胎土も粘りがある。頸部口縁部直下にタタキ痕跡（おそらく平行タタキ）が僅かに観察される。15は須恵器壺底部片である。長頸壺の可能性があるが個体上半を欠くため詳細は不明である。ハノ字に大きく聞く高台を持ち、腰部をななめ上方に立ち上げる。

#### II 地区 S D02

9は赤生土器壺の底部片である。外面は密なミガキを施し、内面は削り痕跡が顕著に残る。弥生時代後期の製品である。

#### II 地区 S R01

10は土師器杯である。底部径が比較的大きく体部を急激に立ち上げ、口縁部を外反させておえる。外面は細かくミガキを施し、器面調整を行う。11は土師器高台付椀である。この2点は10世紀のもので書写山円教寺薬師堂（\*1）出土遺物などに類例が見られる。

#### II 地区包含層

12は土師器杯である。11とほぼ同時期のもので、やや器高が高く、外開き気味の体部を持つ。内面に墨の痕跡が残される。13は須恵器杯である。杯Aタイプのもので、腰部際に小さく断面台形の高台が付く。体部が垂直に近い角度で立ちあがる個体で端部は尖らせ気味におえる。16は土師器鏹である。ハの字に聞く体部を有するもので体部下半にわずかに右上がりの平行叩きの痕跡を残す。体部上半の叩き痕跡はナデによって消されている。口縁部は棒状に肥厚し、端部を丸く納める製品である。形状や微細な

胎土から16世紀代の製品である。

### Ⅲ地区包含層

17は丹波燒窯である。肩部から内傾気味に立ち上がり、短い頸部からくの字に折れる口縁部を持つ。口縁部はN字状口縁が退化したもので、端部を軽く上方につまみ、上面をナデて凹線状にする。外面には透明の自然釉が観察される。内に粘土紙痕跡が観察され、不定方向のナデ調整の痕跡が残る。稻荷山期の製品と考えられ、時期的には14世紀代のものである。

(山上)

## 2. 銭貨（図版54：写真図版34）

サルガク遺跡から出土した銭貨（\*2）は4枚で、いずれもⅡ区北側の包含層からの出土である。M1は天聖元寶（初鑄年1023）、M2は寶祐通寶（初鑄年（1086）、M3は元豐通寶（初鑄年1078）、M4は紹聖元寶（初鑄年1094）である。いずれも北宋錢で、直径2.4cm～2.5cm、厚さ0.1cm前後を測る。

(山上)

## 3. 石製品（図版53：写真図版51）

S1は両端に印面を持つ右製の印で「大」・「正」と刻む。S2は方柱状の砥石で、使用面は2面罫められる。いずれもⅠ地区包含層からの出土であるため、時期は不明である。

(鐵)

## 第4節　まとめ

サルガク遺跡では弥生土器の土器、奈良時代前後の柱穴・溝および遺物、鎌倉時代前後の掘立柱建物6棟・柱穴・溝・土坑および遺物などの3時期のものが検出された。

弥生時代はⅠ地区から細片数点が出土し、Ⅱ地区的南側のS D02から弥生時代後期の甕が出土した。さらにⅡ地区では包含層にも弥生土器の細片が出土しており、付近に弥生時代の遺跡が存在した可能性が高い。

奈良時代は調査区北端で土器が出土し、S D01・02およびS K01などの遺構の検出がある。また、平成6年度の圃場整備（市川町教育委員会）時の調査で多くの遺物が出土したことや、南側の沢構の調査でも奈良時代の墨書き土器が出土している。このことから、当該時期の遺跡の広がりはかなり広域にわたることが予想され、調査区周辺までその範囲が広がることが推測される。ただし、調査区の範囲では遺構の集中は認められず、集落の周縁部を調査したという印象が強い。

鎌倉時代は5棟の建物が検出されたが、柱穴群の分布と合わせて検討しても、これらは散在して分布するもので、散村的な景観をもつ。検出された建物のうちS B02が面積62.2m<sup>2</sup>と最大であるが、他の建物は小規模なもので占められた。さらにこれらの建物は柱並びが悪く、柱穴が小規模で、遺構に伴う遺物が少ない点からすると、零細な人々が住んだ集落であると思われる。時期は出土遺物から概ね13世紀前半頃であろうと推測されるが、ただし16世紀代の土師器焼16や、14世紀代の丹波燒窯17などの遺物の出土であることからすると、付近には中世の長い期間に渡って集落が存在した可能性も残される。このような点を考慮すると調査区周辺では場所を移動しながら、長く集落が存続したのではないだろうか。

(山上)

(1) 水口富夫「薬師堂出土遺物について」『開館3周年記念特別展－1000年の歴史を秘める一書等山円教寺』兵庫県立歴史博物館 昭和61年1986

(2) 銭貨に関する水井久美男編「中世の出土銭－出土銭の調査と分類」兵庫県埋蔵文化財調査会1994によった。

## 第4章 沢構の調査成果

### 第1節 I・II地区の遺構と遺物

#### 1. 概要

位置 調査地は市川の氾濫原の上に堆積したシルト質土の扇状地状地形に位置している。澤構からは堀の想定位置を挟んで南側に位置している。

地区割り 南北に流れる用水路をはさんで東側をI地区、西側をII地区とした。

基本層序 基本的には表土直下の黄色シルト質極細砂が遺構検出面である。II地区南部では井戸付近で一部砂礫層が露出し、I地区西部ではシルト質土下30cm前後で砂礫層に達し、微高地の基盤をなしているものと思われる。この微高地上のI地区西半やII地区では遺構面はある程度削平を受けているものと思われる。I地区東半は微高地より地形が低くなり、青灰色シルト質極細砂の上に弥生時代以降の有機物を多く含む黒色シルト質極細砂が堆積している。現水路を含めて地形が低いII地区東端でもI地区東半と同様に最下層に黒色シルト質極細砂が堆積し、洪水の影響を受けながら埋積していったようである。

遺構の概要 I地区は西部が微高地となり、南東部に向けてゆるやかに下がっている。北東部に向けてはやや高くなっている。II地区は北部が高く、南東に向かって低くなっている。弥生時代後期の不整形土坑群、奈良時代の溝、中世の溝・土坑・井戸・時期不明の掘立柱建物跡・ピットを検出した。

弥生時代後期の遺構は不整形土坑群のみで、I地区東半の低地部のほぼ全面で検出された。総数は切れ合ひなどがあり、よくわからないが、150基程度はあるものと思われる。平面形は形の整わない橢円形・長楕円形のものが多い。規模は小さいもので径50cm、大きいもので長径4m、短径2m程度のものがある。深さは深いもので40cm程度である。埋土は有機物を含む黒色粘質土あるいは、それにベースの青灰色～黄色粘質土のブロックが混じるものが多い。人工的に埋め戻したものではなく、自然に堆積したものと考えられる。埋土中からは弥生時代後期の上器が出土している。

奈良時代の遺構はI地区東部で検出された溝(SD01)と土坑(SK10・11)である。溝は南北方向に検出され、弥生時代後期の不整形土坑群を切りこんで造られている。SD02はSD01に切られる溝であるが、遺物が出土していないことから弥生時代後期を廻る自然流路と考えられる。

中世の遺構はI地区北西部で検出された溝(SD03・04)や土坑などとI地区西南部やII地区で検出された井戸(SE01)などがある。南北に流れるI地区SD04はI区とII区を分けている水路の旧水路と考えられる。I地区SD03はI地区SD04に直交する幅1mの溝である。SD03・04で囲まれる範囲は土坑(SK31)が検出されているのみであるが、この部分に16・17世紀代の屋敷地が存在するものと思われる。I地区SD03の南側では16世紀の井戸(SE01)や時期がよく分からぬピット群、掘立柱建物跡などが検出されている。この部分の微高地の幅は10数mと狭く、SD03の北側に比べれば小規模な居住空間と考えられる。II地区では削平を受けている部分が多いこともあって16世紀の井戸や江戸後期の土坑・埋甕が検出されているのみである。

#### 2. 遺構

##### (1) 弥生時代の遺構

I地区SK01(図版11)

I地区南部に位置している。平面形は橢円形を呈している。規模は長径1.2m、短径1.1m、深さ20cm

を測る。SK23との切れ合ひ関係はわからない。埋土から弥生土器甕（1・2）が出土している。

#### I 地区SK03（図版11）

I 地区南部に位置している。平面形は不整橢円形を呈しており、2つの土坑が切れあっているものと思われる。規模は長径2.1m、短径1.0m、深さ16cmを測る。埋土から弥生土器甕（3・4）が出土している。

#### I 地区SK06（図版13、写真図版20）

I 地区南部に位置している。平面形は橢円形を呈している。規模は長径2.4m、短径1.5m、深さ54cmを測る。埋土から弥生土器甕（5）が出土している。

#### I 地区SK07（図版13）

I 地区南部に位置している。平面形は橢円形を呈している。規模は長径1.9m、短径0.8m、深さ18cmを測る。埋土から弥生土器の破片が出土している。

#### I 地区SK08（図版13）

I 地区中部に位置している。平面形は橢円形を呈している。規模は長径2.1m、短径1.3m、深さ28cmを測る。埋土から弥生土器甕（6）が出土している。

#### I 地区SK15（図版13：写真図版19）

I 地区中部に位置している。平面形は橢円形を呈している。規模は長径0.8m、短径0.65m、深さ22cmを測る。埋土から弥生土器甕（7）が出土している。

#### I 地区SK21（図版15）

I 地区南部に位置している。SK68・SK70などと一連で、複数の土坑が複雑に切れあっているため個々の形状は不明瞭である。深さは30cmを測る。埋土から弥生土器甕（8）が出土している。

#### I 地区SK22（図版11）

I 地区南部に位置している。平面形は橢円形を呈している。規模は長径2.7m、短径1.5m、深さ50cmを測る。埋土から弥生土器長頭甕（9）が出土している。

#### I 地区SK24（図版13）

I 地区中部に位置している。平面形は橢円形を呈している。規模は長径1.7m、短径1.4m、深さ25cmを測る。埋土から弥生土器の底部が出土している。

#### I 地区SK26（図版14）

I 地区中部に位置している。SD01に切られれている。平面形は長細い不整形を呈している。規模は長径2.1m、短径0.9m、深さ22cmを測る。埋土の上層から弥生土器甕（10）が出土している。

#### I 地区SK27（図版14、写真図版19・20）

I 地区中部に位置している。複数の土坑が複雑に切れあっているため個々の形状は不明瞭である。深さは36cmを測る。北端部の上層から弥生土器把手付き鉢（11）が出土している。

#### I 地区SK28（図版14）

I 地区南東部に位置している。複数の土坑が複雑に切れあっているため個々の形状は不明瞭である。深さは26cmを測る。北端部の上層から弥生土器甕（12・13）・鉢（14）が出土している。

#### I 地区SK44（図版15）

I 地区北部に位置している。平面形は長細い橢円形を呈している。規模は長径2.2m、短径1.1m、深さ40cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK45（図版15）

I 地区中部に位置している。平面形は不整橿円形を呈している。規模は長径2.9m、短径2.0m、深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK47（図版15）

I 地区中部に位置している。中央の細長い土坑を中心に複数の土坑が複雑に切れあっているため個々の形状は不明瞭である。深さは30cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK52（図版15）

I 地区中部に位置している。平面形は長方形を呈している。規模は長辺1.1m、短辺1.0m、深さ15cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK55（図版15）

I 地区中部に位置している。SK56を切っている。平面形は橿円形を呈している。規模は長径1.6m、短径1.2m、深さ14cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK56（図版15）

I 地区中部に位置している。SK55に切られている。平面形は不整方形を呈している。規模は長径1.1m、短径1.0m、深さ26cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK57（図版15、写真図版20）

I 地区中部に位置している。複数の土坑が複雑に切れあっているため個々の形状は不明瞭である。深さは43cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK60（図版15、写真図版20）

I 地区中部に位置している。平面形は不整形を呈している。規模は長径2.2m、短径0.9m、深さ15cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK65（図版15、写真図版20）

I 地区南部に位置している。平面形は不整橿円形を呈し、壁面はオーバーハングしている。規模は長径2.0m、短径1.0m、深さ34cmを測る。遺物は出土していない。

#### I 地区SK67（図版15、写真図版19）

I 地区南部に位置している。平面形は橿円形を呈している。規模は長径0.7m、短径0.5m、深さ24cmを測る。埋土上層から弥生土器焼（15）が出土している。

#### I 地区SK68（図版15、写真図版20）

I 地区南部に位置している。複数の土坑が複雑に切れあっているため個々の形状は不明瞭である。SK21には切られているようである。深さは30cmを測る。埋土から弥生土器の破片が出土している。

#### I 地区SK70（図版15、写真図版20）

I 地区南部に位置している。複数の土坑が複雑に切れあっているため個々の形状は不明瞭である。深さは48cmを測る。埋土から弥生土器の破片が出土している。

### （2）奈良時代の遺構

#### I 地区SK10（図版11）

I 地区中部に位置している。平面形は不整円形を呈している。規模は直径60cm、深さ20cmである。埋土から土師器底部（16）が出土している。

#### I 地区SK11（図版11）

I 地区中部に位置している。SK27を切っていると思われる。平面形は円形を呈していたと思われるが、北半部はよく分からぬ。規模は直径0.9m、深さ47cmである。埋上から須恵器皿（17）が出土している。

#### I 地区SD01（図版16、写真図版21）

I 地区東部に位置し、弥生時代の土坑群やSD02を切っている。溝は東北から南西へ流れている。幅は90～170cm程度で、深さは27cm前後である。埋土の下層は粗砂が多く、水がよく流れているようである。埋上からは須恵器皿（18）、弥生土器破片が出土している。

### （3）中近世の遺構

#### I 地区SD03（図版16、写真図版22）

I 地区西北端に位置している。溝はSD04に直交して東側へ延び、16m程度の場所で途切れるか、北へ折れ曲がるものと考えられる。断面は新形に近い部分もあり、しっかりと掘り塗められている。幅は80～90cm程度で、深さは30～35cm程度である。埋土からは16～18世紀の陶磁器（27～35）が出土している。

#### I 地区SD04（図版16、写真図版23）

I 地区西北部に位置している。溝はすぐ西側に位置する現用水路に平行して北から南へ流れている。幅は2.5m程度で、深さは40cm前後である。後に溝東半部を埋め、東岸に右堰を設け、溝幅を約1mに狭めている。埋土からは16・17世紀の陶磁器（36～51）、腰刀筒金具（M4）が出土している。

#### I 地区SK17（図版17）

I 地区西部に位置している。平面形は梢円形を呈している。規模は長径1.7m、短径1.35m、深さ22cmを測る。埋土から瀬戸焼皿（20）が出土している。

#### I 地区SK18（図版17）

I 地区西部に位置している。平面形は隅丸長方形を呈している。規模は長径2.3m、短径1.6m、深さ20cmを測る。埋土から十師器小皿（21）、犬形土製品（22）が出土している。

#### I 地区SK19（図版17）

I 地区南部に位置している。平面形は不整梢円形を呈している。規模は長径4.9m、短径3.3m、深さ15cmを測る。埋土から土師器小皿（23）、染付磁器皿（24）が出土している。

#### I 地区SK20（図版11）

I 地区西部に位置し、西半部は調査区外である。平面形は梢円形を呈しているものと思われる。深さは20cmを測る。埋土から備前焼甕の破片、鉄製楔（M6）が出土している。

#### I 地区SK31（図版17、写真図版24）

I 地区北部に位置している。東半部は調査区外である。平面形は円形を呈しているものと思われる。規模は直径1.0m、深さ45cmを測る。埋土から備前焼擂鉢（25）が出土している。

#### I 地区SK69（図版11）

I 地区南部に位置している。SK21を切っていると思われるが、形状ははっきりしなかった。埋土から瀬戸美濃焼折縁皿（26）が出土している。

#### I 地区SE01（図版17、写真図版24）

I 地区南部に位置している。円形の石組井戸で、直径70cmである。深さは60cmで、掘方の径は1.3mである。石積みの高さは40cm程度で、2・3段しか残存していない。石材は直径10～30cmの円礫が用い

られている。最下部には砂礫層を直径75cm、深さ20cm掘り込んで水溜としている。埋土から染付磁器碗(19)が出土している。

#### I 地区SB01 (図版18)

I地区南東部で検出された掘立柱建物跡である。弥生時代の土坑群やSD01を切っており、一部遺構上で検出できなかった部分が存在している。桁行2間(3.1m)×梁行2間(3.1m)の建物(SB01A)と桁行2間(3.1m)×梁行1間(2.1m)の建物(SB01B)が重複しているものと思われるが、前後関係は定かでない。桁行の北側の柱間は2.0m、南側の柱間は1.1mで、南側が短い。SB01Aの梁行の柱間は1.5mである。柱間は桁行が1.6~1.8m、梁行が1.7~1.8mである。軟弱な地盤に建てられていることから、柱穴内には礎盤石や根固めのための石がみられた。建物に伴って遺物が出土していないことから、時期はよく分からぬが、SD01を切っていることから中世頃のものと考えたい。

#### I 地区P03 (図版11)

I地区西部に位置している。直径25cm、深さ15cmである。埋土から鉄製火打金(M5)が出土している。  
II 地区SE01 (図版20、写真図版26)

II地区南部に位置している。円形の石組井戸である。直径は石組みの上面で90cm、下端で60cmである。深さは1.0cmで、掘方の径は1.5mである。石積みの高さは90cm程度で、石組みの下には、丸太材を井桁に組んで根太としている。石材は5~30cmの角礫が用いられている。地山がシルト質土から砂礫に移行する部分に設けられており、湧水は非常に多い。埋土から備前焼壺鉢(53・54)が出土している。

#### II 地区SE02 (図版19)

II地区南部に位置している。円形の素掘り井戸である。直径は1.4mで、深さは45cmである。埋土から遺物は出土していない。

#### II 地区SK01 (図版20)

II地区南部に位置している。平面形は楕円形を呈している。規模は長径4.0m、短径3.2m、深さ30cmを測る。埋土から土器小皿(55)、施釉陶器蓋(56)が出土している。

#### II 地区SK02 (図版20、写真図版25)

II地区南部に位置している。平面形は円形を呈し、底に丹波焼壺(57)が据えられている。規模は直径50cm、深さ20cmを測る。

(池田)

### 3. 遺物

#### (1) 弥生時代の土器

粘土探坑掘の埋土から出土したもので、埋土の上層から出土したものの多い。土器は体部外面にタタキを残すものが多いことからV~4期を中心とし、I地区SK28出土例のように口縁部の端面に擬凹線が認められるものはやや古いものと思われる(\*1)。

#### I 地区SK01 (図版33:写真図版35)

1・2は弥生土器壺である。1は口縁端部に面をもち、体部外面にはタテハケが施されている。体部外面中以下にはスヌが多く付着している。2は口縁端部が丸味をもつていて、体部外面には平行タタキの後、タテハケが施されているが、非常に疎らである。

#### I 地区SK03 (図版33:写真図版35)

3・4は弥生土器壺である。3は口縁端部に面をもち、体部外面にタテハケが施されている。4は体

部外面及び底部外面に平行タタキが施されている。

I 地区SK06（図版33：写真図版35）

5は弥生土器鉢である。底部外面はユビオサエ及びナデが施され、口縁部外面は摩滅している。

I 地区SK08（図版33：写真図版35）

6は弥生土器壺である。口縁端部に面をもち、ユビオサエの後ヨコナデが施されている。体部外面は平行タタキの後タテハケが施されている。

I 地区SK15（図版33：写真図版35）

7は弥生土器壺である。体部外面は平行タタキ後下半のみタテハケが施されている。底部内面はユビオサエ、底部外面はナデが施されている。

I 地区SK21（図版33：写真図版35）

8は弥生土器壺である。体部外面はタテハケが施され、ススが付着している。底部内面はユビオサエ、底部外面はナデが施されている。

I 地区SK22（図版33：写真図版36）

9は弥生土器長頸壺である。体部の膨らみが弱い。

I 地区SK26（図版33：写真図版36）

10は弥生土器壺である。口縁端部に面をもっている。体部外面には平行タタキの後、タテハケが施されているが、非常に疎らである。

I 地区SK27（図版33：写真図版36）

11は弥生土器把手付鉢である。体部中位に逆U字形の把手を2ヶ所もつものと思われる。体部内外面とも斜め方向のハケの後、下位のみヘラミガキが施されている。底部外面はナデが施されている。

I 地区SK28（図版33：写真図版36）

12・13は弥生土器壺である。12は口縁部外面に擬凹線をもっている。13は体部外面にヘラミガキが施され、体部内面はやや摩滅しているがハケの後ナデが施されているようである。

14は弥生土器鉢である。口縁部は外反し、端面に擬凹線をもっている。体部外面は斜め方向のハケの後ヘラミガキ、体部内面はヘラミガキが施されている。

I 地区SK28（図版33：写真図版35）

15は弥生土器壺である。口縁端部に面をもち、体部外面にタテハケが施されている。

（池田）

## （2）奈良時代の土器

奈良時代の土器は土坑や溝からごくわずか出土しているにすぎない。

I 地区SK10（図版34：写真図版37）

16は土師器底部である。輪高台が付いていたようだが剥離している。碗もしくは皿の底部と考えられる。内面及び口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデが施されている。

I 地区SK11（図版34：写真図版37）

17は須恵器皿Aである。底部はヘラ切りで、墨書がなされている。竹冠の文字が書かれているようである。

I 地区SD01（図版34：写真図版37）

18は須恵器皿Aである。底部はヘラ切りである。

（池田）

### (3) 中近世の土器・陶磁器

中近世の土器・陶磁器は溝、土坑、井戸などから出土しているが、I地区の溝SD03・04からは比較的多くの遺物が出土している。

#### I地区SE01（図版34：写真図版37）

19は中国産の染付碗である。いわゆる饅頭芯タイプ（碗E類）のもので、外面にアラベスク文様と2重回線を描く。

#### I地区SK17（図版34：写真図版37）

20は瀬戸美濃焼の丸皿の底部分である。濃緑色の透明釉を施釉する。

#### I地区SK18（第4図：図版34：写真図版37）

21は土師器小皿手づくねの製品で体部が丸く立ち上がり、口縁部をやや尖らせ気味におえる。

22は犬形土製品である。手びねりのもので、体長4.8cm、体高4.1cmの大型の製品である。鼻と口はへら先で瘤ませ、鼻穴は表現されない。尾は丸く粘土を貼りつけ、背中側に折る。耳は垂れた表現となる。播磨では犬形土製品は姫路を中心出土が知られる、付近では置塙城跡（姫路城）・御着城（同市）などから出土が知られている(\*2)。本遺跡出土のものは大型の手づ

くねの製品で手法は置塙城跡に近いと考えられるが、太った体形や尖り気味の鼻など個性的な個体である。

#### I地区SK19（図版34：写真図版37）

23は土師器小皿で、手づくね成形の製品である。口縁部を強くナデて屈曲させ、端部を上方につまむ。内面にはハケ日が観察される。

24は染付皿で、口縁部が外反する皿A類の製品である。内外面には草花文が描かれる。

#### I地区SK31（図版34：写真図版37）

25は備前焼播鉢で、近世Ⅰ期b段階のものである。口縁部を尖り気味につまみ、縁帯に凹線を2条施す。口縁部内面は強いナデによって稜を持ち段状になる製品である。

#### I地区SK69（図版34：写真図版37）

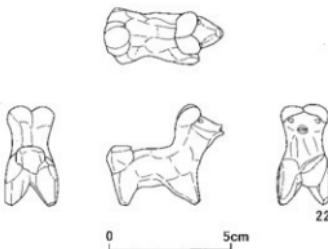
26は瀬戸美濃焼の折縁皿である。内外面に鉄釉を施し、内面には輪トチン、底部外面には3個のトチン痕跡が観察される。

#### I地区SD03（図版34：写真図版38）

27～29は唐津焼皿でいずれも底部片である。27は折縁皿で内面に砂目のトチン痕跡が残るもので、断面台形の小さな高台を持つ。28・29は基筒底の高台を持ち、29は見込みを蛇の目状に釉剥ぎする。

30～32は中国産の染付碗である。30は口縁部の小片で外面に植物文を描く。31は底部が平底になるが高台径の小さなものである。内面見込みに圓案化した鶯と花文を描く。32は底部の破片で、裏の貼るタイプである。内面に2条の圓線が観察された。

33～35は肥前系の青磁碗である。34は疊付が露胎である。肥前Ⅱ～Ⅳ期と考えられる。35は見込みが蛇の目釉剥ぎである。疊付が露胎で、砂が付着している。波佐見Ⅳ期と考えられる。



第4図 犬形土製品実測図

#### I 地区SD04（図版35：写真図版38・39）

36～39は唐津燒の皿である。36は内面に文様の一部が観察される。赤褐色の半透明釉が浸け掛けされるが高台周辺は露胎となり、見込みは蛇の目状に釉を搔き取るが周囲に砂の痕跡が観察でききる。37は折縁になる個体で、体部の外面下半は露胎である。38は口縁端部を外方に尖らせておえるもので、見込みに圓線を施す。さらに見込みには砂目の目跡が残る。緻密な胎土である。39は口縁部を外反させ、端部上面をナデによって凹線状にし、内面の見込みには圓線状の段が付く。釉は灰白色の半透明釉である。40は備前焼の溜鉢である。口縁部が厚めで、口縁部に草花文を描く。

42は土師器小皿である。底部糸切のもので体部は外方に湾曲しながら立ち上がる。口縁部に煤痕跡を残す。

43は肥前系の施釉陶器碗である。高台及び高台内には露胎である。高台内には「清水」と思われるスタンプが押されている。肥前III期である。

44は肥前系の施釉陶器鉢である。外面には薺灰釉が掛けられ、縁部内面に銅綠釉が垂らされている。肥前II～III期である。

45は丹波焼壺である。内外面とも赤土部が塗布され、外面には自然釉が掛かっている。長谷川分類III A3b類で17世紀中期～後期頃（III期）のものと考えられる。

46・47は丹波焼溜鉢である。46は大平分類I 1類で、17世紀後半と考えられる。47は単目が7本1単位である。

48は肥前系染付磁器碗である。疊付は露胎で、高台内に「大明嘉製」？の銘款をもつている。肥前III期である。49は肥前系染付磁器皿である。疊付は露胎である。肥前IV期である。

#### I 地区包含層（図版35）

50は中国産の青磁碗である。外面に鍋が付かずに観察される。稜線はすでに退化するが、葉は陽刻される。

51は唐津焼皿で、体部中位で外面に折れる折縁皿である。

52は中国産の染付碗で、底部片になる。器壁の厚い個体である。内面底体部の境に圓線が施される。

#### II 地区SE01（図版36：写真図版40）

53・54は備前焼溜鉢で近世I期b段階のものである。53は口縁部を上方に発達させ端部を尖らせて終えるものである。端部内面のナデは強く施されるが、内面下半に稜を持つ。54は底部片である、外面にクロクロ痕跡を顕著に残す個体である。単目は8本単位の櫛描きで、放射状にも施している。やはり近世I期段階のものと推測される。

#### II 地区SK01（図版36：写真図版40）

55は土師器小皿である。手づくねの製品で、体部上半を横ナデし、口縁部端部をつまんでやや外反させる。

56は施釉陶器壺である。天井部外面のみ透明釉が施釉されている。

#### II 地区SK03（図版36：写真図版40）

57は丹波焼甕である。外面には赤土部が塗布され、自然釉が掛かっている。内面には所々自然釉が掛かっている。II地区包含層（図版36：写真図版40）

58は備前焼の甕である。口径52.8cmと大型のもので、頭部から口縁部の破片である。口縁部は頭部からくの字に折れ、やや小ぶりな玉縁を作る。玉縁は扁平になるが外面に凹線はない。ただし、頭部は外反しながら拡張するが、湾曲せず直線的に立ち上がる。16世紀中頃以降の製品と考えられる。

59も備前焼溜鉢の口縁部片で、注ぎ口の破片である。時期は他の破片と同じく近世I期b段階前後のものである。口縁内面に強いナデが施され、口縁部が肥厚し、かつ内面が段状になり、端部には稜をもつ。

60は染付磁器碗である。底部外面は露胎である。見込みに「大明成」の銘款が入れられている。肥前II-2期である。

(池田・山上)

#### (4) 金属製品（図版54：写真図版52）

出土した金属製品はいずれも中近世のものと考えられる。

M4は銅製の腰刀筒金具である。銅板を巻いて作られ、合わせ目の反対に目釘孔が開けられている。I地SD04から出土したものである。

M5は鉄製火打金である。平面形はかすがい形で、打撃部の厚みは4mmである。I地区P03より出土したものである。

M6は鉄製楔である。頭部が表裏両方に拡張している。I地SK20より出土したものである。

\*1：長友朋子・田中元浩『西播磨地域の縄文』『弥生土器集成と縄年—播磨縄—』2007年

\*2：姫路市埋蔵文化財センター「姫路市内から出土した人形土製品たち」2006

(池田)

## 第2節 III～V地区の遺構と遺物

### 1. 概要

地区割り 現在使用されている水路に合わせ、III～V地区に分割して調査した。

基本層序 耕土と床上を除去すると直下に灰色シルト質極細砂層（地山層）があり、その上に遺構群が営まれている。遺構の埋土はほとんどが黒色土および黒色土に地山ブロックを含むものとなっている。また、IV地区とV地区ではIII地区と異なり、砂礫層が地山となっている。砂礫層は両地区の間で谷状に落ち込んで窪地を形成しており、そこには黒色シルト層が堆積している。ただ、湧水が激しく、調査区壁面の崩落もあったため、砂礫層がどこまで下がるかは確認できなかった。

遺構の概要 III地区的SD01とSD02に画された内部が構跡にあたると考えられ、現在の水路が構跡の添を改めて開削したものである可能性がある。構内で検出した遺構は土坑、ピット、溝で、そこからは近世を中心とした時期の遺物が多く出土しているが、一部を除いては2次的な堆積である可能性が高い。

水路の外側に当たるIV・V区でもそれぞれ土坑・ピットなどを検出したが、IV地区北半からV区南半にかけての窪地から律令期の遺物を多く検出した。また、V区北側には豊富な湧水量を誇る泉があり、本体工事の際にも若干西に場所を移設して整備され、現在も使用されている。

なお、III～V地区では遺構番号は連続して付与している。

### 2. 遺構

#### III地区SK01（図版22：写真図版29）

調査区北側で検出した。長軸2.78m、短軸1.36mの長楕円形を呈し、検出面からの深さ42cmを測る。埋土は腐植質を含んだ黒色土に地山ブロックが混じっている。中国産染付碗(61)が出土している。

#### III地区SK02（図版22：写真図版29）

調査区北側で検出した。長軸2.2m、短軸1.4mの歪んだ楕円形を呈し、検出面からの深さ28cmを測る。埋土はSK01と同じく腐植質を含んだ黒色土に地山ブロックが混じっている。

### III地区SK03（図版22：写真図版30）

調査区北側で検出した。長軸1.88m、短軸0.88mの楕円形を呈し、検出面からの深さ15cmを測る。埋土は腐植質の混じった黒褐色シルトである。

### III地区SK04（図版22：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。径約1.7mの壺な形を呈し、中央部が一段盛んでいる。挙大から人頭大的縁を含む黒褐色シルトが主たる埋土で、井戸の可能性もある。中国産の白磁小杯(62)、肥前系陶器鉢(63・64)が出土している。

### III地区SK05（図版23）

調査区中央東側で検出した。SE01に切られ、SK06・SK07を切る。当初、SK06と同じ遺構として掘削し始めたが、最終的には別のものと判断した。検出面からの深さは約55cmである。中国産の山磁皿(65～67)と染付皿(68)、肥前系青磁(69)が出土している。

### III地区SK06（図版23：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。SK05・SK07に切られる。残存部の長径1.3m、短径1.2m、検出面からの深さ28cmを測る。埋土は黒褐色極細砂混じりシルトで多量の礫が放り込まれていた。唐津焼皿(70)が出土している。

### III地区SK07（図版23：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。SK05に切られ、SK06を切る。調査区外に延びる。検出部分の長軸1.5m、短軸1.2m、検出面からの深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色極細砂混じりシルトで腐植質を含んでいた。中國産の染付碗(71)と染付皿(72)、青磁碗(73)が出土している。

### III地区SK08（図版31：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。SK05および近代の暗渠に切られる。隅丸長方形を呈し、残存部の頬辺2m、長辺3.74m、検出面からの深さは0.2mである。砂礫を多量に含む黒褐色シルトで埋められていた。

### III地区SK09（図版31：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。SK10に切られる。いびつな形を呈し、直径0.84m、検出面からの深さは12cmと浅い。灰黃褐色シルトによって埋められていた。染付碗(74・75)、備前焼壺(76・77)、管状土錐(78)が出土している。

### III地区SK10（図版31：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。不整形で調査区外に延びる。SK09を切る。検出部分の長軸2.2m、短軸1.8m、検出面からの深さは12cmである。唐津焼小碗(84)が出土している。

### III地区SK11（図版31）

調査区中央東側で検出した。調査区外に延びる。歪んだ円形を呈し、径1.44m、検出面からの深さは23cmを測る。基本的に黒褐色シルト層によって埋められているが、上層には炭・焼土塊・繊維が多く含まれる。

### III地区SK12（図版25：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。SK13に切られ、SK15を切る。長軸2.96m、短軸2.2mの楕円形を呈し、検出面からの深さは54cmである。基本的には黒褐色シルト層で埋められており、上層には焼土ブロックも含まれる。

### III地区SK13（図版25：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。SK12を切る。長軸2.7m、短軸2.3m、検出面からの深さは63cmである。基本的に褐灰色シルトで埋められているが、上層で焼土ブロックが認められる他、埋土中にはほぼ純粹な炭層も認められる。中国産の白磁碗(79～81)と青磁香炉(82)、備前焼播鉢(83)が出土した。

### III地区SK14（図版25：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。SK15を切り、調査区外に延びる。隅丸方形を呈し、検出部分で一边2.2m～2.1mを測る。検出面からの深さは5cmである。暗褐色～黒褐色シルト層で埋められ、上層には焼上塗も含まれる。

### III地区SK15（図版25：写真図版30）

調査区中央東側で検出した。SK14に切られる。調査区外に延びる。梢円形を呈し、検出部分の長軸4.1m、短軸2.3m。検出面からの深さは24cmを測る。黒褐色シルトで埋められ、上層には焼土ブロックを含む。中国産の染付碗(85)が出土している。

### III地区SK16（図版26：写真図版30）

調査区中央西側で検出した。近代の暗渠に切られる。長梢円形を呈し、残存部分の長軸3.4m、短軸1.04m、検出面からの深さは15cmである。黒色シルト層で埋められている。

### III地区SK17（図版26：写真図版31）

調査区南側で検出した。SK18を切る。隅丸長方形を呈し、長辺3.84m、短辺1.56m、検出面からの深さは28cmである。黒褐色シルトと疊で埋められている。土師器壙(86・87)が出土している。

### III地区SK18（図版26：写真図版31）

調査区南側で検出した。SK17に切られ、SK19を切る。径1.96～2.1mのいびつな円形を呈し、検出面からの深さは70cmで、穢が多量に混入した黒色シルトによって埋められている。

### III地区SK19（図版26）

調査区南側で検出した。SK18に切られ、調査区外に延びる。検出面からの深さが8cmの極めて浅い土坑で、黒色シルトで埋められていた。

### III地区SK20（図版27：写真図版31）

調査区南側で検出した。SD02・SD03・SD04・SK24を切る。4×5mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは、概ね20cmであるが、北端に直径1.3mの窪みがあり、その部分では56cmを測る。埋土は黒褐色から黒色の極細砂混じりシルトである。国産の染付碗(88)と青磁香炉(89)が出土している。

### III地区SK21（図版27：写真図版31）

調査区南側で検出した。SD04に切られる。長軸1.72m、短軸0.68m、検出面からの深さ22cmを測る。埋土は黒色極細砂混じりシルトである。

### III地区SK22（図版27）

調査区南側で検出した。SD03に切られる。残存部の長軸0.6m、短軸0.3m、検出面からの深さ12cmを測る。埋土は黒褐色極細砂混じりシルトである。

### III地区SK23（図版27）

調査区南側で検出した。SK20に切られ、SD04を切る。調査区外に延び、残存幅0.7mである。検出面からの深さ20cmを測る。埋土は黒褐色極細砂混じりシルトである。

### III地区SK24（図版27）

調査区南側で検出した。調査区外に延びる。検出部は半円形を呈し、直径0.58m、検出面からの深さ8cmを測る。灰黄褐色から褐灰色極細砂混じりシルトである。

### III地区SE01（図版23：写真図版31）

調査区中央東側で検出した。SK05を切る。径1.64m～1.7mの円形を呈し、検出面からの深さは0.82mである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、付帯する施設は検出できなかった。黒褐色シルトによっ

て埋められている。土師器皿(91)が出土している。

### III地区SA01（図版29：写真図版31）

調査区南側で検出した構造である。4基の柱穴からなり、延長は5.15mを測る。柱穴の直径は25cm前後で、深さは25～45cmである。周辺に同規模の柱穴が散在するため、掘立柱建物の一部である可能性もある。

### III地区SD01（図版28：写真図版28）

調査区西壁に沿って検出した南北方向の溝で、約25mにわたって東側の肩部のみを検出した。西側の肩部については調査区外に存在すると考える。調査区の扇曲点付近で東側に直角に折れ、約3m伸びたあと再び南側に折れ曲がる。土層断面の観察によると、一度掘り直されたことが考えられ、最終的には江戸時代後半に礫を多量に含む黒色～黒褐色シルト層で一気に埋められている。土師器小皿(92)、中国産染付皿(93)のほか、国産の染付磁器(94～101)、施釉陶器(102～107)が出土している。

### III地区SD02（図版29：写真図版28・29）

調査区南端で検出した東西方向の溝で、約12mにわたって北側の肩部のみを検出した。検出面からの深さは0.45mである。土層断面の観察によると、一度掘り直しておらず、下層には黒褐色極細砂混じりシルト層からなる堆積層があり、上層は地山ブロックや粗砂を多く含む黒色～黒褐色シルト層で埋められている。本来はSD01と同一の溝で、城館の濠の一部であると思われる。

土師器小皿(108～111)、中国産染付碗(112)、初期伊万里焼皿(113)、肥前系磁器(114・115)、中国産白磁皿(116)、志野焼皿(117)、唐津焼(118～120)、国産磁器碗(121)、施釉陶器碗(122)、須恵器(123・124)、備前焼鉢(125)が出土している。

### III地区SD03（図版27）

調査区の南端近くで検出した東西方向の溝である。東側はSK20に切られ、西側は調査区外へ伸びる。検出長は約7m、幅0.7mで、検出面からの深さは25cmである。地山ブロックや粗砂を多く含む黒色～黒褐色シルト層で埋められていた。

### III地区SD04（図版27）

調査区の南端近くで検出した東西方向の溝である。西側は削平され、東側はSK20・SK23に切られるが、調査区外へ伸びる。検出長は約10.9m、幅0.82m、検出面からの深さは21cmで、灰黄褐色シルトにより埋められていた。土師器皿(126)、施釉陶器德利(127)が出土した。

### IV地区SK25（図版30：写真図版32）

調査区南端で検出した。調査区外に伸びる。東西軸は1.5m、検出面からの深さは20cmである。黒褐色シルトで埋められていた。

### IV地区SK26（図版30）

調査区南東隅で検出した。ほとんどが調査区外に伸びるため規模は不明。検出面からの深さは22cm、黒褐色シルトで埋められていた。

### IV地区SK27（図版30）

長軸0.96m、短軸0.58mを測る楕円形で、検出面からの深さ5cm、黒褐色シルトで埋められていた。

### IV地区SK28（図版30：写真図版32）

長軸3m、短軸2.4mをはかる楕円形を呈し、検出面からの深さ18cm、黒色シルトで埋められていた。

### IV地区SK29（図版30）

調査区外へ伸びる。南北軸2.7m、検出面からの深さ12cmを測る。黒色極細砂で埋められていた。

#### IV地区SK30（図版30）

長軸0.6m、短軸0.38mの楕円形で、検出面からの深さは10cmである。暗褐色細砂で埋まっていた。

#### IV地区SK31（図版30）

長軸0.6m、短軸0.35mの楕円形で、検出面からの深さは10cmである。黒色シルトで埋まっていた。

#### IV地区SK32（図版30）

長軸0.6m、短軸0.4mの楕円形で、検出面からの深さは25cmである。黒褐色細砂で埋まっていた。

#### IV地区SK33（図版30）

検出長2.2m、最大幅1.05mで調査区外に延びる。検出面からの深さは35cmである。黒色シルトで埋まっていた。

#### V地区SK34（図版31）

調査区北端で検出した。調査区外にのび、規模は不明である。検出面からの深さは10cmである。黒褐色シルトで埋まっていた。

#### V地区SK35（図版31）

検出長1.4m、幅0.45mの細長い土坑で、調査区外に延びる。検出面からの深さは8cmで、黒色シルトで埋まっていた。初期伊万里焼(90)が出土している。

#### V地区SK36（図版31）

長軸0.8m、短軸0.4mの楕円形で、検出面からの深さは45cmである。黒褐色細砂で埋まっていた。

#### V地区SK37（図版31）

調査区北西隅で検出した土坑で、調査区外に延びるため、規模は不明である。検出面からの深さは5cm程度の極浅いものである。

#### V地区SK38（図版31）

長軸0.8m、短軸0.2mの細長いもので、検出面からの深さは10cmである。

#### V地区SK39（図版31）

長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形で、検出面からの深さは10cmである。

#### V地区SK40（図版31）

直径0.6~0.65mのやや歪んだ円形を呈し、検出面からの深さは25cmである。

#### V地区SK41（図版31）

長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形で、検出面からの深さは20cmである。

(鐵)

### 3. 遺物

III~V地区では包含層から奈良~平安時代前期、中世末~近世初期、近世後期の遺物、遺構からは中世末から近世初期、近世後期の遺物が出土している。

#### (1) 奈良~平安時代前期の土器・陶磁器（図版41~44：写真図版44~48）

一部を除いて、IV・V区の低地部分からまとめて出土した。8世紀後半から9世紀後半の範囲に収まるものと考えられる。

128、143~147は土師器である。128は杯Aで大きく開く口縁部を持ち、III地区から出土した。

143~146は土師器の皿Aである。145・146の底部外面には墨書が認められる。

147は碗である。躊躇った形の高い高台が付く。体部外面に削りの痕跡がある。

148～189は須恵器で、147～159は杯Aである。平坦な底部から斜め上方に開く体部を持つ。153～155・158の底部外面に墨書が認められる。

160・161は碗Aである。やや丸みを帯びた底部から垂直気味に立ちあがる深い体部を持つ。161の底部外面には「西」という墨書がある。

162～167は皿Aである。162は「口尾」、163・164・167は「西」、166は「多口」という墨書が底部外面にある。

168は台付皿である。口縁端部は外側に折り曲げられて、僅かに垂下する。高台内に「西」という墨書がある。

169～173、176・177は杯Bである。176・177は大きく開く口縁部を持つ。172は高台内にヘラ書きで「戸」と記され、解説できない墨書がある。173は高台に内部に墨書があり、おそらく「西」であると思われる。深い体部に高台が付く174・175は碗Bとする。斜め上方に大きく開く口縁部を持つ175は高台内に「出尻」という墨書がある。

178は高台が付いた底部片で、壺になると思われる。

179・180は須恵器の稜楕である。179は口縁の開きがやや緩く、口縁部内面に僅かに凹線の痕跡がある。180は口縁端部が大きく外反する。

181から189は須恵器の蓋である。口縁端部が単純に屈曲して垂下するものと、天井部との境界で屈曲した口縁部が一度水平方向に延びたのち端部を下に折り曲げるものがある。つまみ部も頂部が平坦なものと頂部中央が突出し扁平な宝珠形を呈するものがある。184が外面に墨書「柄?尾」、185・188は外面に「西」、187は内面に「西」、189は外面に墨書が認められるほか、184は内外面にヘラ記号がある。

190は縁軸陶器碗である。外反して開く口縁部を持ち、高台は削り出しである。高台内部にヘラ記号がある。形態から見て山城産ではないかと思われる。  
(鑑)

## (2) 中・近世の土器・陶磁

### III地区SK01(図版37:写真図版41)

61は中国産の染付碗である。半透明の黄緑色釉を施釉し、外面に図案化された草文を描く。漳州窯産の製品である。

### III地区SK04(図版37:写真図版)

62は中国産の白磁小杯である。小さな高台に背高になる器形を持つもので、口縁は外反する。

63・64は肥前系陶器で、いずれも底部片である。63は白色の施釉に緑色釉で文様を施す。内面に砂目痕跡が観察される。64は肥前系陶器鉢で、刷毛目唐津とされる製品である。

### III地区SK05(図版37)

65～67の3点は中国産の白磁皿である。いずれも端反りのものであるが、65のみは腰が無く底部からすぐに外反する体部に移行するものである。

68は中国産の染付皿である。白磁と同じく端反りになるタイプで皿A類のものである。見込みに菊花文を描く。

69は肥前系の磁器で青磁である。内外面に薄い釉を施釉し見込みを蛇の目に剥落する。17世紀中頃前後の製品である。

### III地区SK06(図版37:写真図版42)

70は唐津焼皿の底部片である。削りだしの輪高台で、内面に砂目のトテン痕跡が4箇所残る。釉は綠色でガラス質の光沢がみられ、貫入が観察される。

### III地区SK07(図版37:写真図版41)

71は中国産の染付碗小片である。アラベスク文様の一部が残されるが詳細は不明である。

72は中国産の白磁皿底部片で、端反りになるものである。

73は青磁碗である。碗としたが小片のため鉢などの可能性もある。口径の割りに器高が低い。外面に鏡蓮弁文が線刻されるが、鏡が線書きで蓮弁とは分離した表現となり形態化したものである。

### III地区SK09（図版37：写真図版41・43）

74・75は中国産の染付碗である。いずれも鏡頭芯（碗E類）のタイプの碗と推定される。74は体部が外反し口縁部を尖らせておえる。体部外面には退化した菊花文を描く。75は腰部が湾曲しながら立ち上がるもので、内面見込みに芭蕉文を描くが、欠損しており図柄の詳細は不明である。

76・77は偏前焼無頸壺である。水屋壺様の形態を持つが胸部区画線が無く、耳の形態が特徴的である。2点はどちらも横耳タイプのもので、体部から口縁部が短く立ち上がる。肩部は大きく張り、胴はやや直線的である。口縁部の形態や胎土から16世紀代のものと考えられる。

78は管状土錐で、中ほどがやや膨らむ個体である。

### III地区SK13（図版38：写真図版41）

79・80・81は中国産の白磁碗である。いずれも端反タイプのもので79・81は口縁部の破片である。

82は中国産の青磁の香炉である。底部片で、底部径4.4cmと小型のものである。

83は偏前焼擂鉢である。近世Ⅰ期b段階前後の製品で、注ぎ口周辺の口縁部片である。口縁部内面に段をもち端部に稜を持つ。

### III地区SK10（図版38：写真図版42）

84は唐津焼小碗の底部片である。緑色の施釉を施し、底部には糸切り痕跡を残す。

### III地区SK15（図版38：写真図版41）

85は中国産の染付碗である。底部が盛り上がる鏡頭芯タイプの碗E類である。

### III地区SK17（図版38）

86・87は土師器壺でいずれも口縁部の小片である。残存部分ではタタキ調整は観察できない。口縁部はやや肥厚して丸くおえる。

### III地区SK20（図版38）

88は磁器碗である。体部に草花文、高台に3条の界線を施す。

89は青磁の香炉である。口縁部端部は内側に肥厚し、体部内面は露胎である。

### V地区SK35（図版38：写真図版）

90は染付の小皿である。高台内にトキン形の盛り上がりがあり、初期伊万里焼と思われる。

### III地区SE01（図版38：写真図版43）

91は土師器小皿である。手づくね皿で体部は斜め上方向に開きながら立ち上がる。外面に指頭痕跡を残す。

### III地区SD01（図版38・39：写真図版41）

92は土師器小皿である。薄手の製品で、底部が丸くなり、体部がそのまま湾曲しながら立ち上がる。

93は中国産の染付皿である。端反りタイプの皿A類である。見込みに十字花文を描き、外面には草花文を施す。

94～101は国産染付磁器である。94はそば猪口で外面に草花文、高台部に2条の界線を巡らせる。95～99、101は碗で、外面に草花文を施し、見込み部及び高台外面に界線を巡らせるものが多いが、99は文、101は無文である。100は蓋で内外に松文を施す。

102～107施釉陶器である。102は碗で、口縁部に釉を二度掛けしている。103・104は深皿で見込みに草花文様を描く。105は蓋ものの身で、体部外面に釉を流す。106は燭台の脚部であると思われる。107

は舟波焼の甌で口縁部肩部にかけて、釉を施す。

### III地区SD02 (図版40: 写真図版42)

108~111は十師器小皿である。110は糸切り手法であるが、他はすべて手づくねの製品である。110は薄作りで内面が平滑に仕上るため型作りの可能性がある。口縁部に煤痕跡を残す。108・109・111はいずれも体部上半から口縁部を横ナデする。109はさらに端部をつまんで、上端に面を持ち、口縁端部を尖らす意蘊が見られる。製作技法から京都系かわらけを模倣した製品である。108・111は底体部が丸くなる器形で、111は内面に刷毛目を施す。

112は中国産の染付碗である。外面に草花文を描く。器壁は薄く口縁端部を尖らせ気味におえる。

113は初期伊万里焼の皿の底部片である。底部は厚みのある器壁を持ち、内面に花文を描く。高台素には砂痕跡が観察された。

115は肥前系磁器の染付皿である。内面に図案化した草花文、外面に牡丹文を描く。

116は中国産の白磁皿の底部片である。基筒底タイプの粗製品である。

117は志野焼皿の口縁部片である。器表には独特の貫入が見られる。

118・119は唐津焼皿である。118は基筒底高台で、内面が一部露胎で、淡灰色の釉を施す。119は赤褐色の釉を施す。輪高台で、内面に胎目とのトシ痕跡が観察される。

120は唐津焼碗の底部片である。腰の張る器形であるが、全体のプロポーションは破片のため不明である。

121は染付磁器碗の底部片と考えられる。

122は施釉陶器の底部で、高台内部に文字を記す。

123は須恵器鉢である、東播磨系の製品である。口縁部を上方に拡張し、さらに肥厚させて、断面の三角形の口縁帯を作る。内面口縁部下には板ナデ調整の痕跡を残す。14世紀台の製品である。

124は須恵器甌である。大きく伸びた頸部から横方向に外反させ、端部を上につまむ口縁部をもつ。中世前半の製品である。

125は備前焼描鉢で近世I期段階の製品である。上方に伸びた口縁帯を持ち、外面には四線状のナデ痕跡、内面は強いナデによって面を持つ。鉢口は垂直方向の櫛描き状の御目を施したのち、斜めの御目を描く。

### SD04 (図版40: 写真図版43)

126は土師器中皿である。手づくね窯製品で体部上半を横ナデし、口縁部を外反させて端部をとがらせ気味におえる。内面には圓線状の凹線が観察される。京都系かわらけの製作技法を模倣した個体である。

### III地区包含層及び中央石組暗渠 (図版41: 写真図版41)

129は中国産青磁皿の口縁部の小片である。口縁部に輪花を表現し、内面に鑄を片刃彫りで描く。

130・131は中国磁器の皿である。草花文を施している。

132は中国産の染付碗である。132は外開き気味の器形で外面に山岳の景色を描く。

137は中国磁器碗である。外面に簡略化された龍を描くほか、見込み部に菊花文を施す。

139は肥前系染付磁器の皿である。壓押しにより文様を浮きだたせる。

140は備前焼徳利の口縁部片である。内面に絞り目が観察できる。

142は瓦質土器火鉢である。奈良産の火鉢で口縁部を内面側に肥厚させ、体部はやや斜めに立ち上げる。口縁外面に菊花文をスタンプする。炭素は安定して吸着しており、色調は全体に黒色で覆われる。内外面は丁寧で細かなミガキによって平滑に調整される。

#### IV・V地区包含層（図版41・44：写真図版42）

133・134・136は国産染付磁器である。133は小瓶で、134・136は碗である。134は外面に蔓草文を施す。136は亀甲繩の中に菊花をあしらい、高台内面に呉須で印を押す。

135は中国産の染付碗である。135は外面に淡水魚（鯉魚）を描く。腰の貼る器形で碗E類の可能性がある。141は施釉陶器碗である。褐色の釉を掛けた。

191～195は土師器小皿である。194は糰切り手法の製品であるが、他はいずれも手づくね皿である。191・192は薄い器壁で短い体部を丸くおさめている。内外面には指頭痕跡が残る。193は丸底で体部との境が明瞭でない器形である。やはり内外面に指頭痕跡を残す。195は体部上半を横ナデし、口縁端部を上方につまむ。外面に体部下半から底部に指頭痕跡を残す。194は底部から短く体部が立ち上がり口縁部を丸くおえる。

196は唐津焼皿である。釉は灰白色のガラス質の釉で、見込みに砂目のトチン痕跡を残す。

198は備前焼擂鉢である。近世Ⅰ期段階前後のものである。口縁部内面の段は幅が狭く、器壁もあまり肥厚しない。鉗目は櫛描きの7本単位で施される。

199は備前焼甕である。肩部がややなで肩になる器形で、口縁部が直立して立ち上がる。楕円形に肥厚した玉縁を持つ外側に凹線は施されていない。内面に板ナデ調整の痕跡が頗著に残る。中世Ⅴ期段階の製品である。

（山上・鐵）

#### （3）瓦類

本調査で出土した瓦を一括して報告する。今回の調査で出土した瓦類は沢構（Ⅲ地図）の周辺のみから出土した。南側の沢構Ⅰ～Ⅱ区やサルガク遺跡からは出土していないので、本瓦類は沢構内部で使用された瓦の一一群と考えられる。出土した瓦で戦国時代のものは軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鳥衾・面戸瓦がある。近世以降のものでは軒丸瓦・軒棧瓦・棟瓦・蟻羽瓦がある。

戦国時代の瓦

この時期の瓦は全体的に炭素の吸着が安定し、やや光沢を持つ。胎土は精良であるがやや軽い印象をもつ。軒丸瓦（図版45：写真図版49）

瓦2～5は軒丸瓦である。文様は殊文が直径0.7～0.8mm前後と細かく、粒状を呈している。配置の間隔はやや不均等で、23個で構成される。巴文は左巻き三つ巴文で尾部が長く1周以上する。巴文は文様がシャープで隆起が大きく、稜線が明瞭である。瓦3では巴の中心に点状の痕跡が観察される。復元径であるが巴文の直径は16cm前後を測り、外区の幅は3cmである。このため文様の直径に対する比率は1.6対1となる。また、瓦の厚さは2.2cm～2.4cm前後で比較的厚い。

軒平瓦（図版46：写真図版49）

瓦6～17は軒平瓦である。軒平瓦は中心筋があり宝珠文、両側に3反転の唐草文で構成される。さらに周囲には特徴的な線状の装飾を持つ。四面は貼り付け後、平瓦面に工具による笠削り調整痕跡が観察される。端部は横方向に板ナデ調整を施す。端部側面の凸面部のみ5mm前後の幅でケズリが入る。凸面は器面調整が頗著で、平滑で仕上げる。このほか瓦2では瓦当貼付け部にカキヤブリが観察された。

瓦当が完存するものはない。瓦8を復元した法量では瓦当の幅は20cm、高さは5cmであるが、外区の幅は左右で2cm（但し瓦6では4.2cmなど2～4cmの間で差が激しい）である。上下には上が1.2cm、下が0.8cm。（下が全体に細くなる）である。文様の寸法は幅が20cm、高さが3cm前後を測る。このため瓦当の長さでの文様との比率では1.6対1となる。瓦の厚さは2.0cm前後を測る。

#### 丸瓦（図版47・48：写真図版50）

瓦18～22は丸瓦である。全形を知ることができる瓦18で長さ33.75cm、幅16.55cmで、瓦19では長さ34.5cm、幅16.5cmである。玉縁4.6cm、段の高さ1.5cm、長さ28.2cmを測る。瓦の厚さは頭部が厚く、2.8～3cm、尾部は2.2cm前後を測る。また、丸瓦の凹面に残るコビキの痕跡はすべてコビキAである。

なお、瓦20には釘穴、瓦21には凸面に直径3.0cmの穴が観察されるが、貫通はしないものである。周囲の状況から、製作時に設けられたもので、穿孔面に炭素が吸着していないところを見ると焼成時には何かを差し込んでいたと思われる。

#### 平瓦（図版50：写真図版50）

瓦23～26は平瓦である。端部は横方向に範ケズリ調整する。器面は凹凸があつて、型に乗せて成型後未調整である。端部側面の凸面部のみ5mm前後の幅でケズリが入る。凸面は器面調整が顕著で平滑に仕上げる。器面はやや光沢を持つ個体が多い。瓦24で寸法は縦が29cm、厚さ2cm前後を測る。

#### 鳥糞（図版45：写真図版49）

瓦1は鳥糞である。瓦当のみが残される。瓦当面の背後は筒状に繋がる。瓦当の文様は軒丸瓦と同様で、凹の中心点も観察される。

#### 鬼瓦（図版50：写真図版49）

瓦27は鬼瓦の小破片である。中央に凹線が入る。鬼面背後の装飾部分と推定される。

#### 面戸瓦（図版51：写真図版49）

瓦28～30は面戸瓦である。大屋根と屋根部分の隙間を埋めるための瓦である。いずれも破片で下半のみが残される。

#### 近世以降の瓦（図版52）

瓦31は棟瓦である。右辺を波形に折り、右下端および左上端の一部を隅切りにする。

瓦32は蠟羽瓦である。建物の妻側の窓枠に葺かれる瓦で、瓦当面が妻側を向いて屋根の箕甲を保護する役割を果たす。

瓦33は軒丸瓦である。

瓦34は軒樋瓦の瓦当の小破片である。

(山上)

#### (4) 石製品（図版53：写真図版51）

S1は硯の破片である。おそらく短冊形のもので、海の一部が残る。

S2は茶臼の下臼部である。皿状の受け部も一部残っている。安山岩製と考えられる。S3・S4はいずれも粉挽臼の一部で花崗岩製と考えられる。S3は下臼部で溝の切り方は6分割されている。S4は上臼部で、上部に穀物の投入口、側面に取っ手の横打ち込み穴が認められる。

(銀)

#### (5) 金属製品（図版54：写真図版52）

M1は長さが12cm以上ある大型の角鉄である。III地区包含層から出土した。

M2は刀子の柄状の鉄器である。断面が細長い三角形を呈し、中実の部分と中空の部分がある。III地区SD02から出土した。

M3は角鉄である。III地区SK05から出土した。

(鐵)

## 参考文献

- 備前焼 東岡実「備前焼擂鉢の誕生について」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000  
同 上「備前焼擂鉢レポート資料」『関西近世考古学研究IX』2001  
北野隆亮「備前焼水屋甕の分類と変遷」『古岡康暢先生古希記念論集』桂書房2006  
載貨 木井久美男編「中世の出土鉢・出土甕の調査と分類」兵庫埋蔵鉄器調査会1994

## 第3節 まとめ－沢構の歴史－

ここでは沢構について検討する。なお、本居館の名称は、旧来からの名称として使われてきたものではない。一方、下沢城の名称(\*1)があるが、これも地元に定着したものではない。また、後述するとおり本居館に城郭的な構造は認められない。このため本書では遺跡周辺が字「構」と呼ばれることと、地区が沢であることからから沢構（さわかまえ）と呼称した。なお、構は播磨の中世居館に一般的に使われる歴史的名称である。

### 1. 遺物の検討

沢構から出土した中世の土器には多種類のものが含まれる。これらの遺物には土師器小皿・中皿・堀、中国産の染付碗・染付皿・白磁杯・白磁碗・備前焼擂鉢・甕・無頬甕・壺・徳利・瀬戸美濃焼皿・唐津焼碗・皿などがある。なお、遺物に関しては主として近年調査が行われた置塩城跡（姫路市）(\*2)と比較して検討を進めることとする。

土師器は皿が中心であるが133を除くと手づくね皿で占められる。また、中皿は110・126・195の3点のみで、他はすべて小皿である。いわゆる京都系と呼ばれるものはSD2土師器小皿91、SD4土師器中皿126の2点があるが、さらに23や55も口縁端部を外反させる意識を持つことから、京都系の技法を模倣した製品の可能性がある。その他は在地産と考えられ稚拙な作りのものが多い。在地産の製品には体部を内窓気味に立ち上げ丸底になると、体部があまり立ち上がりず器高の低いものの2タイプがある。これらは置塩城跡の出土遺物に酷似しており16世紀後半頃の年代が与えられる(\*3)。また、京都系土師器は126の見込みに鏡を意識した沈線が認められ、109・126とともに口縁部の調整に省略が見られることや、プロボーションから16世紀後半の年代が与えられる。なお、184は糸切底の皿であるが13世紀頃のものである。

この他、堀があるが僅か2点しか見られない。いずれも16世紀後半のもので、口縁部周辺の成形・調整は省略のすんだものである。なお、煮炊具の少ない点は置塩城跡に共通する。

備前焼(\*4)は擂鉢・甕を中心に11点を図化した。擂鉢は放射状の卸目を持つものが多く、口縁部が拡張し内面に段を持つ近世1期のa～b段階(25・83)、c段階(40)のものが含まれたが、これより古い段階のものは認められない。2点が出土した無頬甕(76・77)もこの時期前後のものと考えられる。ただし甕は玉縁が梢円形になるもの未発達で、凹線も認められないため、中世5期b段階のものと判断される。置塩城跡でも16世紀後半段階の甕は認められず、古い時期の個体で占められている。両者の経緯が同一かどうかは不明であるが、本報告では伝世のためと考えておきたい。

貿易磁器(\*5)では染付が優越する。染付は碗E類や漳州窑などが含まれ、16世紀後半頃の製品が日立ち、17世紀前半ころのものまでが含まれる。香炉片1点があるが特に威信財的なものは認められなかった。

瀬戸・美濃焼は鉄釉丸皿(26)があるが折縁になる。このタイプの皿は16世紀第3四半世紀から登場するもので、17世紀初頭まで存続する。

唐津施は慶長期頃から関西周辺に登場するとしているので、当然のことながら置塙城跡跡・御着城跡には出土例がない。沢構の資料はこれらのうち古段階とされる胎土目のものから新段階とされる砂目までが出土した。また、肥前系陶器(63・64)・肥前系青磁(69)および初期伊万里(113)などは17世紀中頃～後半に墳のものである。さらに土師器皿の中にも17世紀代のものが含まれる。このため、遺物群には江戸初期のものが一定量含まれていることが分かる。つまり、居館の廃絶後も居住機能が維持されたことが、これらの資料から窺うことができる。次に問題となるのが沢構Ⅲ・Ⅳ地区で出土した瓦類である。瓦類は技法や瓦当文様から永禄・天正から繩豊期までの時期が想定される(\*6)。これらの瓦類は大型のものであること、作りが丁寧であること、鳥衾・熨斗瓦が存在するなど簡素な建物の屋根には見られない点で注目される。さらに量的にも一定量以上の出上があることからすると、居館内には本格的な屋根を持つ建物が存在し、これに瓦が葺かれたことが確実視される。時期的にも居館存続の時期に重なることからすると、居館の内部に瓦葺き建物が存在した可能性は大きいだろう。

以上の通りであるが、沢構の出土遺物を量的に見ると16世紀後半～永禄～天正年間頃ーのものが中心となるが、近世のものも含めるとそれ以降も江戸時代を通じて遺物が出土しているようである。さらに、本論に関係するところでは江戸時代初期のものも含まれるのが印象的である。政治情勢からすると、播磨で居館機能が吸収されるのは天正8～9年(1579～1580)前後が最後となるが、上記の遺物群からはそれ以降もなんらかの機能を持った施設(屋敷・寺院など)が存続したことが示唆される。通常、居館は廃館になると地域から特別な場所として扱われ、内部に居住的な機能を存続させないことが多いが、沢構ではこの逆であったようだ。ただ、豊臣期(1580～1600年)に関してどうだったのか、17世紀前半に一時期廃絶したのか否かなど細かな事情については、すべてが2次堆積資料であるため結論をえることは難しい。このため、永禄・天正頃(16世紀後半)から17世紀前半までの一定量の遺物が出土したこととは事実であるので、沢構内部の居住機能がほぼ存続していたと考えるのは、否定できないとしだされたい。

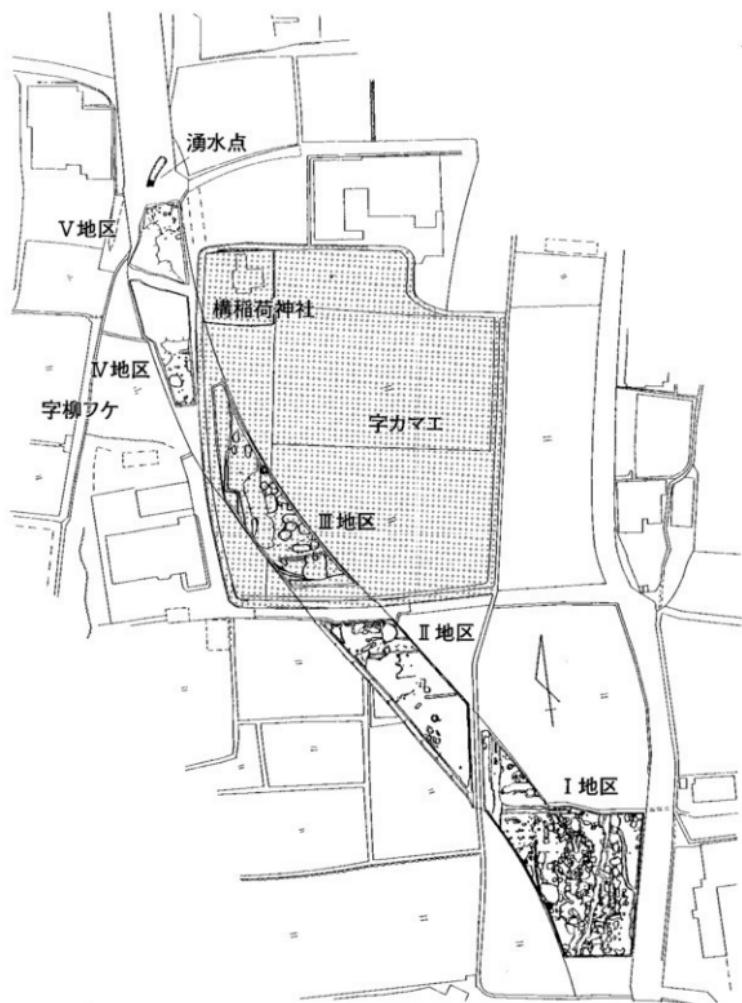
一方、遺物群の様相については、遺物個々や組成全体を見渡してみても、特殊なものや威信財ではなく、組成も平均的なものである。つまりこれらの遺物は、一般的な播磨北部の居館の様相と大きく譲らない。もちろん土師器に糸切手法のものが認められない点や、偏重焼甌が古段階のもので占められる点など、多少の差異はあるものの、全体的には平均的である。

## 2. 居館について

沢構は市川西岸の河岸段丘上に立地し、現在の沢集落の西隅の一角に位置する。沢地区の現集落はやや散村的な景観もち、宅地は居館の北東側に広がる。なお、居館の西ないし南側は美佐地区となるため、居館周辺は美佐地区との境界付近に当たる。

この居館は地元では江戸末期に土塁を崩して耕作地を確保したといい、もともと城であったところが今は水田となって周囲の用水と構築荷にその面影を留めているという(\*7)。しかし、調査によって、堀が居館の周囲を囲んでいた可能性が高いことは判明したが、規模は調査が行われた南西側では幅5～6m前後、深さ0.45mほどであることも明らかになった。このため土塁は大型のものではなく高さ1m前後と推測される。さらに、居館周囲に複雑な虎口構造や副郭の存在など、城郭独特の形態のものか地表面の観察や発掘調査からは確認できない。これらから判断すると、沢構は周囲を堀と小規模な土塁で囲むものの、全体的には居館の城をできるものではないことが今回の調査によって確認されたといえる。

居館の歴史に関して、一次史料は現在のところ残されていない。江戸時代以降に付会したと思われる話では、



第5図 沢構周辺図

0 50m

「この一角には、構稻荷と呼ぶれる神社があります。もともとはこの屋敷の守護神として祀られていました。下澤城とよいへ松伊豆守時政の下屋敷とされる。」『ぶらりいちらむ散歩道－総集編－』兵庫県市川町教育委員会平成18年）というのが大方の理解である（\*8）。

一方、地形や字限図からみると堀が四周に巡ることはほぼ確実で、規模は地形図から1辺60m前後で復元される。前述の構稻荷は北西隅にあって周囲より1段高い場所に祠が建てられる。この祠の東側は林になっており細長く居館北側を画すように続いている。現状地形では北東隅がやや欠けたような地形となるが、周囲の宅地化の影響もあるので北東を入角にした平面プランを持つかどうかは結論できない。このため、ここでは概ね方形の構造を持つ居館としておきたい。

居館内部は水田となり西・南辺の堀跡には現在水路がめぐり、湧水が豊富に流れる。この湧水は構稻荷背後の北西側から湧きだすが、湧水地点は（V地区北側）会所状に周囲を石列で囲んでいる。この場所は現在でも水汲みや野菜の洗濯などの生活に活用されている。ただし、周辺を観察すると湧水はこの会所だけから供給されるのではなく居館西側および西北周辺の広い範囲からも湧き出しているようである。居館の西側が字「フケ田」と呼ばれるのも湧水によって土地が乾燥せず、深田になったことに由来すると思われる。墨書き土器や稲穂を含む土器からは付近に古代集落の存在が推測されるが、このような集落が立地できたのは豊富な湧水によって耕作地の確保が可能だったからではないだろうか。従って中世の居館もこの湧水を独占することを目的に構築された可能性がある。また、この視点で沢の集落を観察すると、宅地は居館付近を西限として、東側の山側には広がらない。さらに、サルガク遺跡の中世集落や古代のSD1・2などもほぼこの線に沿って分布する。このため、沢地区周辺で湧水が確保されるのは沢構およびサルガク遺跡の結ぶラインより東側に存在した可能性が大きい。つまり、湧水が得られる場所は居館北側にもいくつか存在しており、これが沢の集落の立地を規定したと思われる。ただし、沢構周辺はおそらくその中でもっとも豊富に湧水を排出した場所であったと考えられ、現状でも大量の湧水が見られる。周辺を仔細に観察するとサルガク遺跡II地区南側から沢構にかけては地形が低くなり、小規模な谷地形の存在が浮かび上がる。そして、サルガク遺跡II地区SD01・02・SR01などはこの地形の北側の流れを形成した名残と思われる。結論すると居館北側は段丘地形末端の湧水地点であった可能性が大きく、周辺では地区最大の湧水が供給される場所だったのであろう。現在では農業用水を上流の神河町（旧大河内町）から確保する沢地区では、この湧水を耕作に使用することはないそうだが、中世段階には湧水が耕作地にとって唯一のものであったと思われる。このため、居館周辺の立地は有力者にとっては魅力的であつただろう。この点は隣地区的美佐が山脈に集落が展開することと比較すると、集落の起源を考える上で重要である。

散村的な景観を見せる沢地区では中心がやや不明確な印象があるが、居館の周りには比較的人家が集中し、公民館が所在するため、この場所が近年でも地区の中心であったようだ。一方、沢構のI区からは独立柱建物や区画構が見つかった。中世の屋敷が構周辺にも立地したことと示すもので、微証ではあるが居館と集落との関係を窺う貴重な発見であった。ただし、II区では上地が低く湿潤な場所なためか、このような屋敷は検出されず、屋敷地が面的に広がる可能性は少ないといえる。このため、南側には居館の付属集落や関連施設は大規模に広がらないと考えてよさそうである。居館北側についても確認調査の結果、屋敷地などが広がる可能性はないことが判明している。居館の東・西側について今後更なる調査が必要であるが、いずれにしても居館周辺には大規模な付属施設や集落、屋敷地が広がる可能性は低いものと推測される。さらに、沢地区全体では居館的な構造を有する場所が沢構以外には認められない

し、現在のところその痕跡は見出せない。この点からすると沢構には居館を中心に同心円的に広がる城下のような集落構造はなかったと考えてよさそうである。

ここで瓦葺建物の問題が残される。この建物が居館の機能する時期に存在したのかどうかは、瓦の時期をそのまま建物の年代とすれば天正期頃に本格的な屋根構造を持った大型の建物があつたことになる。

沢構にはいわゆる城郭建築が用いられた可能性がないので、この瓦は居館内部の建物に葺かれたものであることは確実である。しかし、通常の居館ではこのような瓦葺の建物は採用されない。このため沢構では居館とともに寺院が存在したか、もしくは寺院であった場所を土壘・堀で開んだのかのどちらかであるということとなる。ただし、寺院の存在については全く史料が残らず、また具体的な遺構も今回の調査では検出できなかった。今後居館内部の調査でこの問題を明らかにする必要があると思われるが、播磨の居館の姿にも多様なもののが存在することを示しており興味深い。

一方、市川の対岸、尼形には屋形構が現在も残される。ここでは大規模な土塁で周囲を囲んだ居館が残される。構築は室町時代前半とされる伝説的な話が伝わるが、現状遺構は表記された丹波焼拂鉢などから戦国時代のものと思われる。居館は屋形集落の東背後にあって、集落からは距離を置き、やや小高い所に立地する。廃館後は江戸期に寺が創建され、信仰の場所となつたよう、村中では特別な場所として意識され遺跡地が保存されてきた。この屋形構もおそらく領主的な館のものと思われるが、土塁が沢構にくらべ大規模であることが興味深い。

現在、播磨の平地居館は遺跡の痕跡を地表面に留めるものが少なくなっているが（9）、近隣に2箇所の平地居館が比較的良好に残されていることは稀有のことである。2つの居館は村（地区）の中での立地がやや異なるようであるが、沢では用水に関わって領主的な存在の館主が浮かび上がってきた。このように、それぞれの居館の分析は村の起源を探る上で大きな手がかりとなる。地域史を読み解く上では、欠くことのできない遺跡として今後も地域に根ざした保存が継続されることを願いたい。

（山上）

## 註

(\*) 構造苟の由来による。

(\*\*) 「播磨置塩城跡発掘調査報告書」熊取郡夢前町教育委員会2005による。

(\*) 土師器皿に関しては杯タイプの土師器系直皿が全く認められない。このタイプの皿は飯坂城跡や北播磨・美嚢郡の城跡には必ず見られ、むしろ播磨の戦国時代の遺跡には一般的である。この点、市川上流地域の特徴とみるかどうかは、残念ながら資料数が少數であるため今回は結論を保留しておきたい。

(#) 備前族に關しては東京大「備前燒拂鉢の編年について」『第3回中近世備前族研究会資料』2000及び「備前級大燒拂年表」『備前近世考古学研究Ⅸ』2001による。

(\*) 貿易陶器に関しては小野正敏「15・16世紀の染付鍋、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』貿易陶磁研究会1982および、森繁「16・17世紀の貿易陶器」1997

(#) 瓦類は田中幸氏「中世播磨の瓦」2001および田中幸氏の教示を受けた。

(#) 大澤哲一郎氏など地元の方のご教示による。

(#) 「ぶらりいちかわ散歩道－總集編－」兵庫県市川町教育委員会 2006

(#) 島トの上屋を残す居館は年々その数を減じ、今では20数例にすぎなくなっている。市川町域では昭和50年代までタゴ塚にも土塁が残され、城館の景観をよく留めていたが、工事建設によってその姿を失っており惜しまれる。

サルガク遺跡 出土遺物観察表

(1) 竹筒は直行値または復元値

番号	地区	出土箇所	種類	口径		底径	高さ	重量 (g)	内面	外面	特徴	備考
				内径	外径							
1	1 地区	5000年403	小鉢	(8.8)	—	8.0	—	7.0327.6	はね2.5	手づくし、底面に細目模様を有す。コートドールの底面を有す。	手づくし、底面に細目模様を有す。コートドールの底面を有す。	
2	1 地区	5000年403	十字鉢	9.30	10.2	(8.7)	—	2.6972.8	はね1.8	内外面に滑石粉を有す。	内外面に滑石粉を有す。	
3	1 地区	5000年403	瓦式土器	10.3	—	(8.5)	—	10.085.7	はね2.1	口縁小片 口縁部に滑石粉を有す他で、質地は良好。	口縁部に滑石粉を有す他で、質地は良好。	
4	1 地区	5005	土器鉢	9.6	(8.7)	(8.6)	—	37.76	はね1.9	底面は三面に斜面、上部に凹みを有す。	底面は三面に斜面、上部に凹みを有す。	
5	1 地区	5010	褐色鉢	14	(12.1)	(8.9)	—	10.067.1	はね1.7	口縁は三面に斜面、上部に凹みを有す。	口縁は三面に斜面、上部に凹みを有す。	
6	1 地区	5016	青色鉢	14	(11.1)	(8.9)	—	10.067.1	はね1.7	青色は天板が少少剥離で有る。	青色は天板が少少剥離で有る。	
7	1 地区	5011・5016	青色鉢	14	(11.1)	(8.9)	—	87.0	はね1.0	底部が剥離して、底面が焼失もつ。	底部が剥離して、底面が焼失もつ。	
8	1 地区	5011	瓦式鉢	14	(11.4)	(8.4)	—	10.067.1	はね1.6	ハンドル質(滑石質)、底面に滑石粉を有す。	ハンドル質(滑石質)、底面に滑石粉を有す。	
9	1 地区	5012	青色鉢	14	(11.3)	(8.4)	—	10.067.2	はね1.6	底部が剥離して、底面が焼失もつ。	底部が剥離して、底面が焼失もつ。	
10	1 地区	5001	土器鉢	14.3	—	14.3	3.2	11.8	はね2.5	所入部付近に細かな切欠き痕を有す。	所入部付近に細かな切欠き痕を有す。	
11	1 地区	5001	十字鉢	14	(13.8)	13.6	13.6	12.5988.4	はね1.4	ヘーフィー厚大な底を有す。底盤は斜面の上方に延びて上へ走る。	ヘーフィー厚大な底を有す。底盤は斜面の上方に延びて上へ走る。	
12	1 地区	5001	青色鉢	14	(11.6)	—	—	6197.4	はね1.4	底部付近にテリテリする感を有す。底盤は斜面の上に走る。	底部付近にテリテリする感を有す。底盤は斜面の上に走る。	
13	1 地区	5001	青色鉢	14.3	(10.6)	(8.7)	—	7.0306.1	はね1.5	底部付近に小さな切欠き痕を有す。底盤は斜面の上に走る。	底部付近に小さな切欠き痕を有す。底盤は斜面の上に走る。	
14	1 地区	5001	青色鉢	14	(12.4)	(8.7)	—	7.0306.1	はね1.0	底盤は斜面の上に走る。	底盤は斜面の上に走る。	
15	1 地区	5001	青色鉢	14	(8.9)	—	—	816.1	通穴	ハンドル質(滑石質)、斜面底盤に少しある剥離となる。	ハンドル質(滑石質)、斜面底盤に少しある剥離となる。	
16	1 地区	5001	青色鉢	14	(12.6)	(8.6)	—	7.0306.6	口縁部	ハンドル質(滑石質)、斜面底盤に少しある剥離となる。	ハンドル質(滑石質)、斜面底盤に少しある剥離となる。	
17	1 地区	5001	青色鉢	14	(11.1)	(8.5)	—	10.067.4	口縁部	丸洗した下口縁を有す。底面に滑石質を有す。	丸洗した下口縁を有す。底面に滑石質を有す。	

石製品	番号	地区	出土箇所	種類	底径		高さ	重量 (g)	表面		備考
					内径	外径			内面	裏面	
31	1 地区	5001	青色鉢	石製品	5.3	—	1.25	1.3	—	—	円柱状は実物、それそれ「丸」、「平」を表す。
32	1 地区	5001	青色鉢	石製品	6.3	—	4.05	—	—	—	円柱状は実物、それそれ「丸」、「平」を表す。

汎 様 出 土 遺 物 觀 察 表 1  
土器・陶器部

番号	種類	形状	泥文・焼跡	目録	測量	口径	底面	底径	内面	外觀	備考	備考
幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅
1	1.85C.	—	—	36231	切子+25	—	—	—	(21.4)	—	—	—
2	1.85C.	—	—	36232	盆子+25	—	—	—	(17.4)	—	—	—
3	1.85C.	—	—	36233	盆子+25	—	—	—	(16.4)	—	—	—
4	1.85C.	—	—	36233	盆子+25	—	—	—	(16.4)	—	—	—
5	1.85C.	—	—	36235	盆子+25	—	—	—	(15.3)	—	—	—
6	1.85C.	—	—	36236	盆子+25	—	—	—	(15.3)	—	—	—
7	1.85C.	—	—	36238	盆子+25	—	—	—	(15.3)	—	—	—
8	1.85C.	—	—	36239	盆子+25	—	—	—	(14.3)	—	—	—
9	1.85C.	—	—	36239	盆子+25	—	—	—	(14.3)	—	—	—
10	1.85C.	—	—	36239	盆子+25	—	—	—	(14.3)	—	—	—
11	1.85C.	—	—	36241	盆子+25	—	—	—	(13.3)	—	—	—
12	1.85C.	—	—	36239	盆子+25	—	—	—	(13.3)	—	—	—
13	1.85C.	—	—	36239	盆子+25	—	—	—	(13.3)	—	—	—
14	1.85C.	—	—	36239	盆子+25	—	—	—	(13.3)	—	—	—
15	1.85C.	—	—	36241	盆子+25	—	—	—	(14.4)	—	—	—
16	1.85C.	—	—	36241	盆子+25	—	—	—	(12.2)	—	—	—
17	1.85C.	—	—	36241	盆子+25	—	—	—	(14.4)	—	—	—
18	1.85C.	—	—	36241	盆子+25	—	—	—	(16.5)	—	—	—
19	1.85C.	—	—	36215	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
20	1.85C.	—	—	36217	廣口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
21	1.85C.	—	—	36219	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
22	1.85C.	—	—	36219	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
23	1.85C.	—	—	36219	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
24	1.85C.	—	—	36219	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
25	1.85C.	—	—	36220	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
26	1.85C.	—	—	36221	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
27	1.85C.	—	—	36221	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
28	1.85C.	—	—	36221	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
29	1.85C.	—	—	36221	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
30	1.85C.	—	—	36221	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
31	1.85C.	—	—	36221	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
32	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
33	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
34	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
35	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
36	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
37	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
38	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
39	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—
40	1.85C.	—	—	36223	中口深盆	—	—	—	(17.8)	—	—	—

沢構出土遺物観察表2

沢構出土遺物觀察表 2

沢構出土遺物觀察表 2

尺 構 出上遺物観察表 3

卷之三

沢 様 出土遺物観察表 4  
（）付箋は研究者とし復元品

番号	種別	出土場所	出土状況	種類	基部	口径	底面	口径	外縁	地質	機会説	
											内縁	底面
110	漆器	東北区 東北町	50010	十手鉢	—	—	—	(6.6)	100mm/9	100mm/2	漆器	漆器
111	漆器	東北区 東北町	50010	中口鉢	—	—	—	(2.9)	—	—	漆器	漆器
112	漆器	東北区 東北町	50010	中口鉢	—	—	—	(2.9)	—	—	漆器	漆器
113	漆器	東北区 東北町	50010	中口鉢	—	—	—	(2.9)	—	—	漆器	漆器
114	漆器	東北区 東北町	50010	中口鉢	—	—	—	(2.9)	—	—	漆器	漆器
115	漆器	東北区 東北町	50010	中口鉢	—	—	—	(2.9)	—	—	漆器	漆器
116	漆器	東北区 東北町	50010	中口鉢	—	—	—	(2.9)	—	—	漆器	漆器
117	漆器	東北区 東北町	50010	中口鉢	—	—	—	(2.9)	—	—	漆器	漆器
118	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(5.4)	5.4	5.4	漆器	漆器
119	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	(11.6)	—	(3.9)	—	—	漆器	漆器
120	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(1.8)	—	—	漆器	漆器
121	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.45)	—	—	漆器	漆器
122	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(1.45)	—	—	漆器	漆器
123	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(1.75)	—	—	漆器	漆器
124	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
125	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
126	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
127	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
128	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
129	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
130	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
131	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
132	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
133	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
134	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
135	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
136	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
137	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
138	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
139	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
140	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
141	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
142	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
143	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
144	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
145	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器
146	漆器	東北区 東北町	50010	漆器	—	—	—	(2.4)	—	—	漆器	漆器



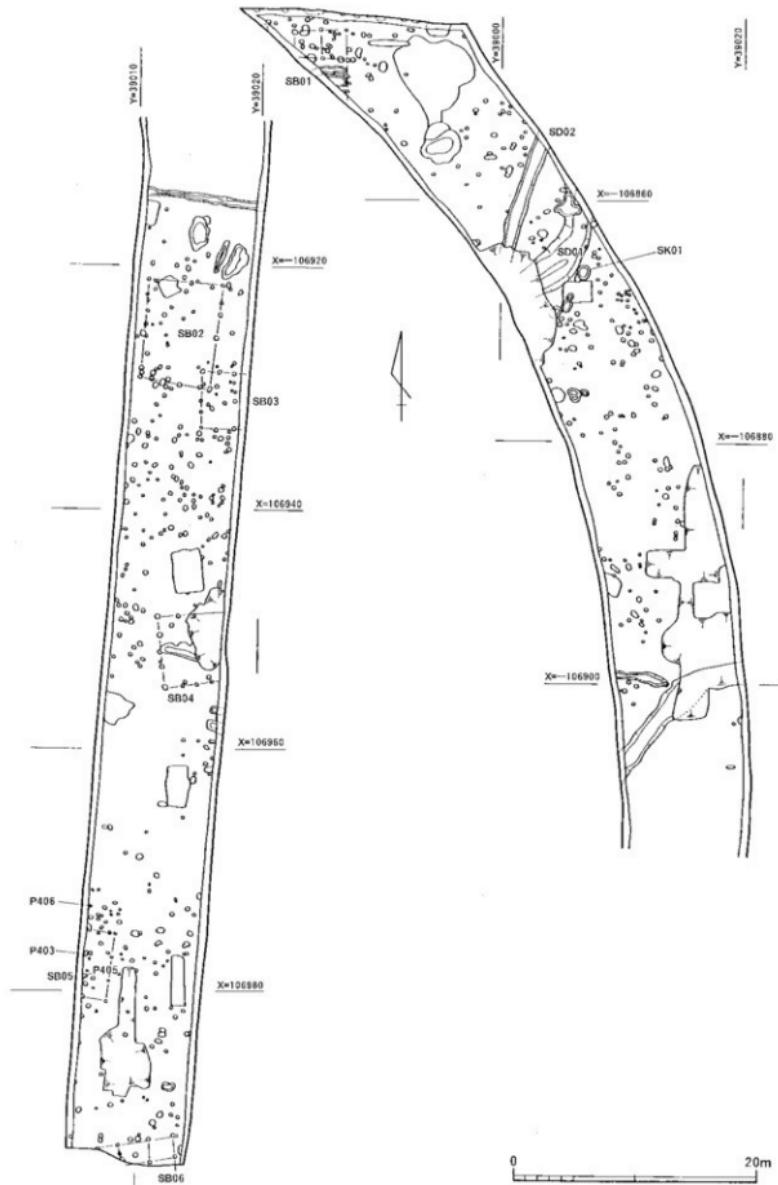
沢 構 出土遺物観察表 5  
〔 〕付数値は現存額または復元額

（）付費便は現行運送または付添便					（）付費便は現行運送または付添便				
運送機器品		規格 番号	規格 番号	規格 番号	運送機器品		規格 番号	規格 番号	規格 番号
Y1	日本郵政	10000	10000	10000	郵便局	15.6	2.0	1.6	支拂の料金
S2	日本郵政	20000	20000	20000	郵便局	30.65	1.5	6.65	郵便の料金
S3	日本郵政	30000	30000	30000	郵便局	[4.6]	0.75	0.5	郵便の料金
S4	日本郵政	30344	30344	30344	郵便局	5.9	2.9	0.7	郵便の料金
S5	日本郵政	40000	40000	40000	郵便局	8.4	2.7	0.4	郵便の料金
S6	日本郵政	50000	50000	50000	郵便局	7.6	2.0	0.8	郵便の料金

図

版

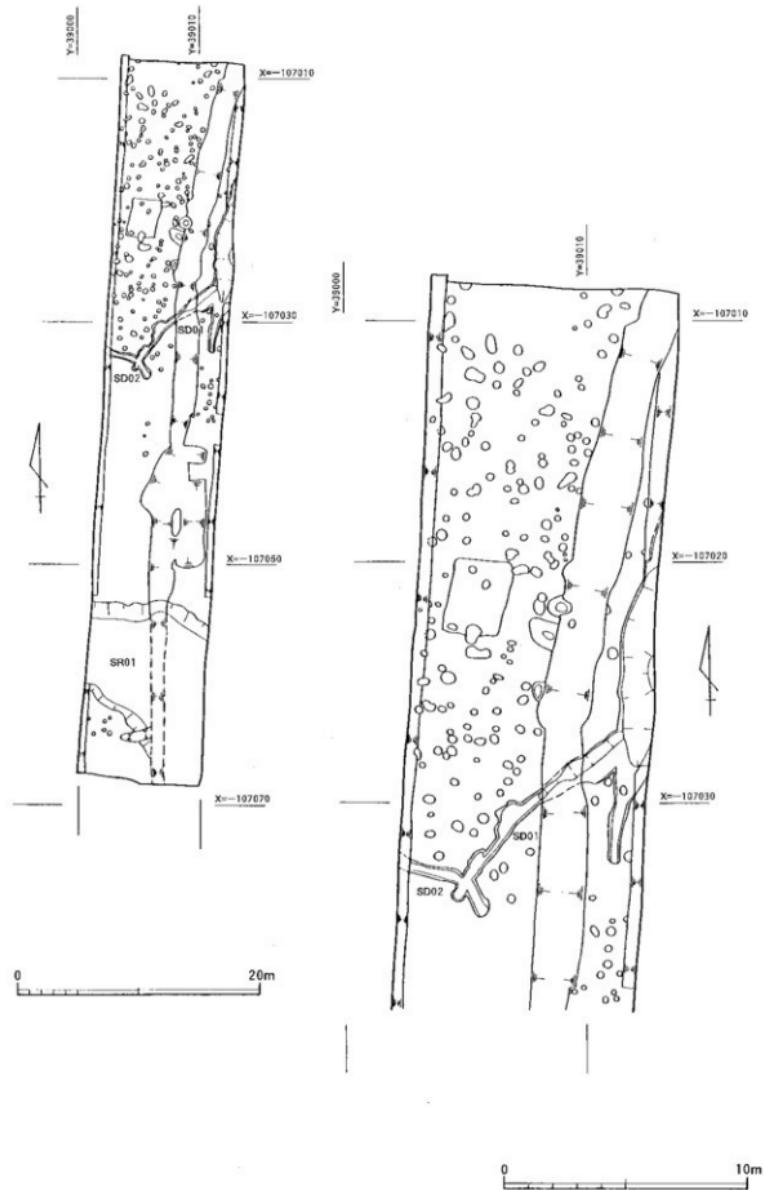
## I 地区



サルガク遺跡 I 地区全体図

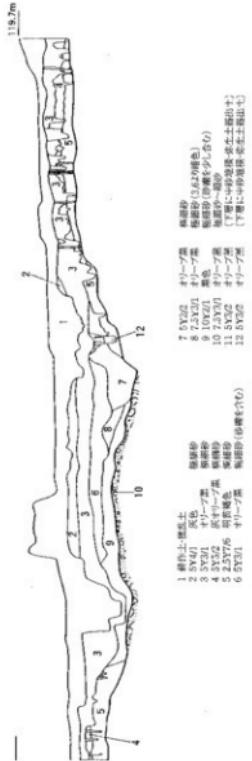
## 図版2

II 地区

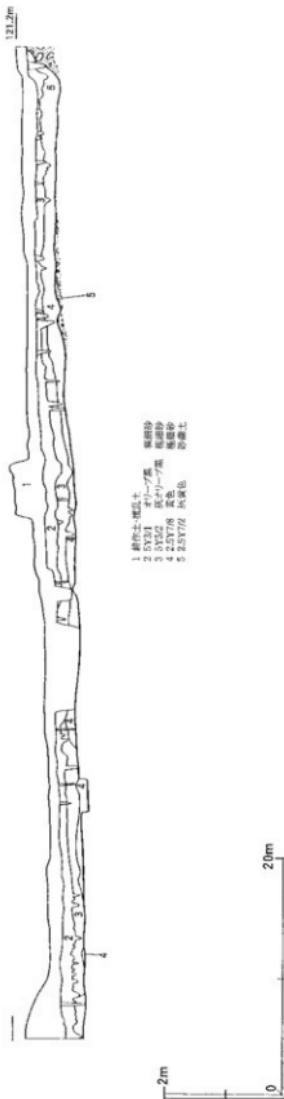


サルガク遺跡 II 地区全体図

## II区西壁断面

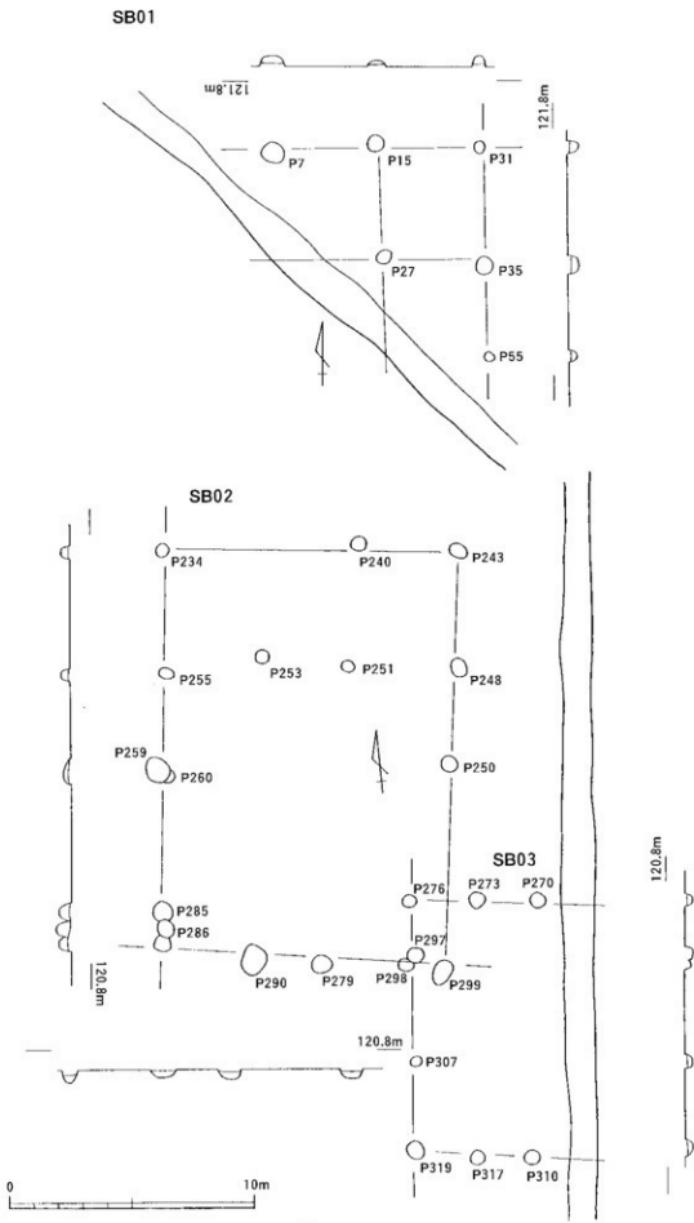


## I区西壁断面



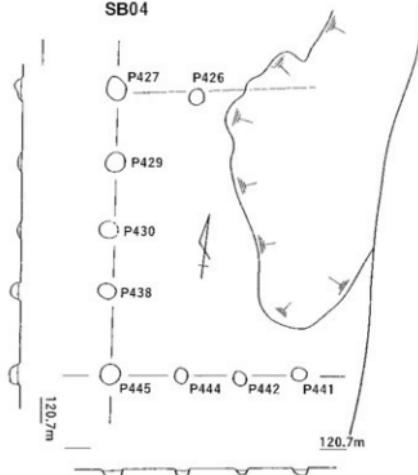
サルガク遺跡 I・II 地区西壁断面

図版4

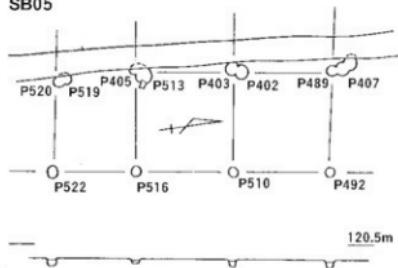


サレガク遺跡I地区掘立柱建物SB01～SB03

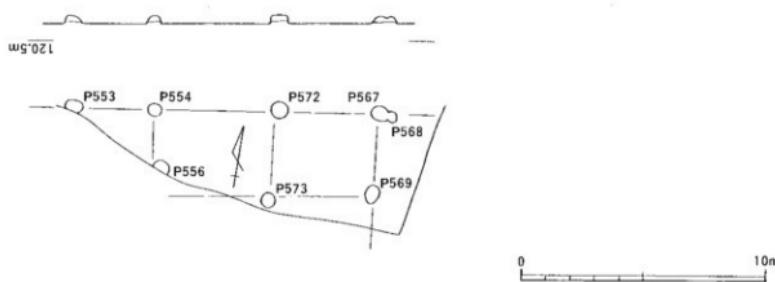
SB04



SB05

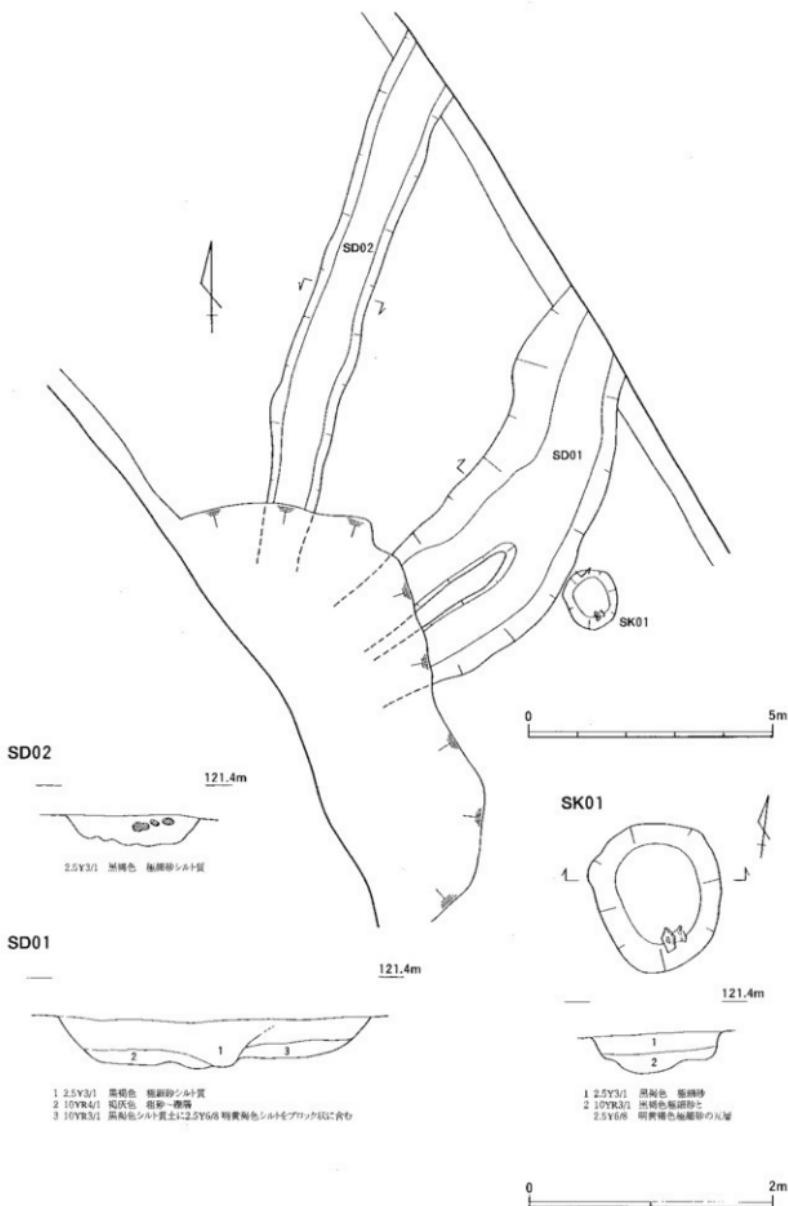


SB06

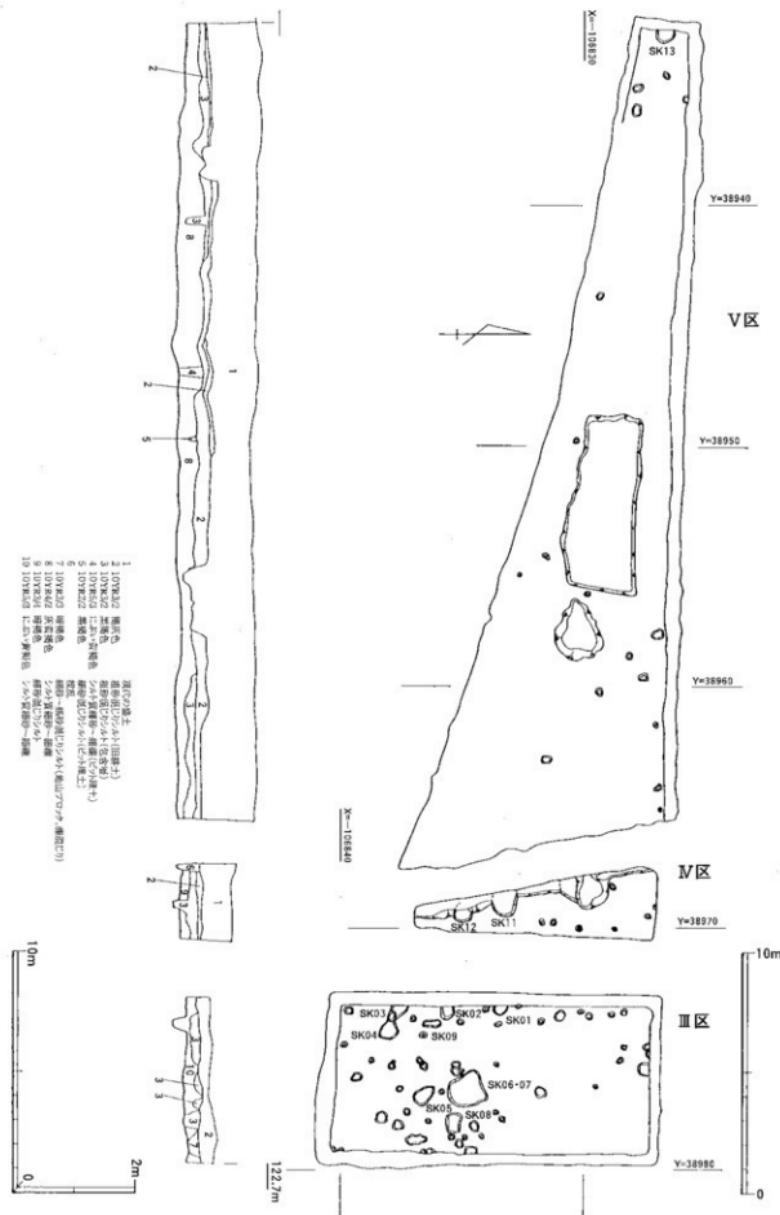


サルガク遺跡Ⅰ地区掘立柱建物SB04～SB06

図版6

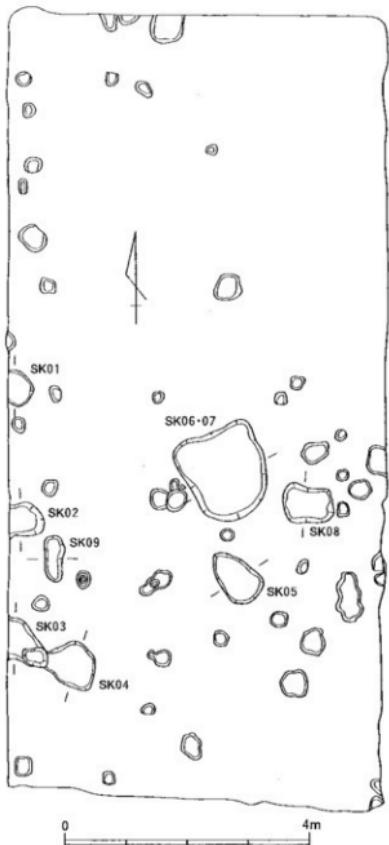


サルガク遺跡I地区遺構図



サルガク遺跡III・IV・V地区全体図・断面図

# 図版8



SK01

121.8m

1 10YR3/3 咸褐色 細砂混じりシルト  
2 10YR4/3 にむき黄褐色 シルト質粘土～粗砂

SK02

121.8m

1 10YR3/2 咸褐色 細砂混じりシルト  
2 10YR4/3 にむき黄褐色 シルト質粘土～粗砂(中混含)

SK03

121.8m

1 10YR4/2 黄褐色 シルト質粘土～粗砂

SK04

121.8m

1 10YR3/2 咸褐色 細砂混じりシルト(粗粒含む)  
2 10YR4/3 にむき黄褐色 シルト質粘土～粗砂

SK05

121.8m

1 10YR3/2 咸褐色 細砂混じりシルト(粗粒一中粒含む)  
2 10YR4/3 にむき黄褐色 シルト質粘土～粗砂

SK06・07

121.8m

1 10YR3/3 咸褐色 細砂混じりシルト(粗粒・塊状ブロック含む)  
2 10YR4/3 にむき黄褐色 シルト質粘土～粗砂 SK06粗土  
SK07粗土

SK08

121.8m

1 10YR3/2 咸褐色  
2 10YR4/4 黄褐色

細砂混じるシルト(粗粒・塊状ブロック含む)  
シルト質粘土～粗砂

SK09

121.8m

1 10YR3/5 咸褐色

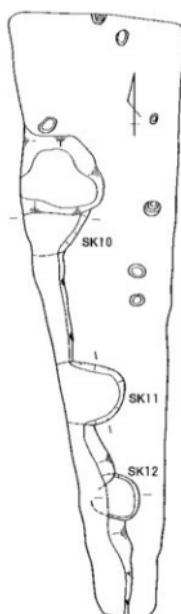
細砂混じるシルト(粗粒含む)

0

2m

サルガク遺跡III地区遺構図

IV区



SK10

121.4m



1 10YR3/2 黒褐色 細砂泥じりシルト(鉄錆含む)

SK11

121.6m



1 10YR3/2 黒褐色 細砂泥じりシルト

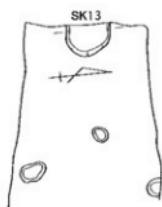
SK12

121.6m



1 10YR4/3 に赤い黄褐色 細砂泥じりシルト(半漂含む)

V区



SK13

121.4m



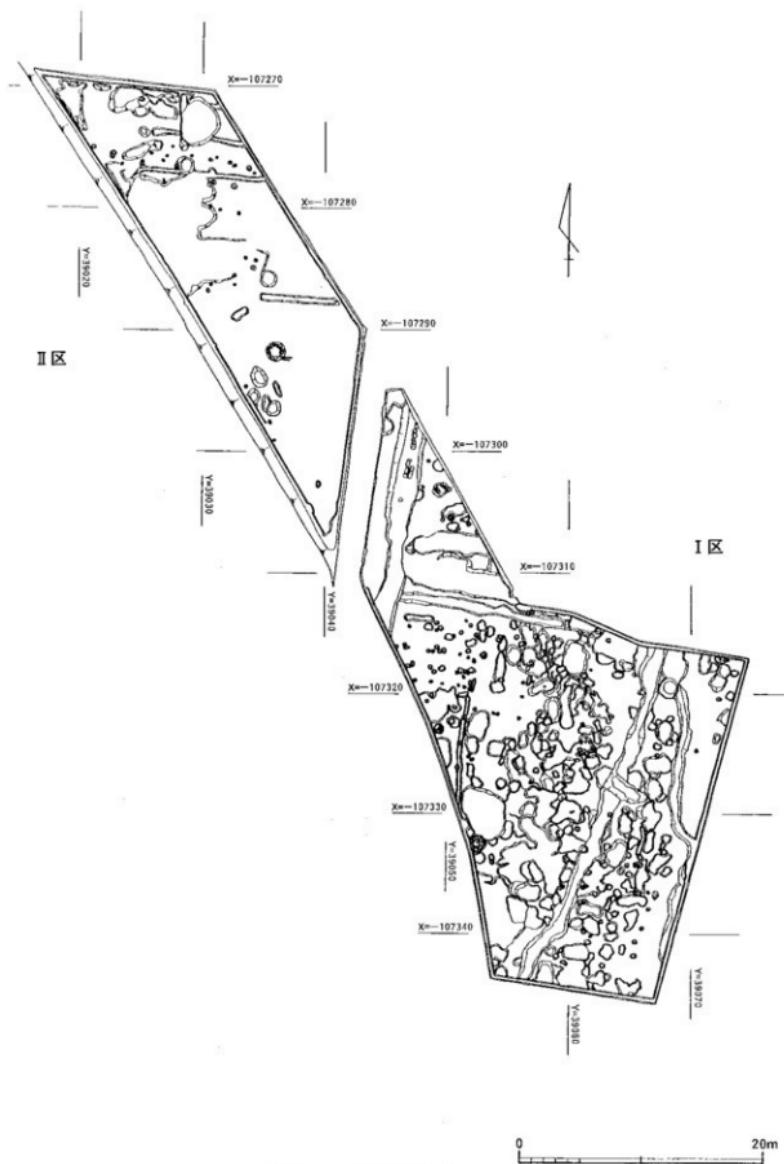
1 10YR3/2 黒褐色 細砂泥じりシルト

0 4m

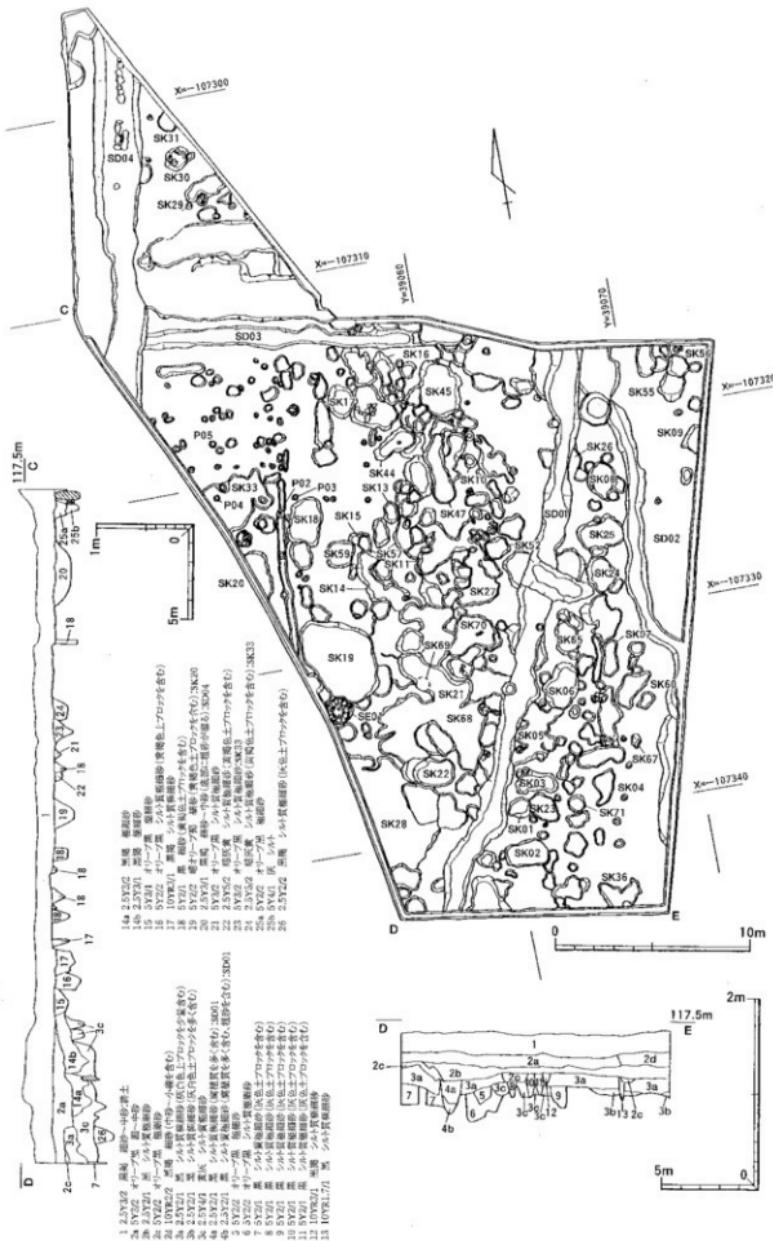
0 2m

サルガク遺跡IV・V地区遺構図

図版10



沢構 I + II 地区全体図

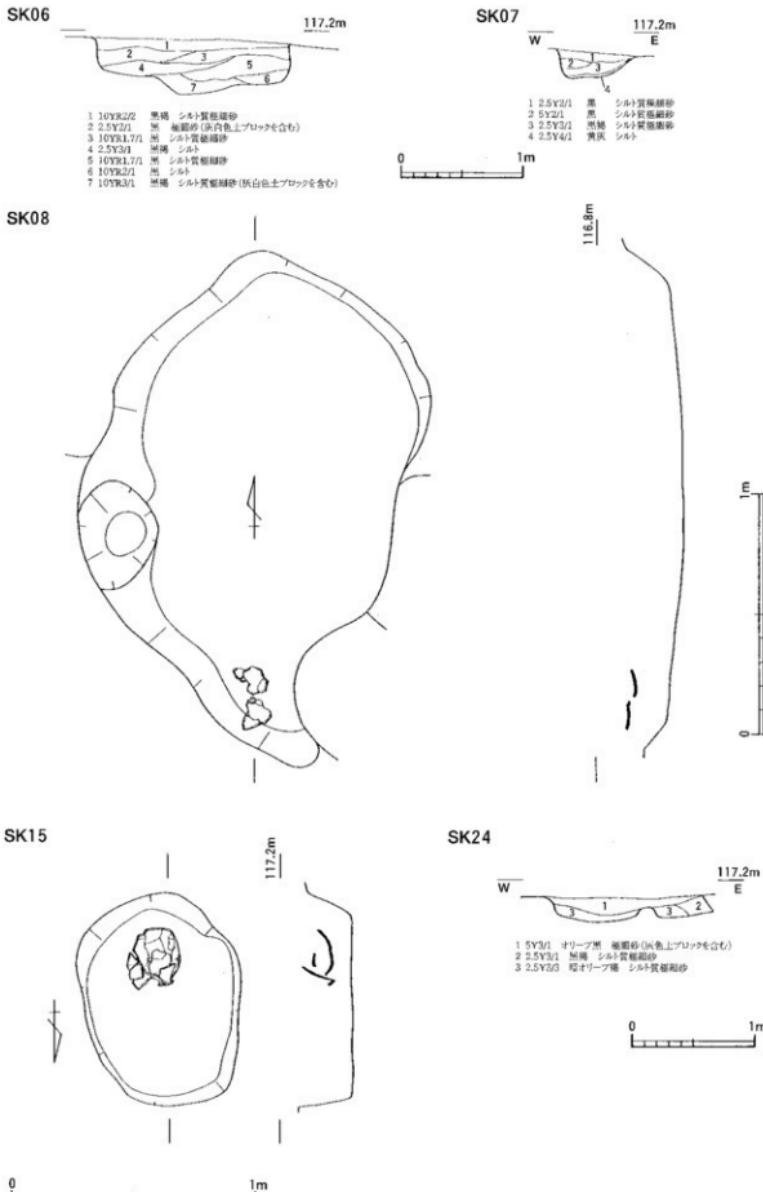


沢構 I 地区遺構配置図・断面図

図版12

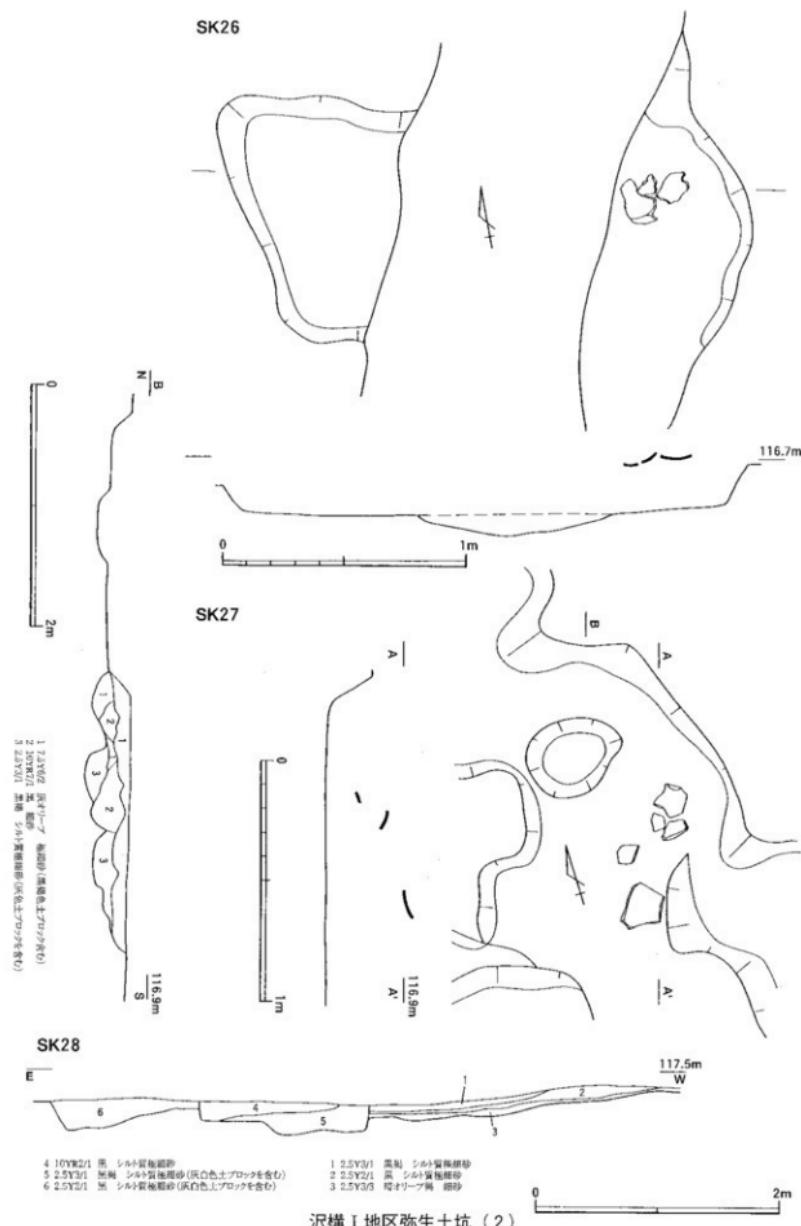


沢構I地区弥生土坑断面位置図

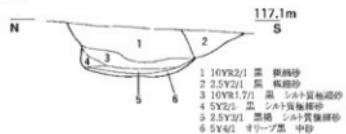


沢構I地区弥生土坑(1)

図版14



SK44



SK45



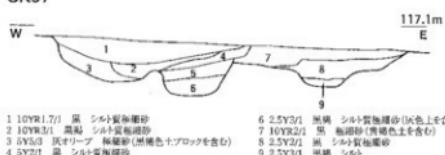
SK47



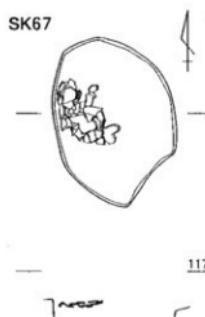
SK52



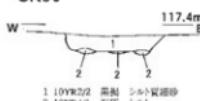
SK57



SK67



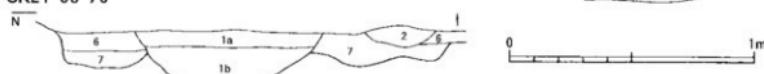
SK60



SK65



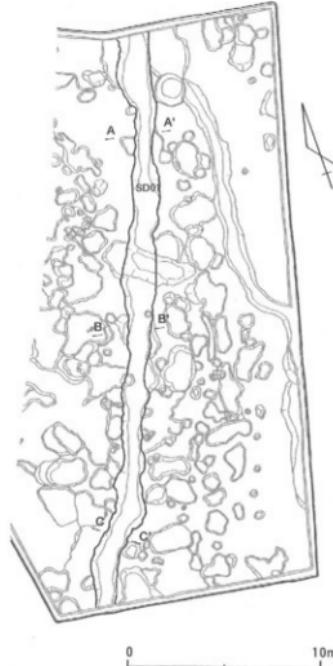
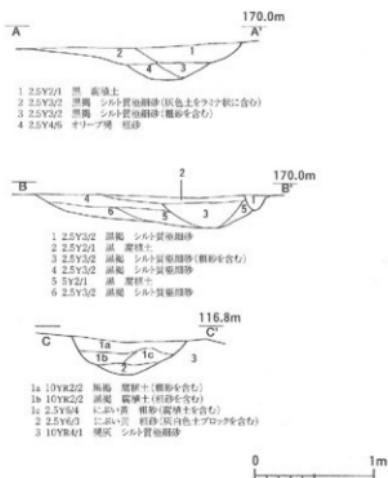
SK21-68-70



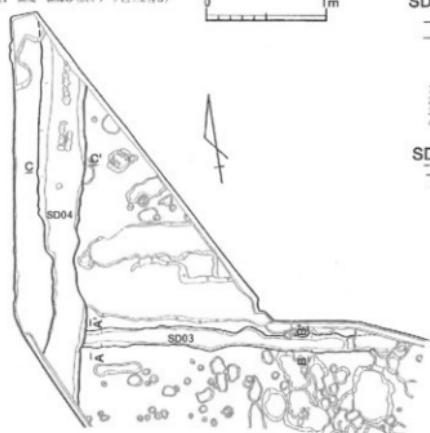
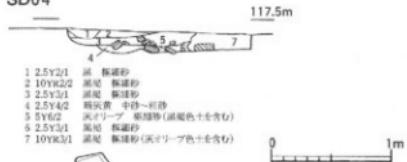
沢構Ⅰ地区弥生土坑（3）

# 図版16

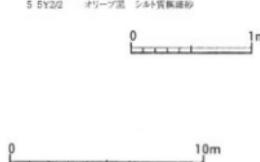
SD01



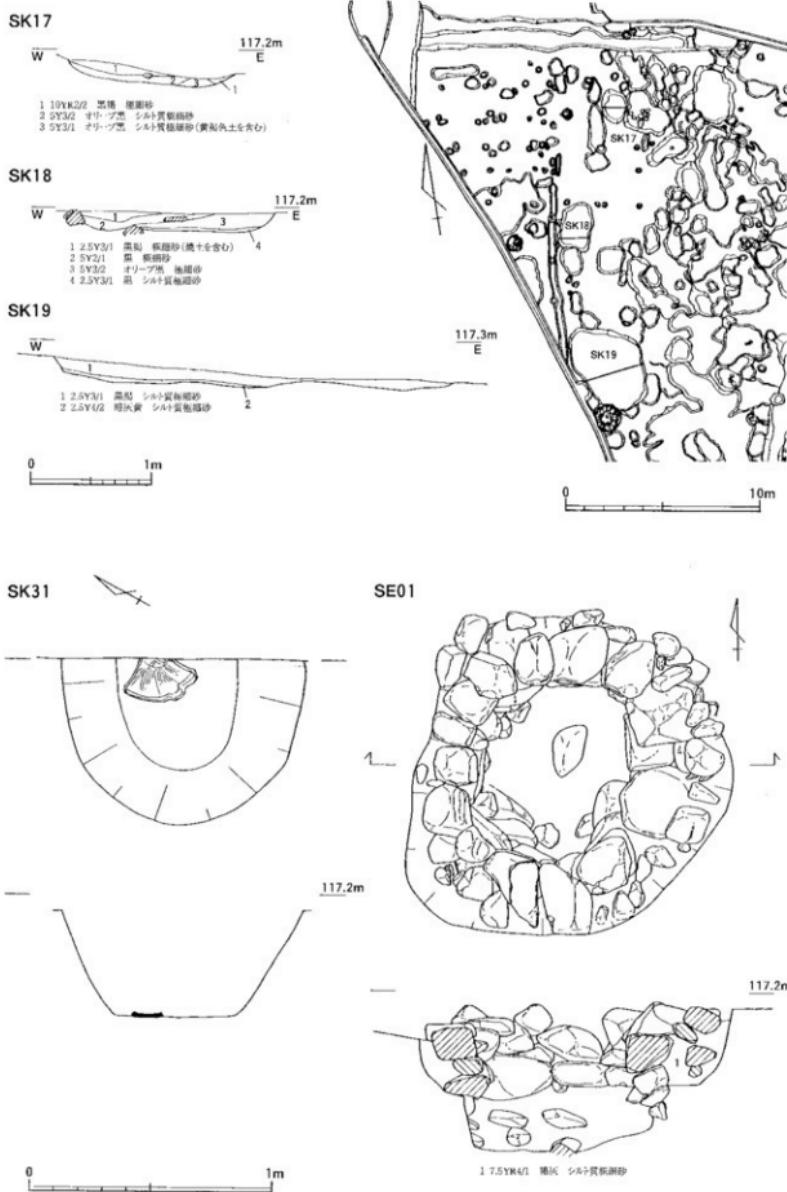
SD04



SD03



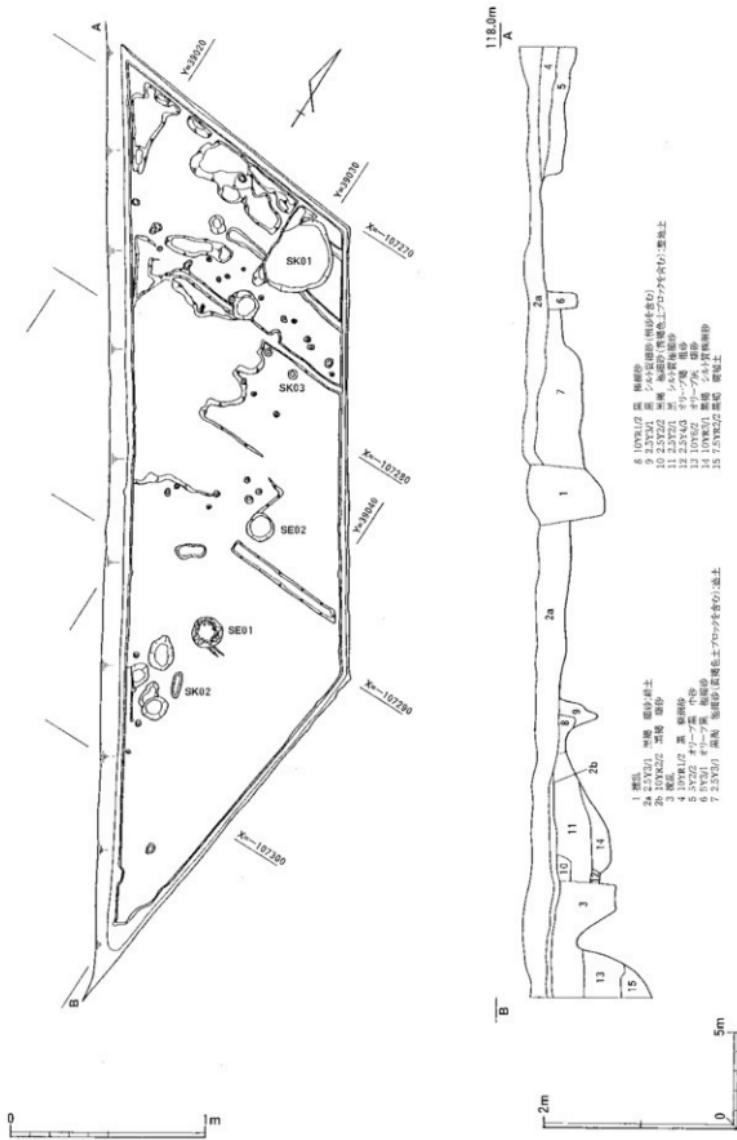
沢構 I 地区遺構図 (1)



図版18



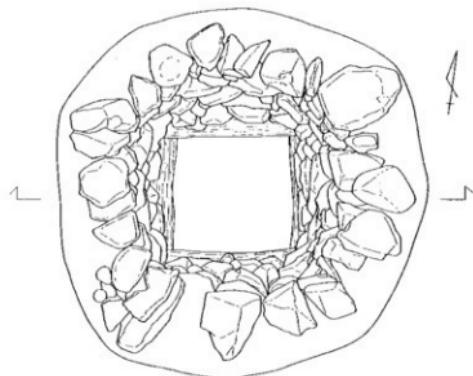
沢横Ⅰ地区掘立柱建物SB01



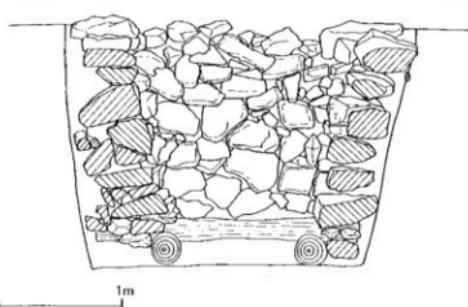
沢構II地区構造配置図・断面図

図版20

SE01



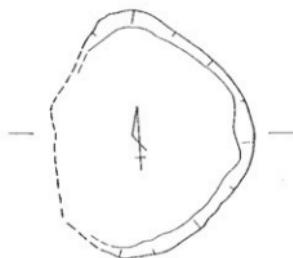
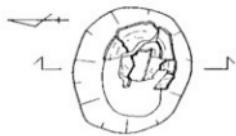
117.2m



0

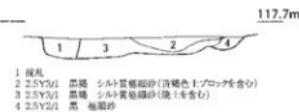
1m

SK02



0

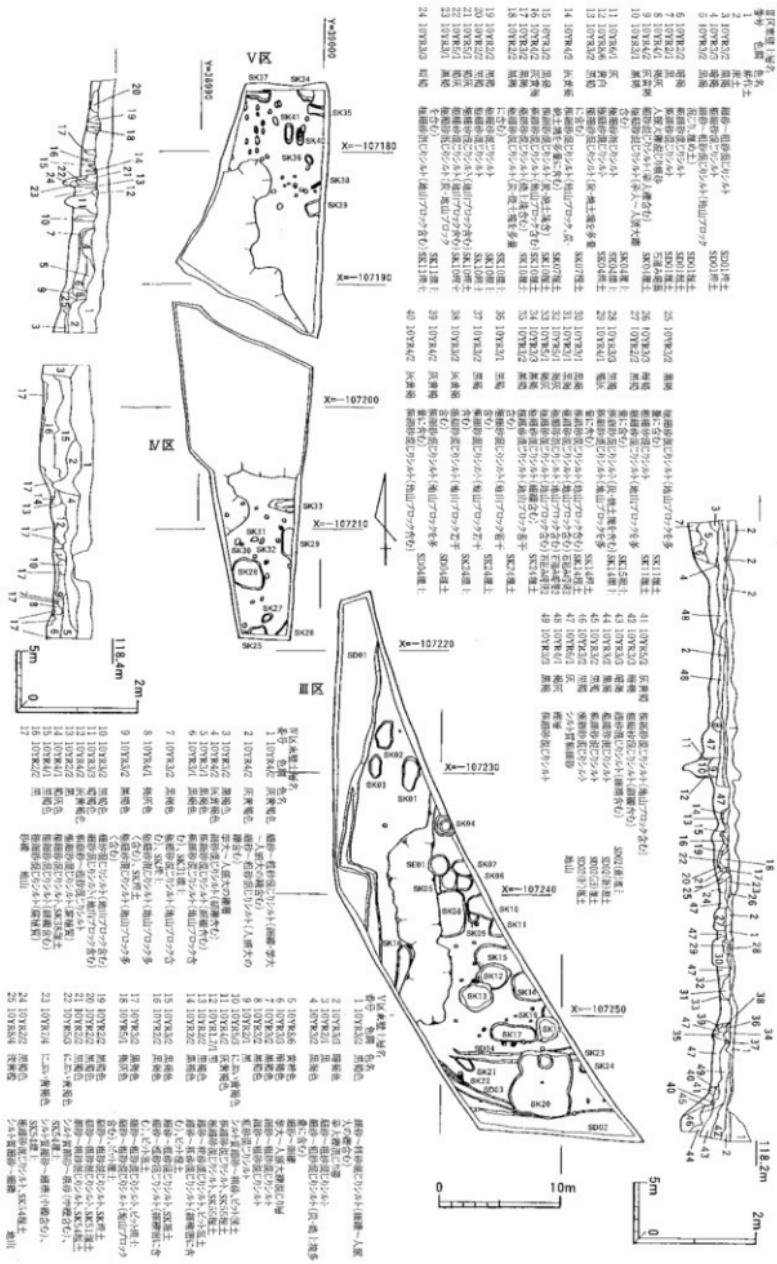
1m



0

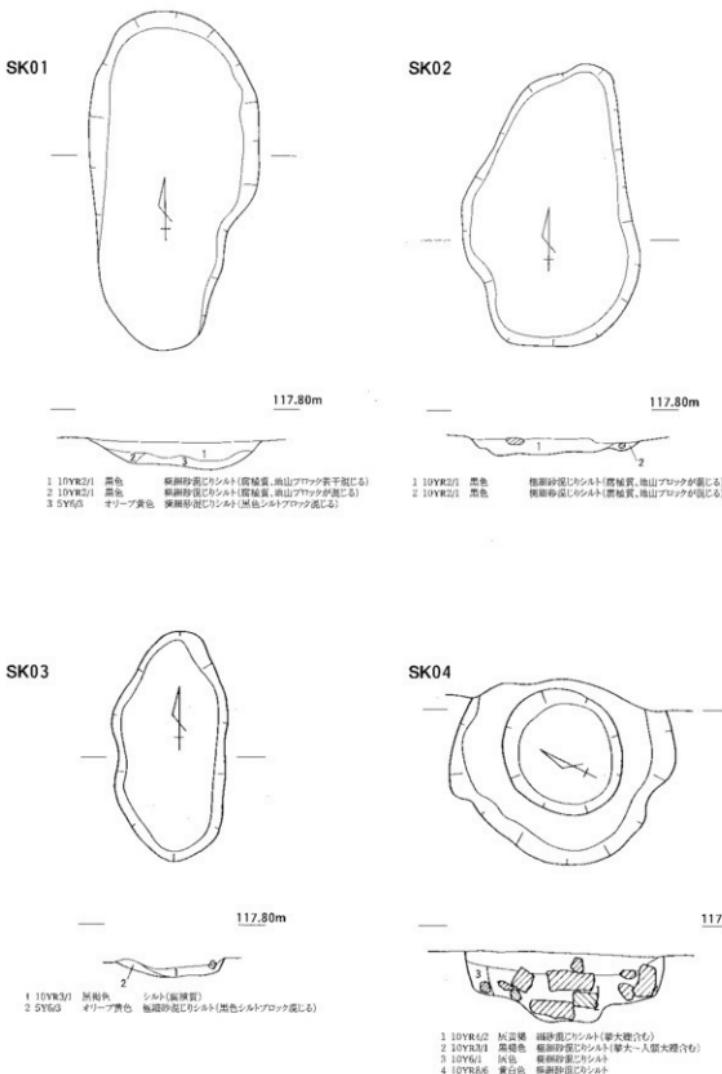
4m

沢構Ⅱ地区造構図



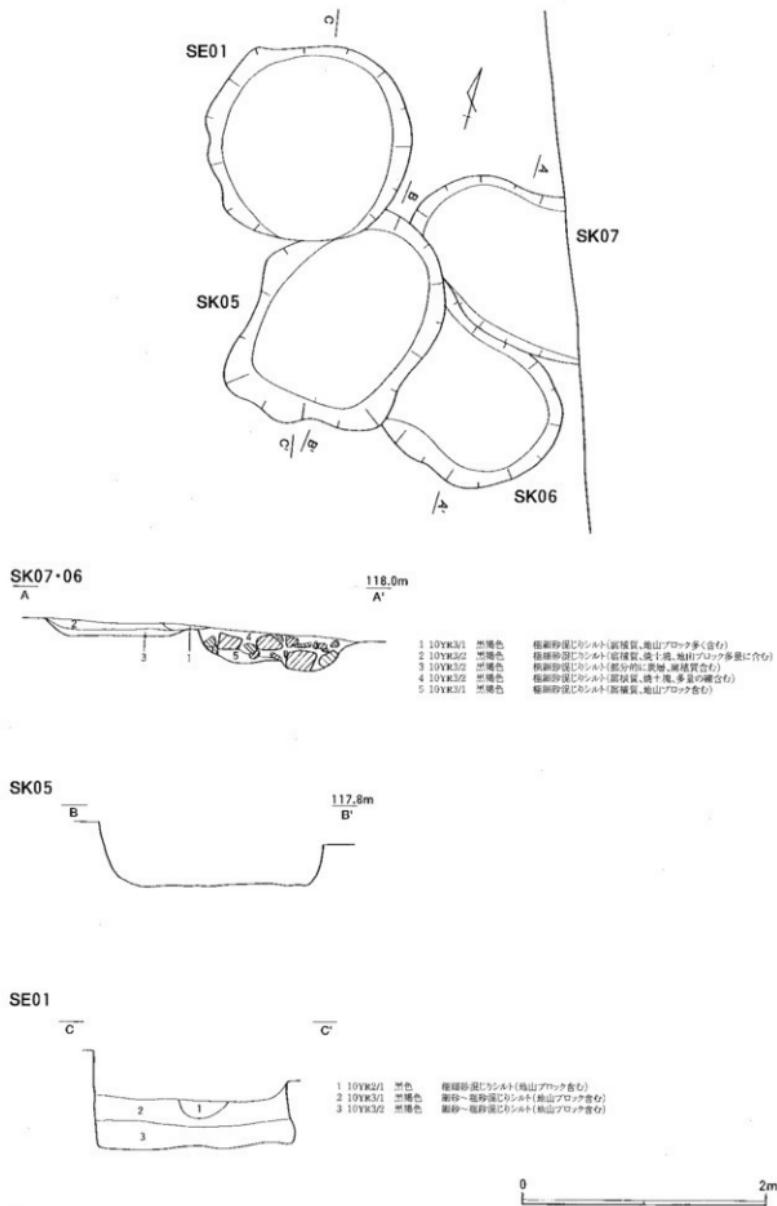
沢構III・IV・V地区全体図・断面図

図版22

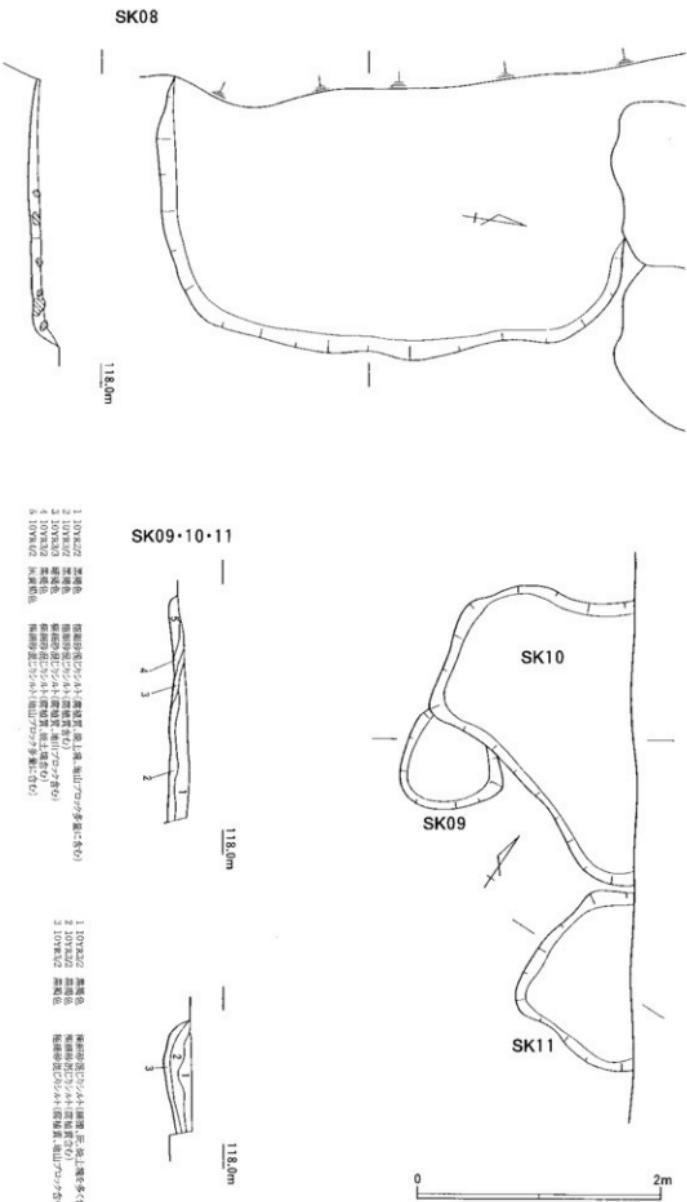


沢構Ⅲ地区遺構図 (1)

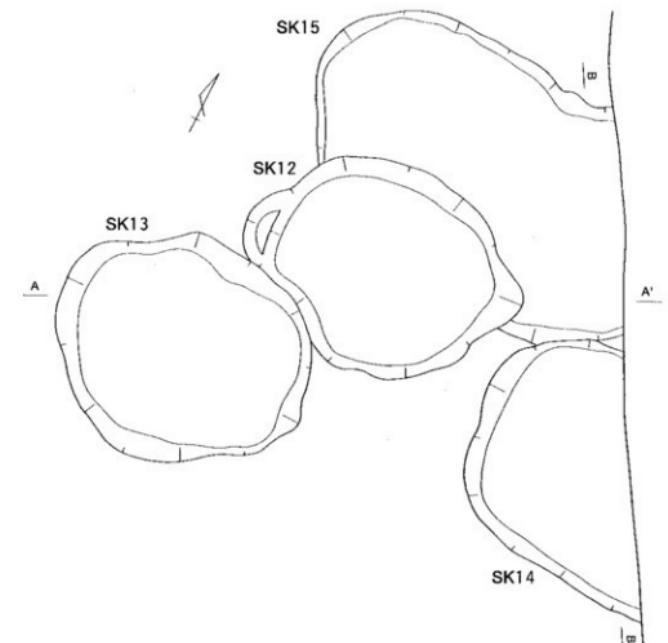
0 2m



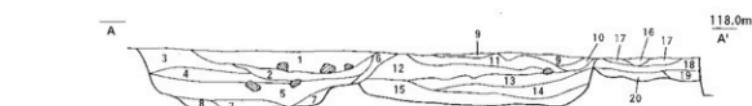
## 図版24



沢横Ⅲ地区遺構図（3）



SK13・12・15



1 10YR4/2	灰黄褐色	細緻砂泥ごけシルト(粘土質、地山ブロック混じり、丘陵部に分布)	11 10YR3/2	黒褐色	細緻砂泥ごけシルト(粘土質に混じる)	SK12堆土
2 10YR3/2	米色	灰化土層	12 10YR3/2	暗褐色	細綈砂泥ごけシルト(地山ブロック混じる)	SK12堆土
3 10YR5/2	灰青褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山ブロック混じる、丘陵部)	13 10YR3/0	暗褐色	地山砂泥ごけシルト(地山ブロック混じる)	SK12堆土
4 10YR5/2	灰青褐色	粗綈砂泥ごけシルト	14 10YR3/1	黑褐色	地山砂泥ごけシルト(地山ブロック混じる)	SK12堆土
5 10YR4/2	褐褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山)	15 10YR2/1	黑褐色	地山砂泥ごけシルト(地山ブロック混じる)	SK12堆土
6 10YR4/2	褐褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山)	16 10YR3/2	黑褐色	地山砂泥ごけシルト(地山ブロック混じる)	SK15堆土
7 10YR4/1	褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山)	17 10YR3/2	黑褐色	地山砂泥ごけシルト(地山ブロック混じる)	SK15堆土
8 7.50G1	綠灰色	粗綈砂泥ごけシルト(地山)	18 10YR3/2	黑褐色	地山砂泥ごけシルト(地山ブロック多量に混じる)	SK15堆土
9 10YR3/2	黑褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山の岩質を含む地山)	19 10YR3/1	黑褐色	地山砂泥ごけシルト(地山ブロック多量に混じる)	SK15堆土
10 10YR3/2	黑褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山、地盤に混じる、16と同、滑か?)	20 10YR8/6	黃褐色	地山砂泥ごけシルト(地山ブロック混じる)	SK15堆土



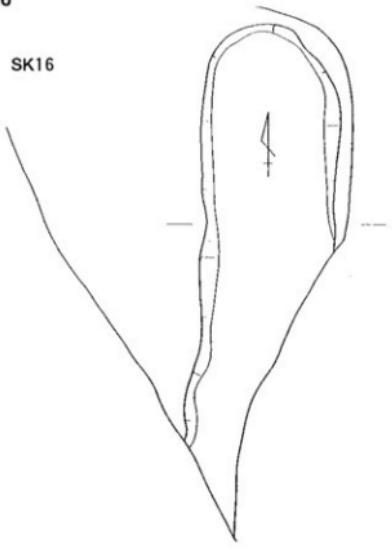
1 10YR3/2	米褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山、地盤に多量に含む)	SK14堆土
2 10YR3/3	暗褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山ブロック含む)	SK14堆土
3 10YR3/3	暗褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山ブロック多量に含む)	SK14堆土
4 10YR3/3	暗褐色	粗綈砂泥ごけシルト	SK14堆土
5 10YR3/2	米褐色	粗綈砂泥ごけシルト	SK14堆土
6 10YR3/2	米褐色	粗綈砂泥ごけシルト	SK14堆土
7 10YR3/2	米褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山ブロック含む)	SK15堆土
8 10YR3/2	米褐色	粗綈砂泥ごけシルト(地山ブロック多量に含む)	SK15堆土
9 10YR8/6	黃褐色	粗綈砂泥ごけシルト	SK15堆土

0 3m

沢構Ⅲ地区遺構図（4）

図版26

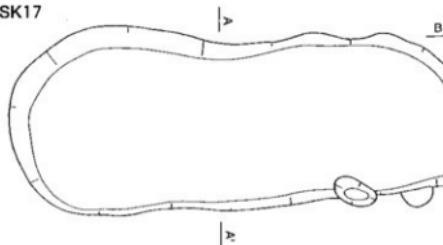
SK16



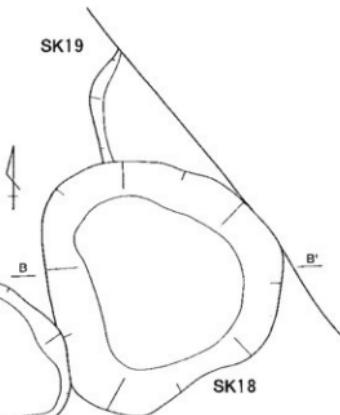
117.8m

1 10YR2/1 黒色 植物砂漠化シルト(腐植質、地山ブロック含む)

SK17



SK19



SK18

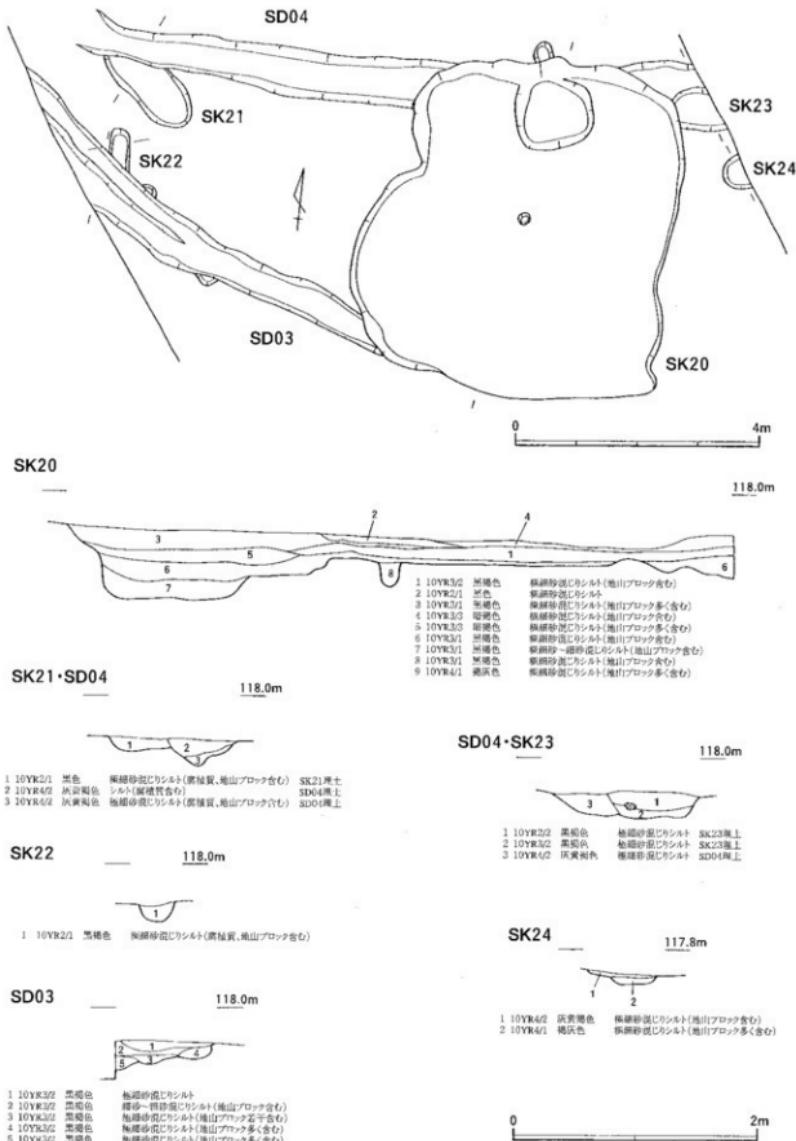
A 118.0m A'

- 1 10YR3/2 黄褐色 腐植砂漠化シルト(地山ブロック多く含む)
- 2 10YR4/2 黄褐色 植物砂漠化シルト(地山ブロック含む)
- 3 10YR4/2 黄褐色 植物砂漠化シルト(地山ブロック含む)
- 4 10YR3/1 黄褐色 植物砂漠化シルト(半大~人頭の頸、地山ブロック含む)
- 5 10YR2/1 黄褐色 植物砂漠化シルト(半大~人頭の頸、地山ブロック多く含む)
- 6 10YR2/1 黑色 シルト

B 118.0m B'

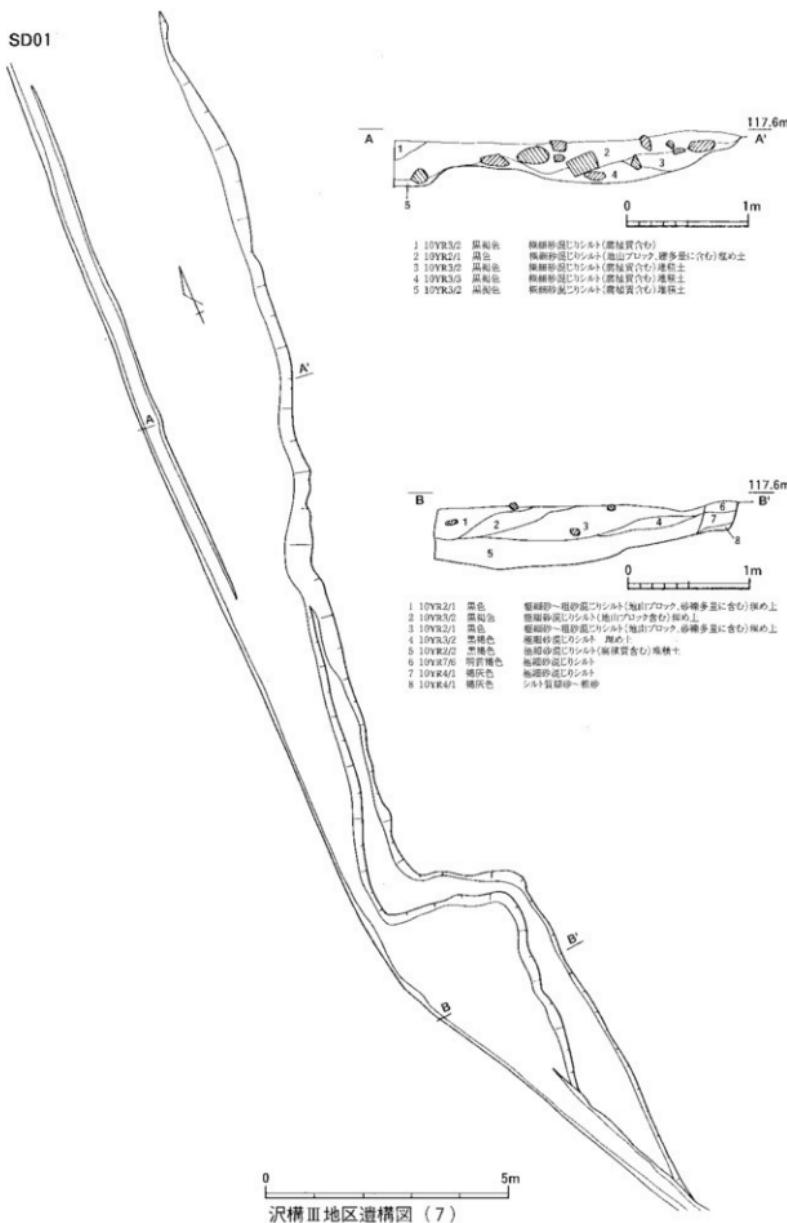
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 植物砂漠化シルト(腐を多く含む)

0 2m

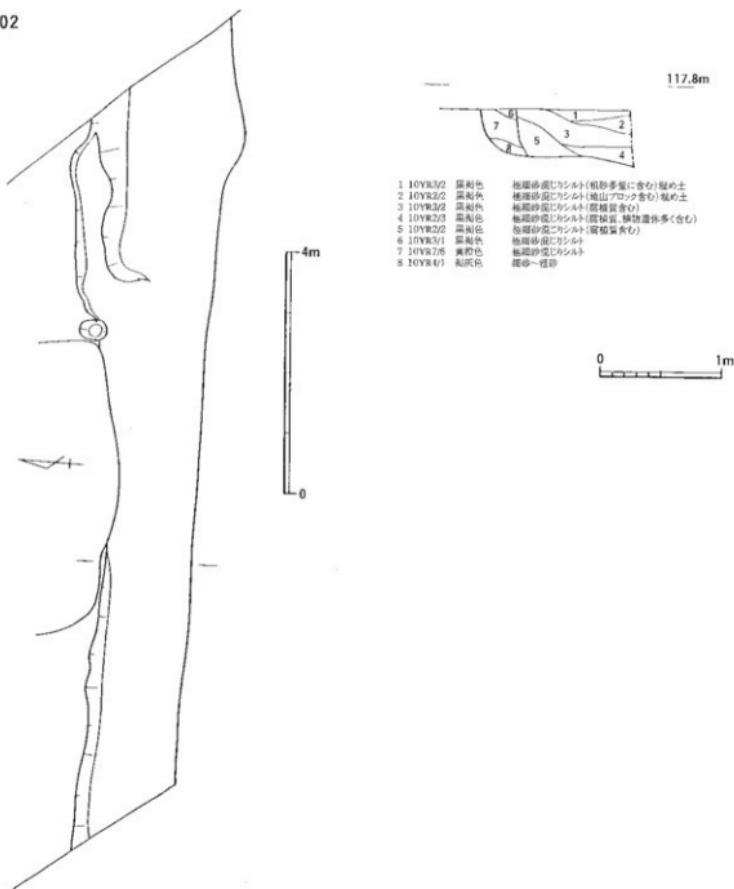


沢横III地区遺構図 (6)

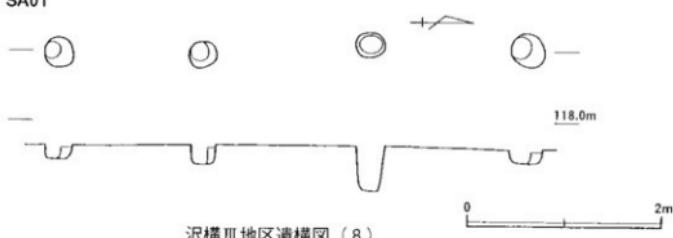
図版28



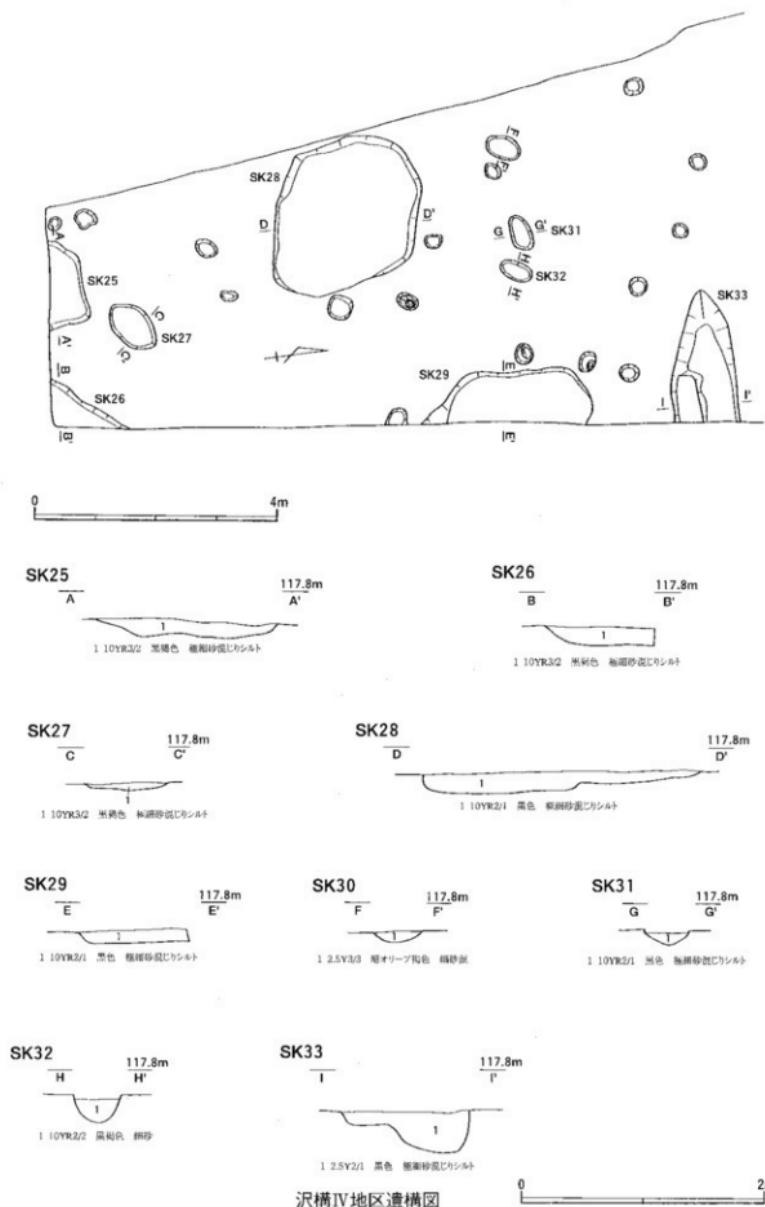
SD02

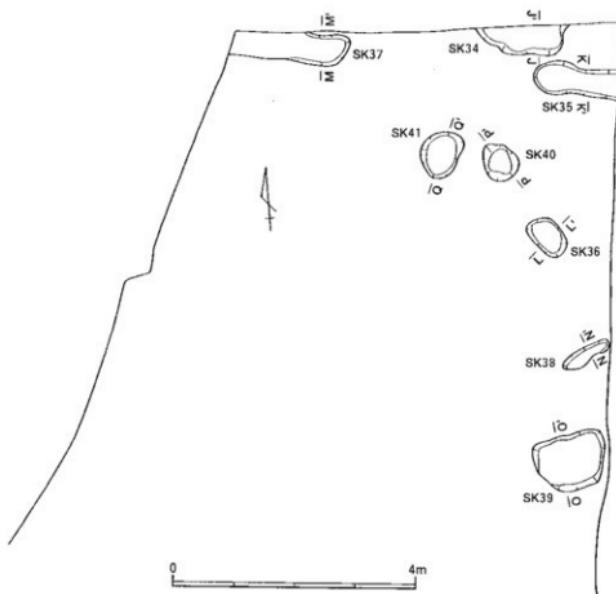


SA01



図版30





**SK34**  
J—J' 118.2m  
I 10YR3/2 黒褐色 細緻均質シルト

**SK35**  
K—K' 118.2m  
I 10YR2/1 黒色 細緻均質シルト

**SK36**  
L—L' 118.2m  
I 10YR3/2 黒褐色 細緻均質粘土

**SK37**  
M—M' 118.2m

**SK38**  
N—N' 118.2m

**SK39**  
O—O' 118.0m

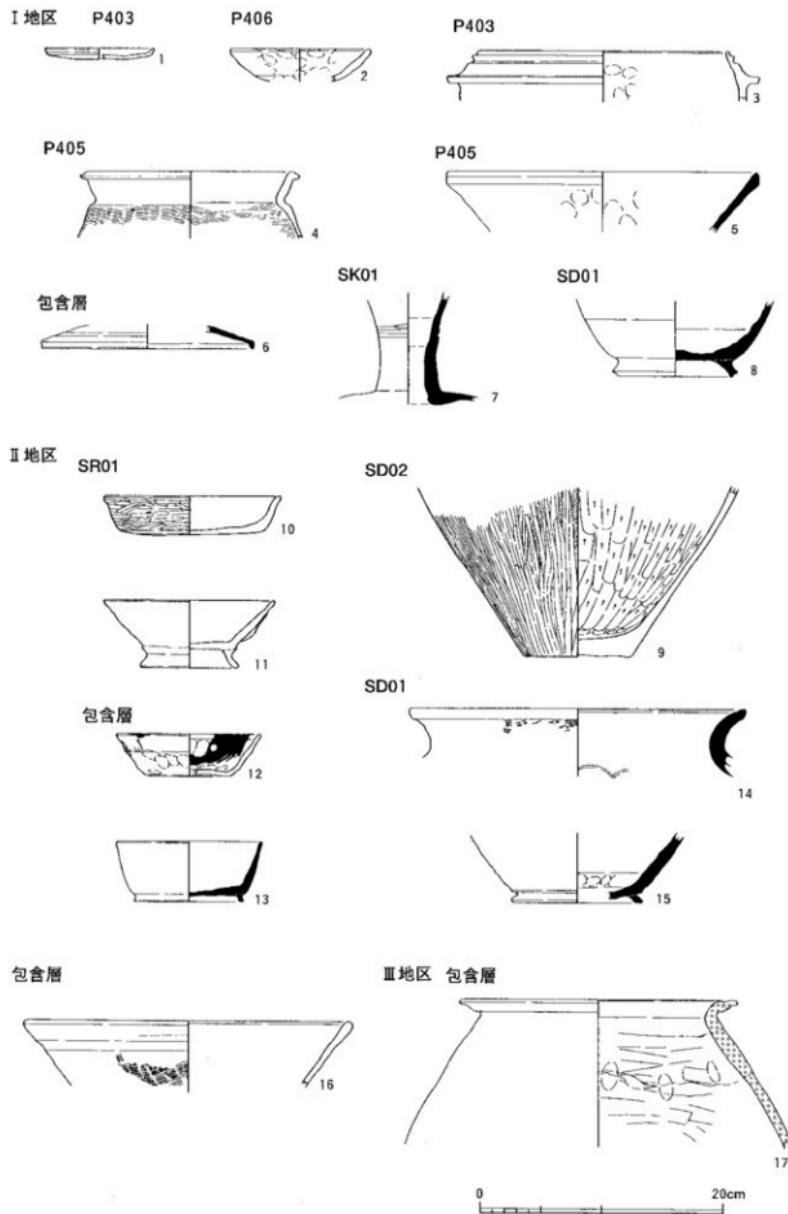
**SK40**  
P—P' 118.2m

**SK41**  
Q—Q' 118.2m

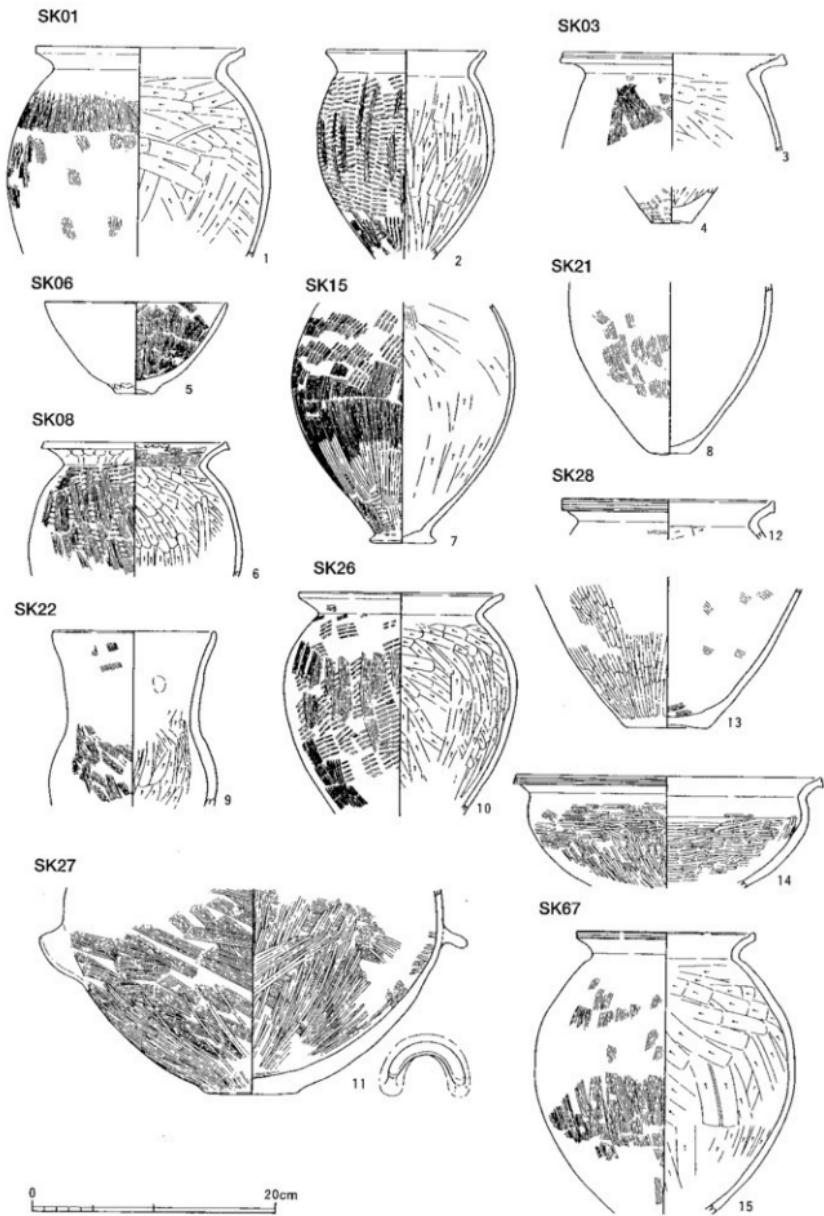
0 2m

沢構V地区遺構図

図版32

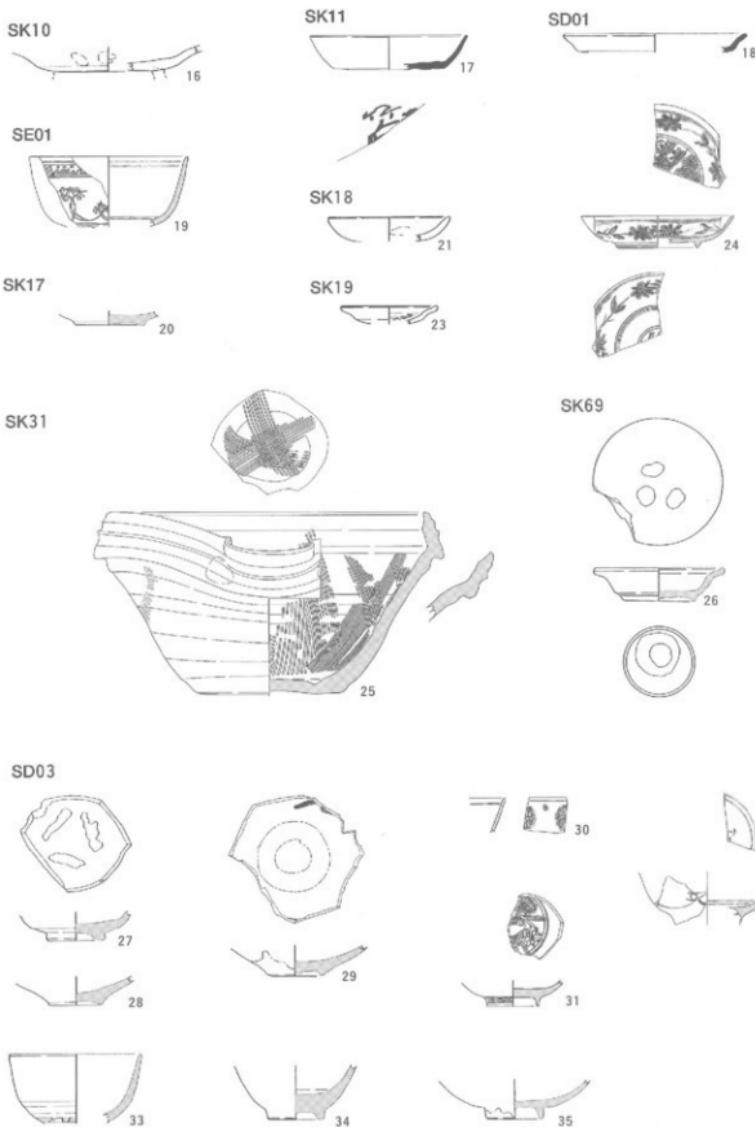


サルガク遺跡出土の土器・陶磁器



沢構I地区出土の土器・陶磁器（1）

図版34



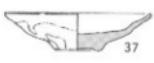
0 20cm

沢構I地区出土の土器・陶磁器（2）

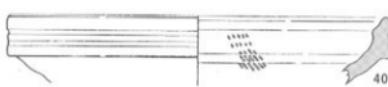
SD 04



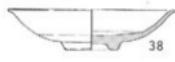
36



37



40



38



39



41



42



43



44



45



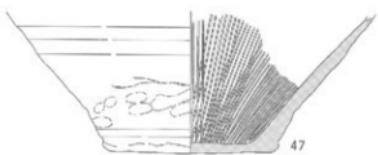
46



48



49



47



50



51



52



包含層



50



51

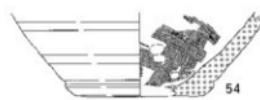


52

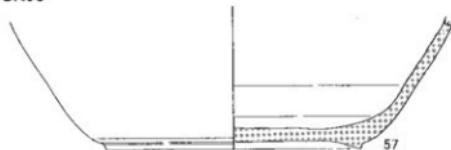
沢橋 I 地区出土の土器・陶磁器（3）

図版36

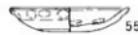
SE01



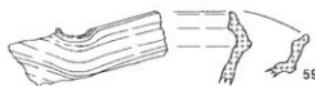
SK03



SK01



包含層



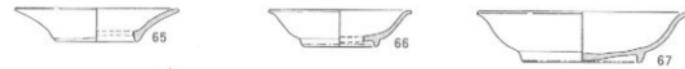
SK01



SK04



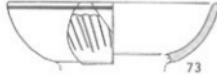
SK05



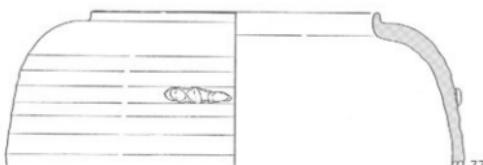
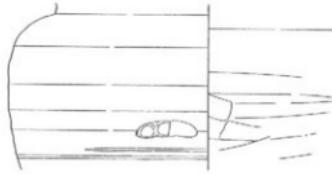
SK06



SK07



SK09



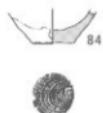
沢構III地区出土の土器・陶磁器（1）

図版38

SK13



SK10



SK15



SK17



SK20



SK35



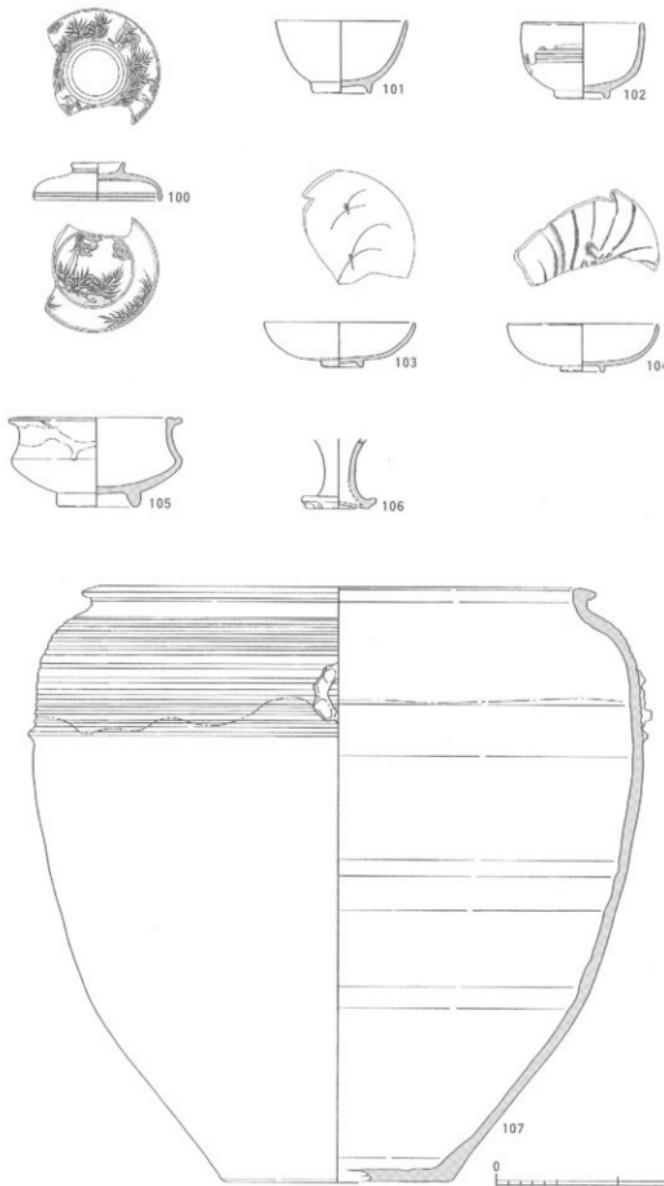
SE01



SD01



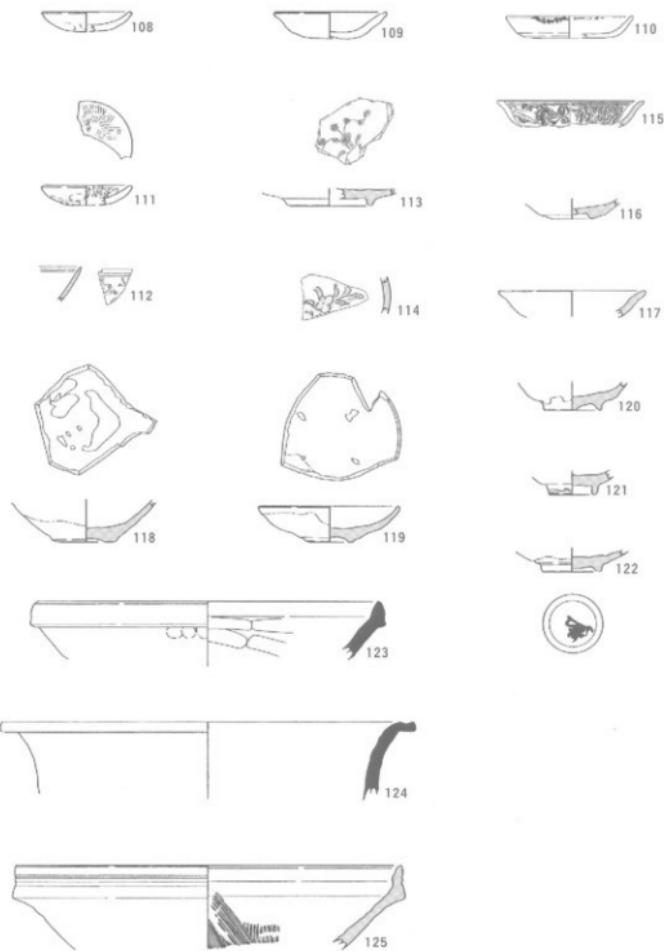
沢構III地区出土の土器・陶磁器（2）



沢構III地区出土の土器・陶磁器（3）

図版40

SD02

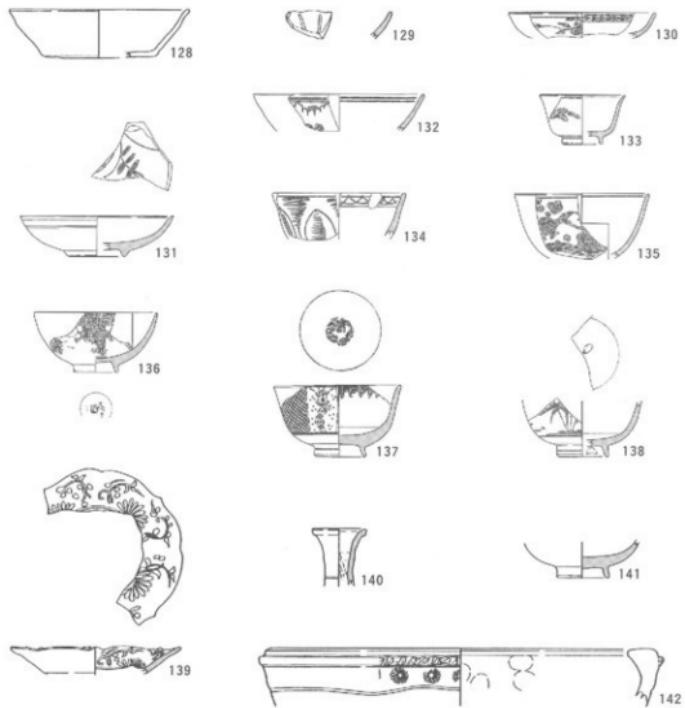


SD04

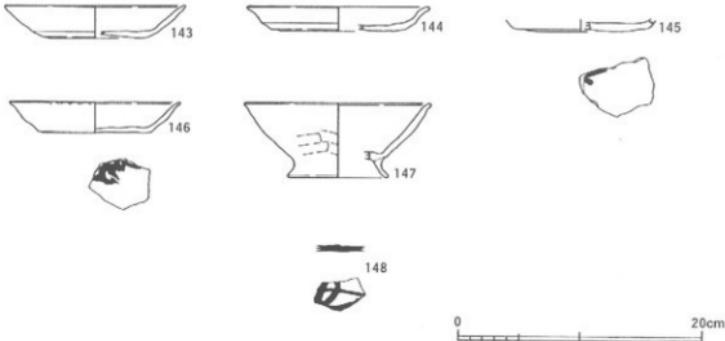


沢構III地区出土の土器・陶磁器（4）

## III・IV地区 包含層



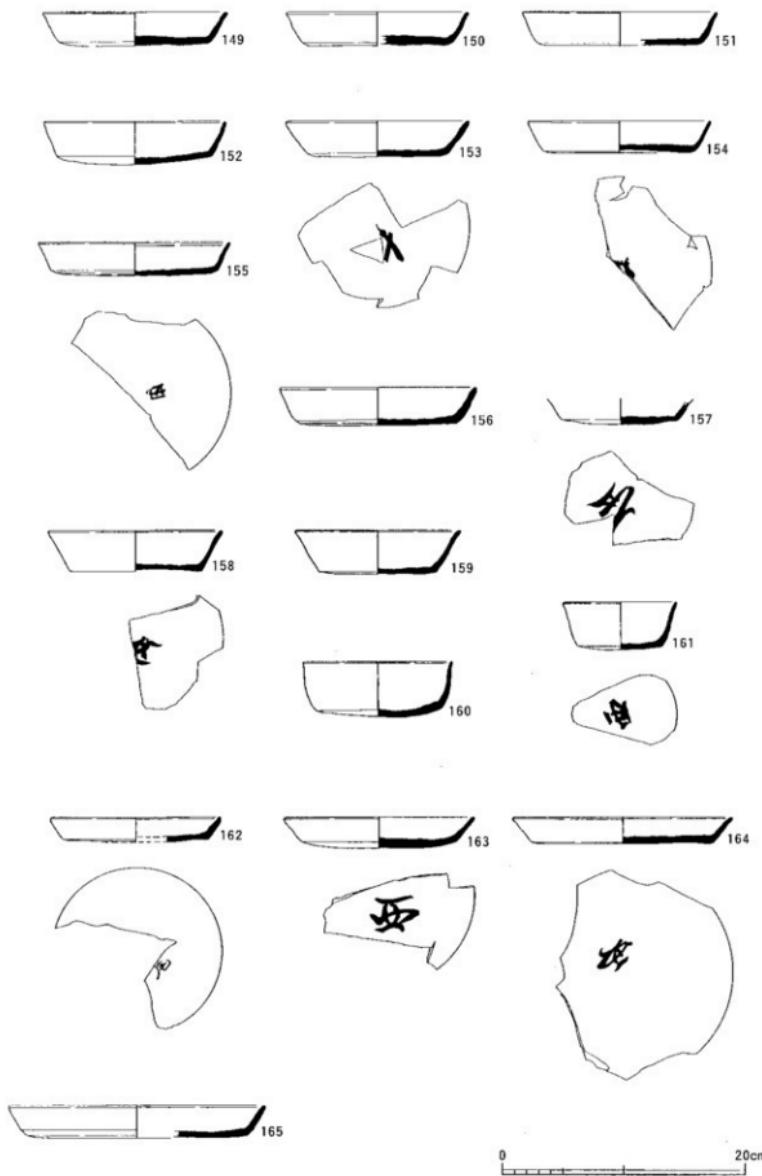
## IV・V地区 包含層



沢橋Ⅲ～V 地区出土の土器・陶磁器

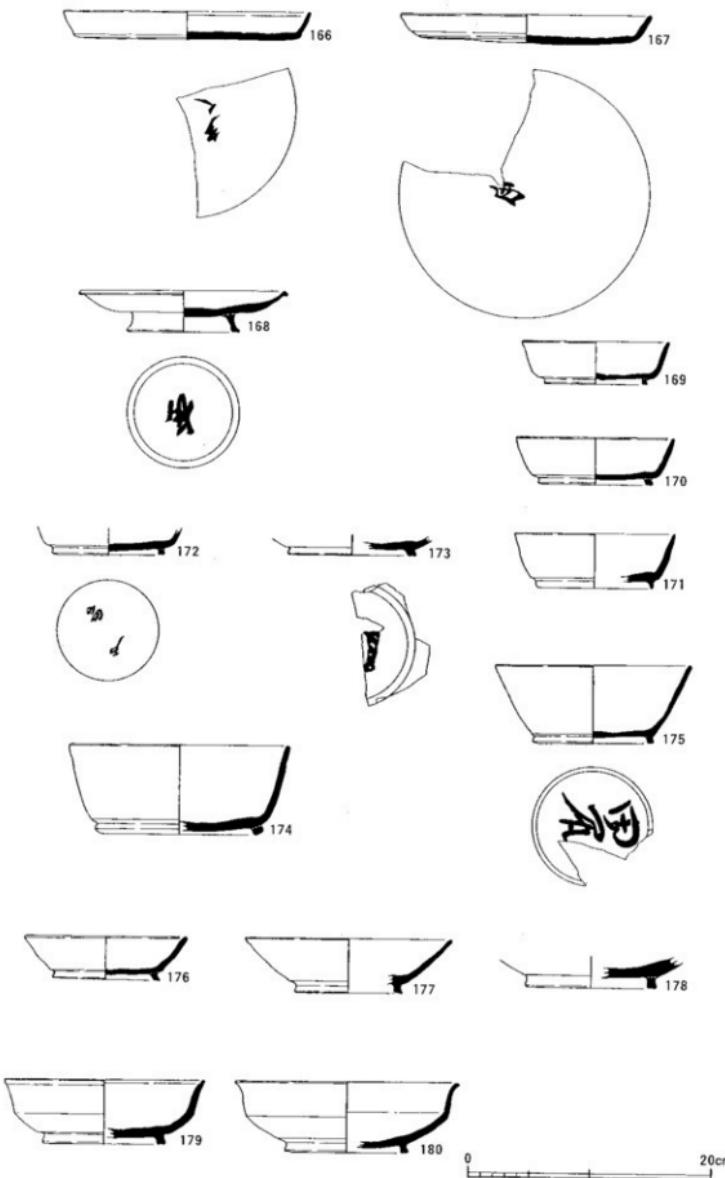
図版42

IV・V地区 包含層



沢構IV・V地区出土の土器・陶磁器（1）

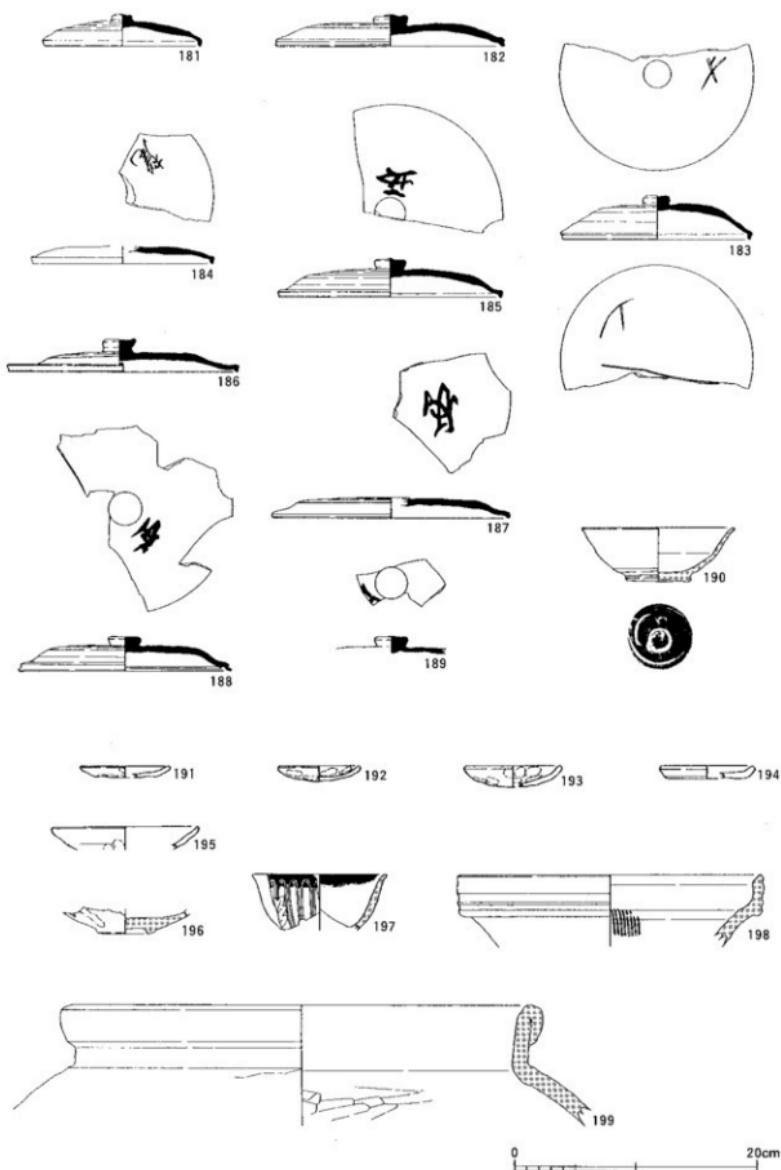
## IV・V地区 包含層



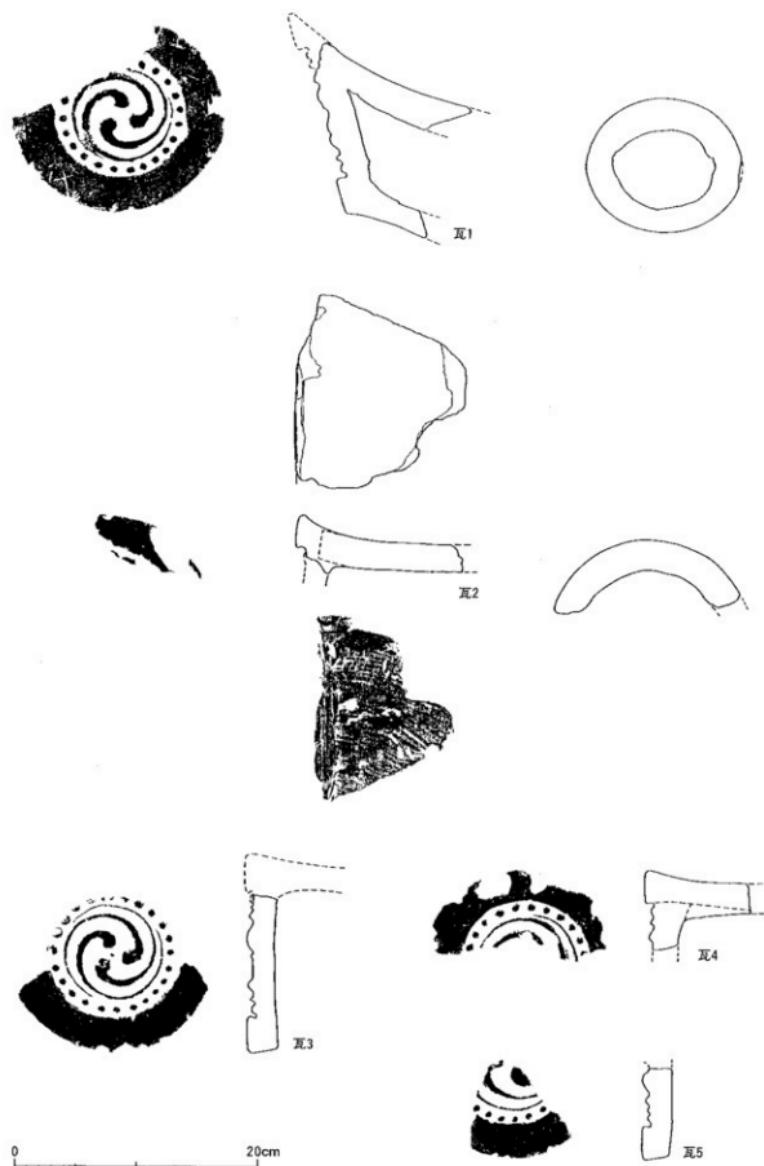
沢構IV・V地区出土の土器・陶磁器（2）

図版44

IV・V地区 包含層

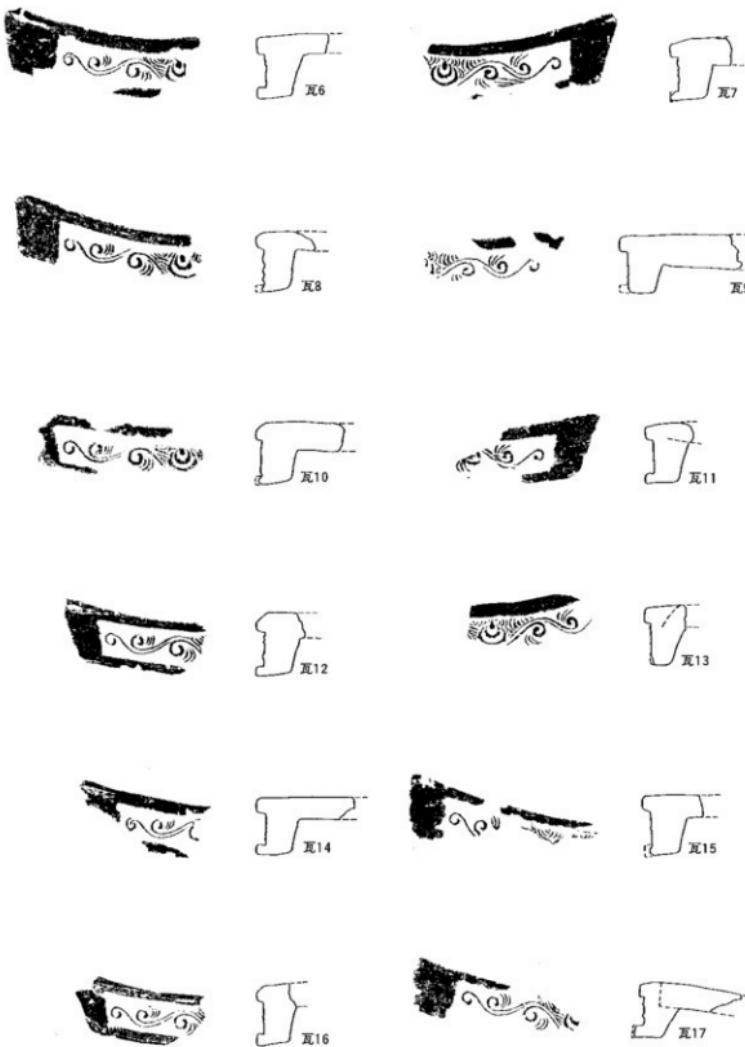


沢構IV・V地区出土の土器・陶磁器（3）



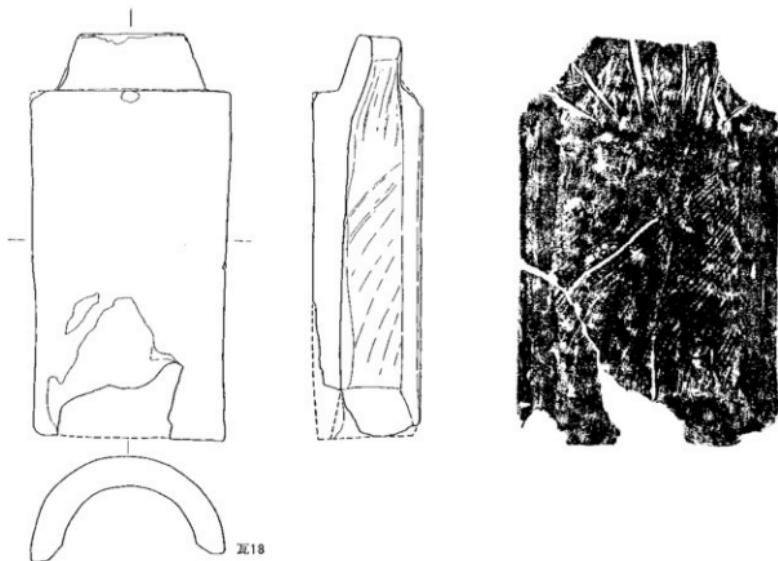
沢構III地区出土の瓦（1）

図版46

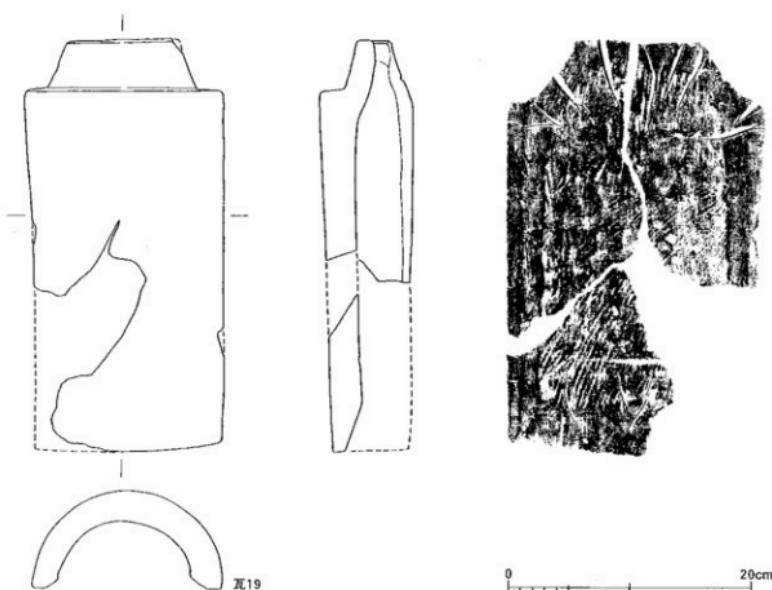


0 20cm

沢構III地区出土の瓦（2）



瓦18

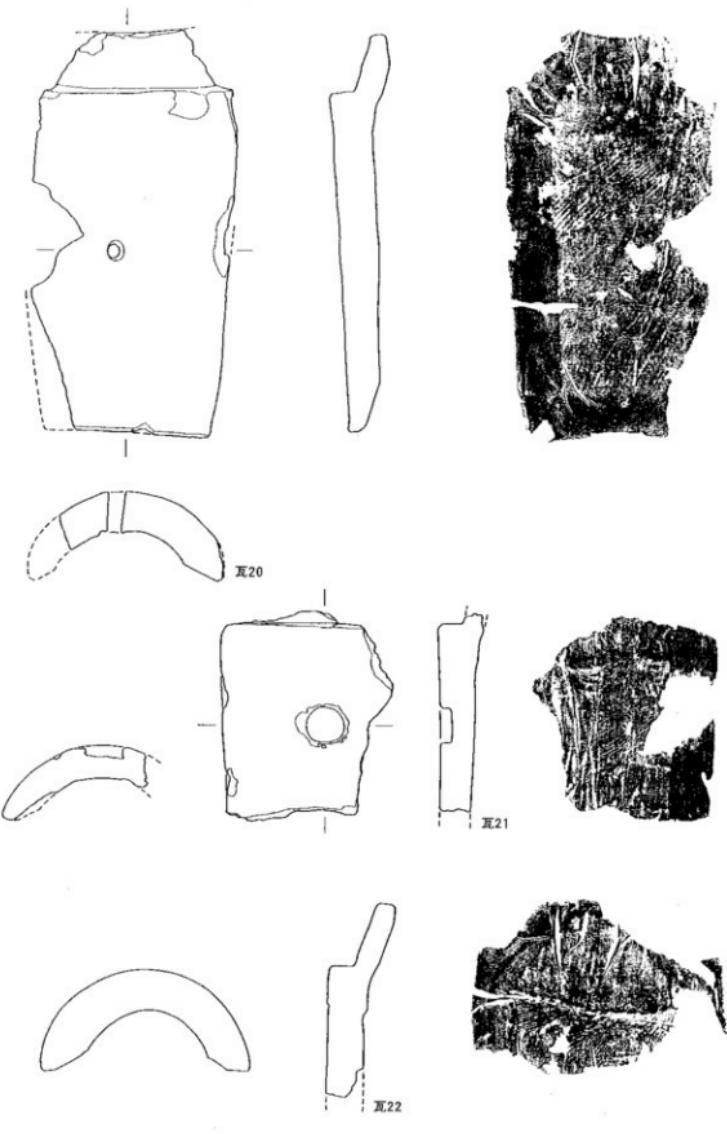


瓦19

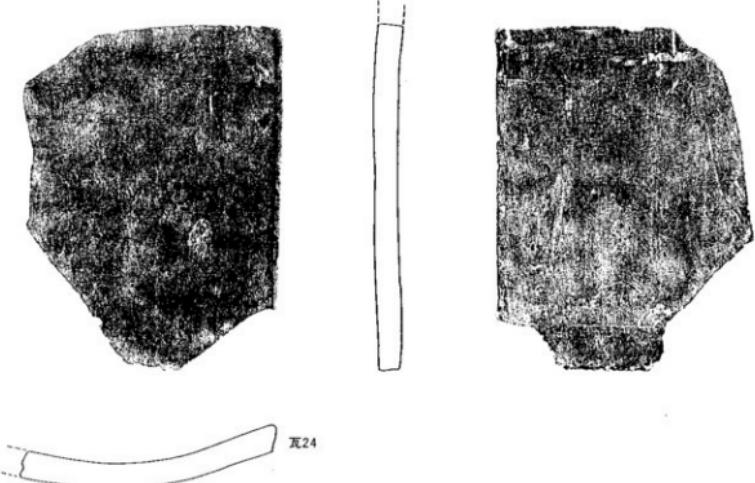
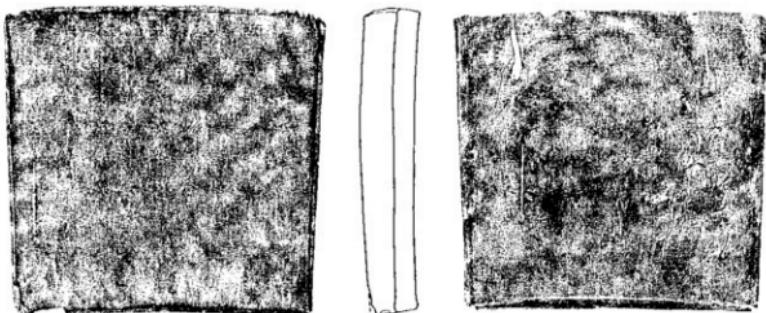


沢構Ⅲ地区出土の瓦（3）

図版48

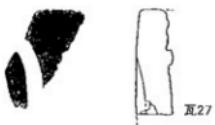
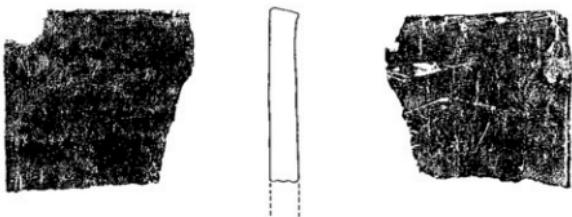
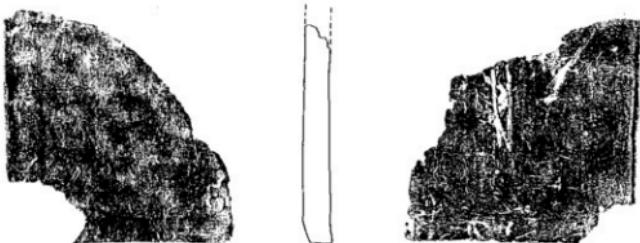


沢構III地区出土の瓦（4）



沢構Ⅲ地区出土の瓦（5）

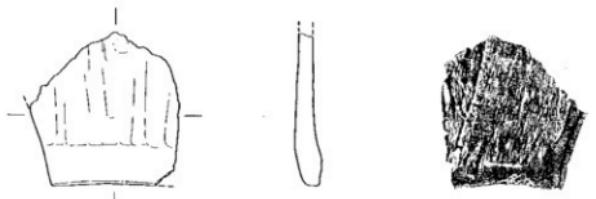
図版50



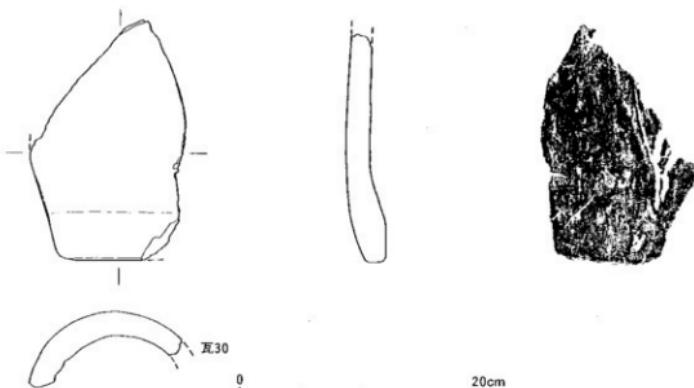
沢構Ⅲ地区出土の瓦（6）



瓦28



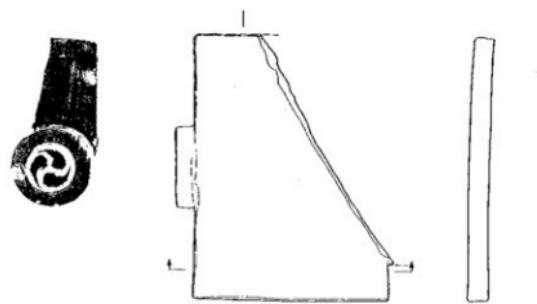
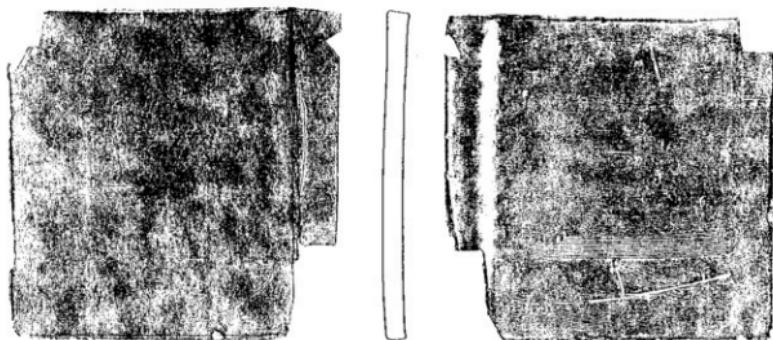
瓦29



瓦30

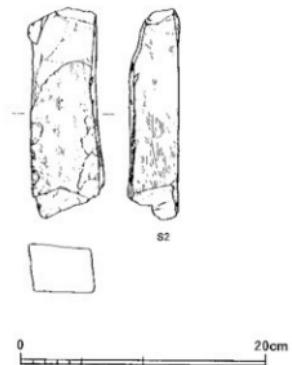
0 20cm

沢構III地区出土の瓦（7）

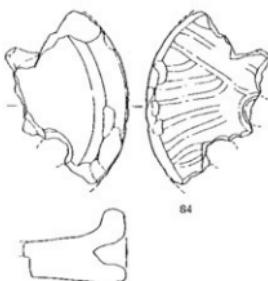
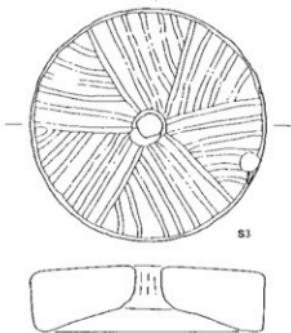
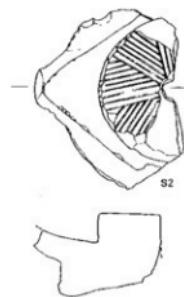
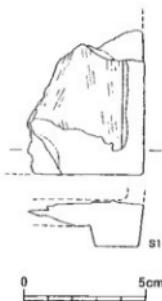


沢構Ⅲ地区出土の瓦（8）

## サルガク遺跡



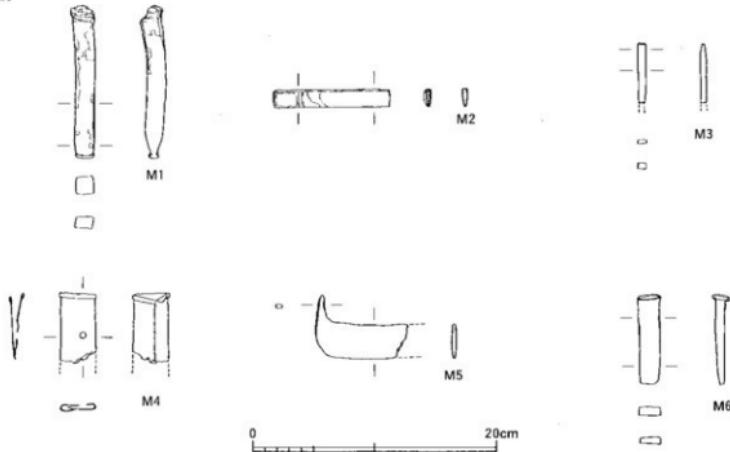
## 沢溝



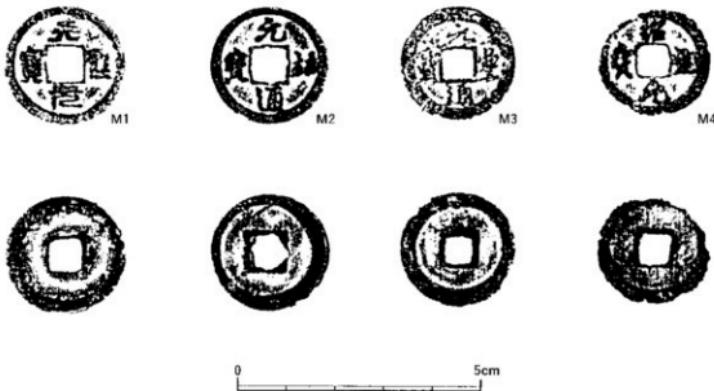
サルガク遺跡・沢溝出土の石器・石製品

図版54

沢構



サルガク遺跡



沢構出土の金属器・サルガク出土の銭貨

写真図版

サルガク遺跡・沢構



遺跡全景（北から）



遺跡全景（東から）

## 写真図版2

サルガク遺跡・沢横



遺跡全景（真上から）

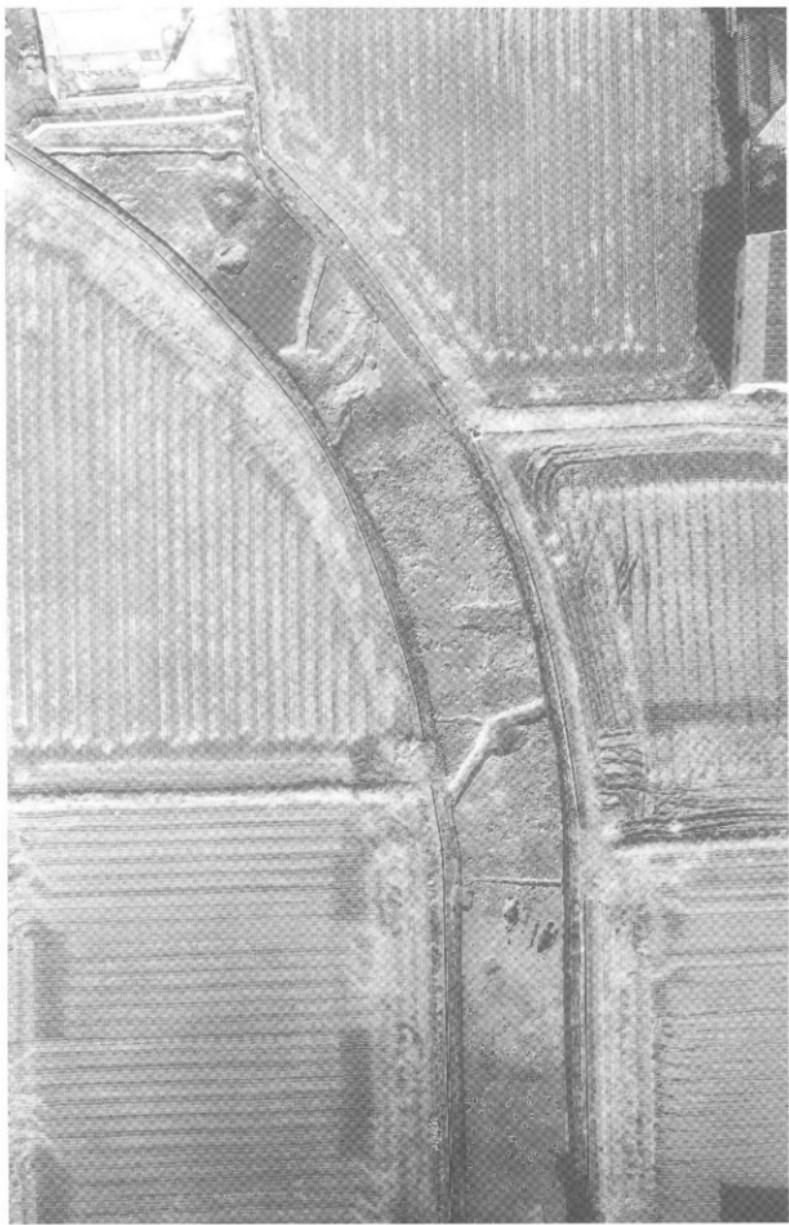
サルガク遺跡・沢構



遺跡全景（南西から）

写真図版4

サルガク遺跡



I 地区北半（真上から）

サルガク遺跡



I 地区南半（真上から）

## 写真図版6

サルガク遺跡

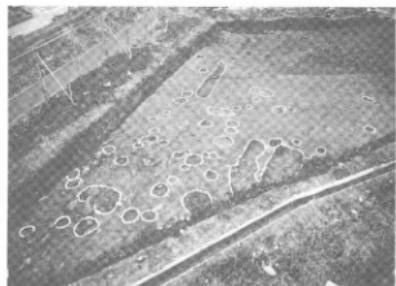


I・II地区全景（北から）



I・II地区全景（南から）

## サルガク遺跡



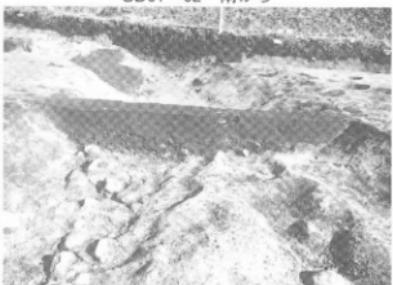
SB01 西から



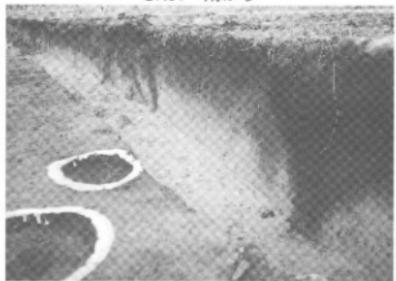
SD01・02 南から



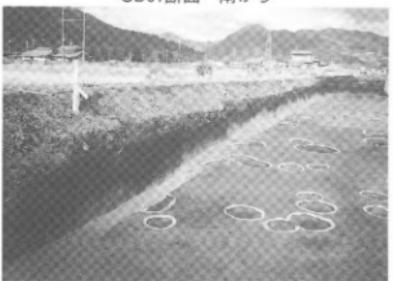
SK01 南から



SD01断面 南から



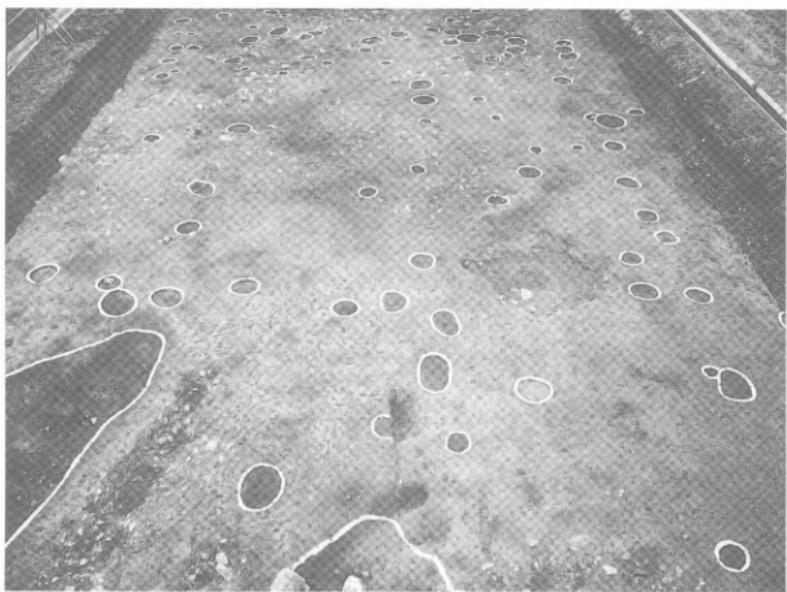
I 地区断面（東壁南端） 南西から



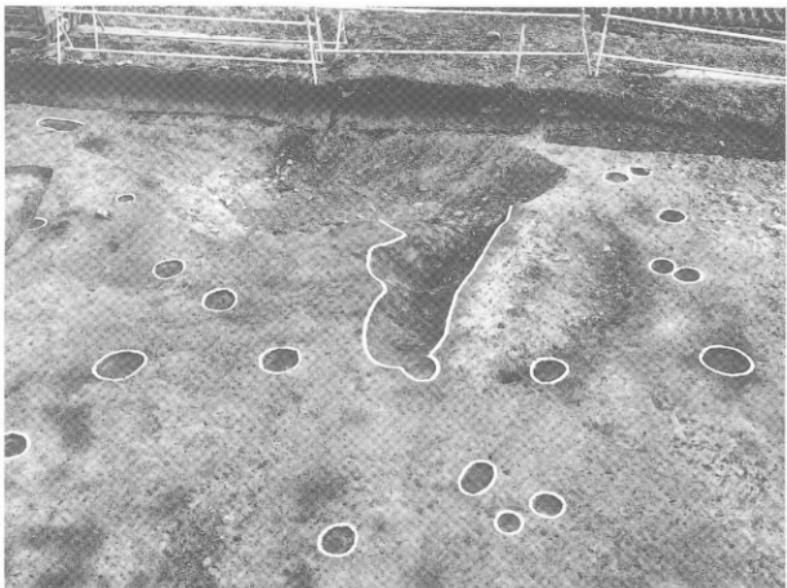
II 地区断面（中央西壁） 南東から

写真図版8

サルガク遺跡Ⅰ地区

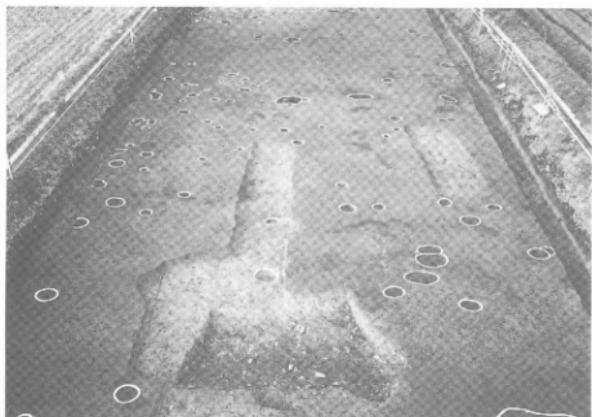


SB02 北から

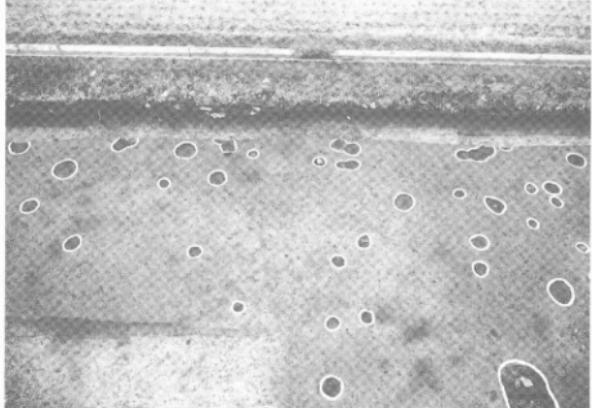


SB04 西から

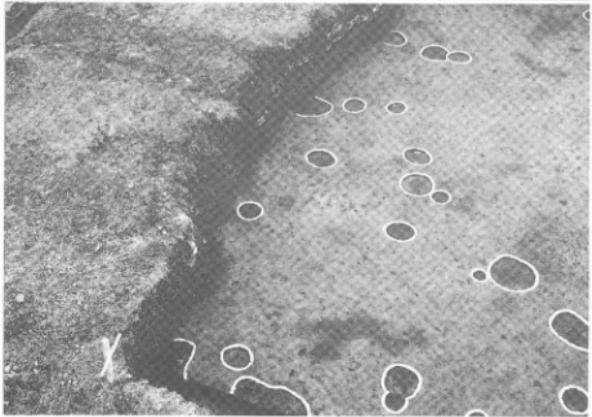
サルガク遺跡Ⅰ地区



南端 西から



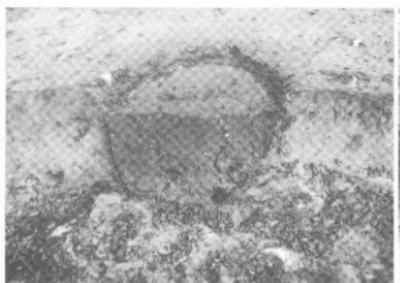
SB05 東から



SB06 東から

## 写真図版10

サルガク遺跡Ⅰ地区



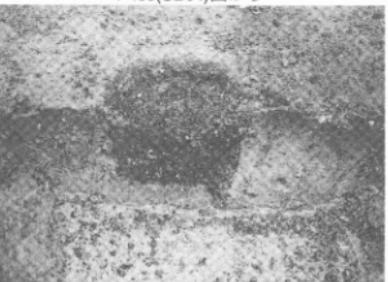
P234(SB02)西から



P438(SB04)西から



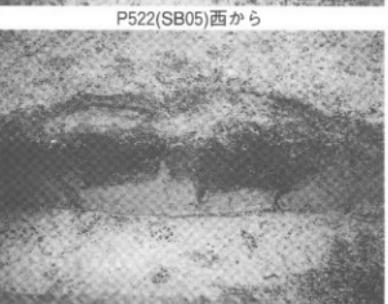
P445(SB04)南から



P522(SB05)西から



P572(SB06)北から



P567・568(SB06)北から

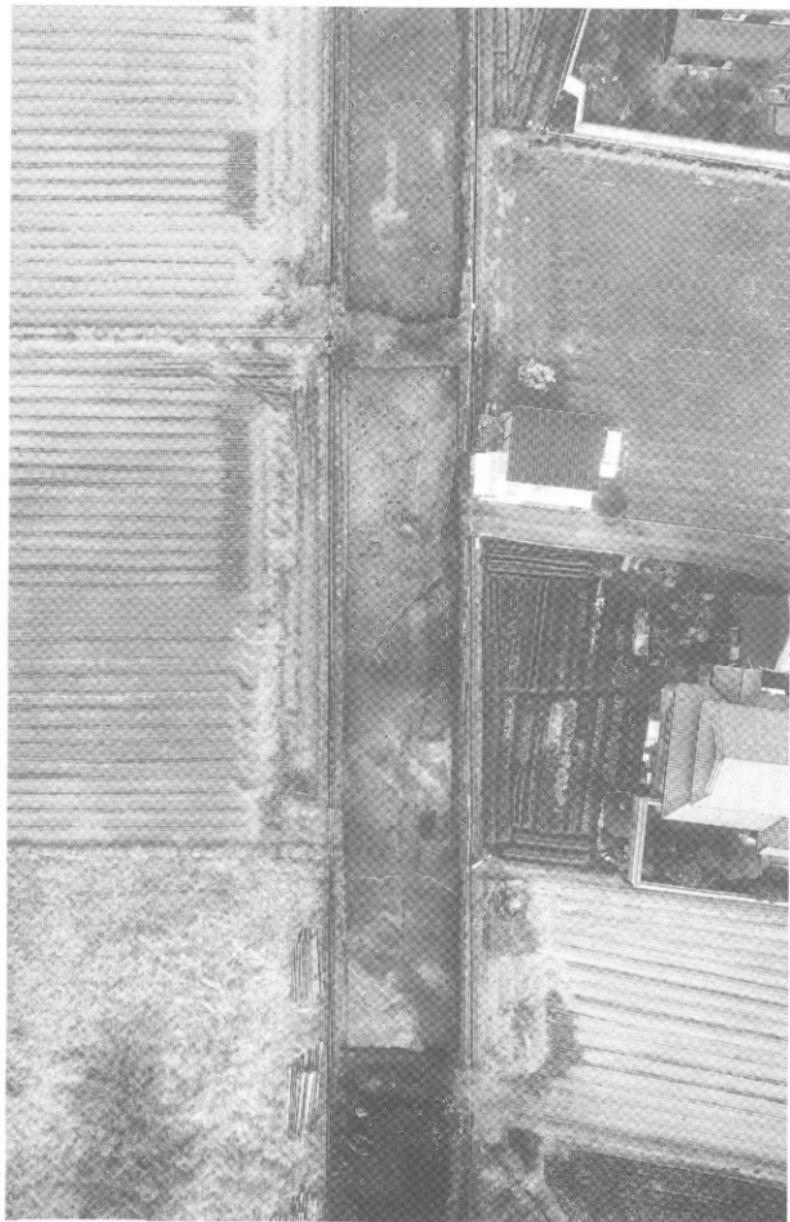


P407・487西から



P406西から

サルガク遺跡 I 地区



II 地区全景 真上から

写真図版12

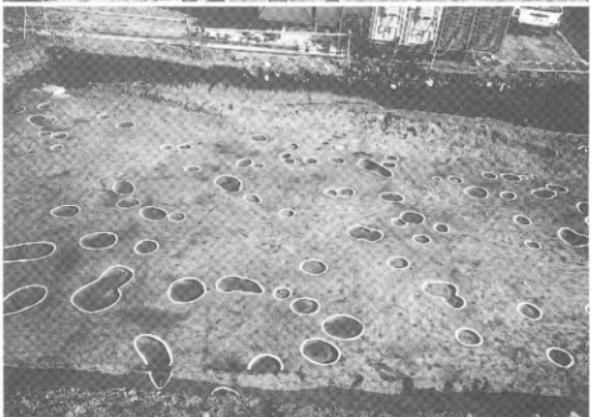
サルガク遺跡II地区



全景 南から



全景 北から



柱穴集中地区 西から

屋形構



屋形構



屋形構近景（1）



屋形構近景（2）

## 写真図版14

サルガク遺跡



III～V地区全景 南上空から



III～V区全景 南東から

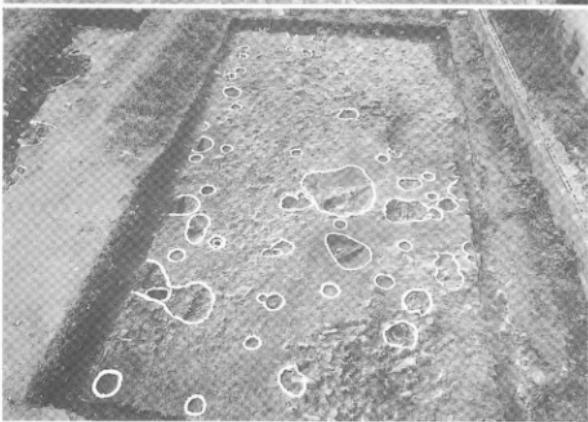
サルガク遺跡



III地区全景 西から



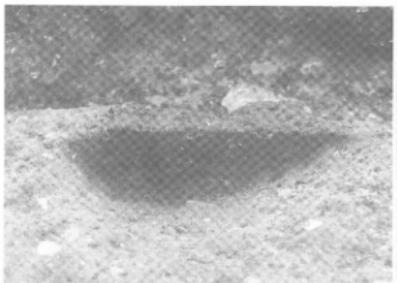
IV・V地区全景 西から



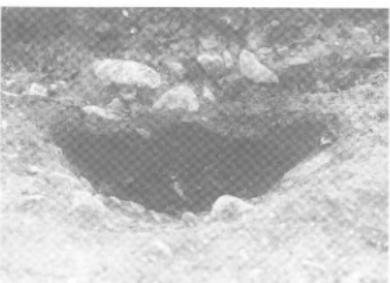
V地区全景 南から

## 写真図版16

サルガク遺跡Ⅲ地区・V地区



SK01断面 西から



SK02断面 東から



SK03断面 西から



SK04断面 西から



SK05断面 南から



SK08断面 西から



SK09断面 南から



SK13断面 東から

沢横Ⅰ地区



全景 南東から



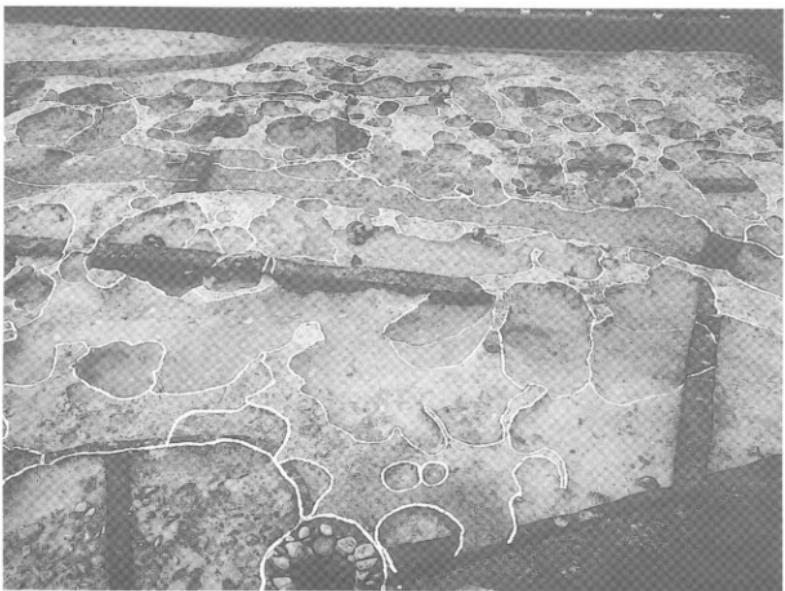
全景 北西から

写真図版18

沢横Ⅰ地区



粘土採掘坑群北部 西から



粘土採掘坑群南部 西から

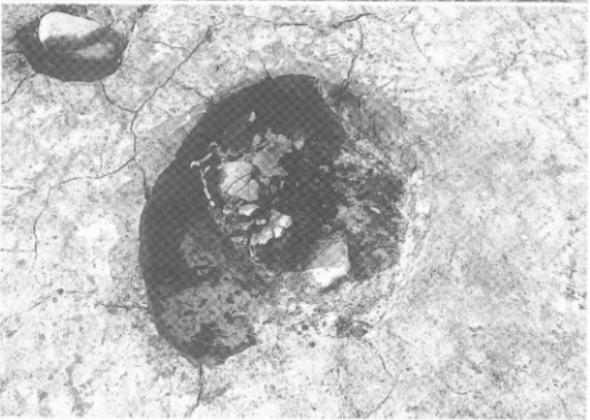
沢構Ⅰ地区



SK15土器出土状況  
北から



SK27土器出土状況  
北東から



SK67土器出土状況  
南から

## 写真図版20

沢横Ⅰ地区



SK06 土層断面 南から



SK27 土層断面 西から



SK57 土層断面 北から



SK60 土層断面 南から



SK65 土層断面 南から



SK68~70 土層断面 南東から



SB01P60 南から

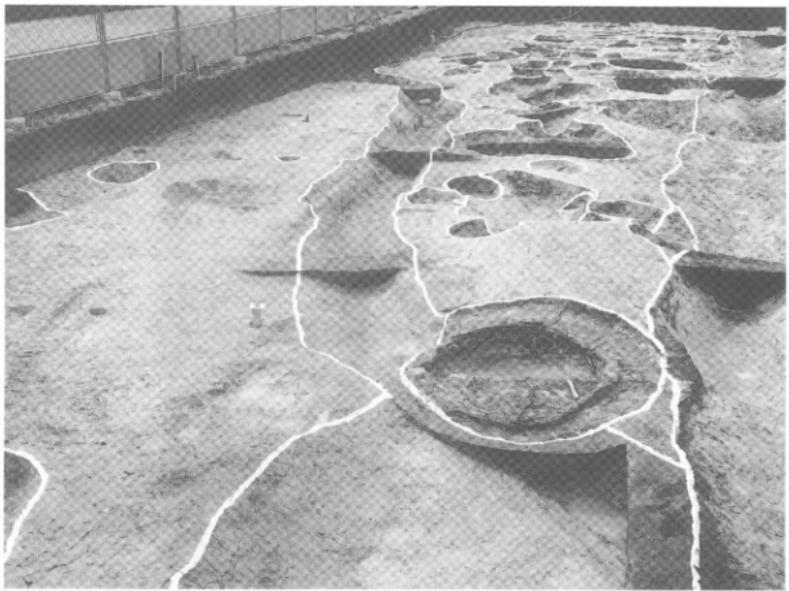


SB01P61 東から

沢構Ⅰ地区



SD01 南から



SD02 北から

## 写真図版22

沢構Ⅰ地区

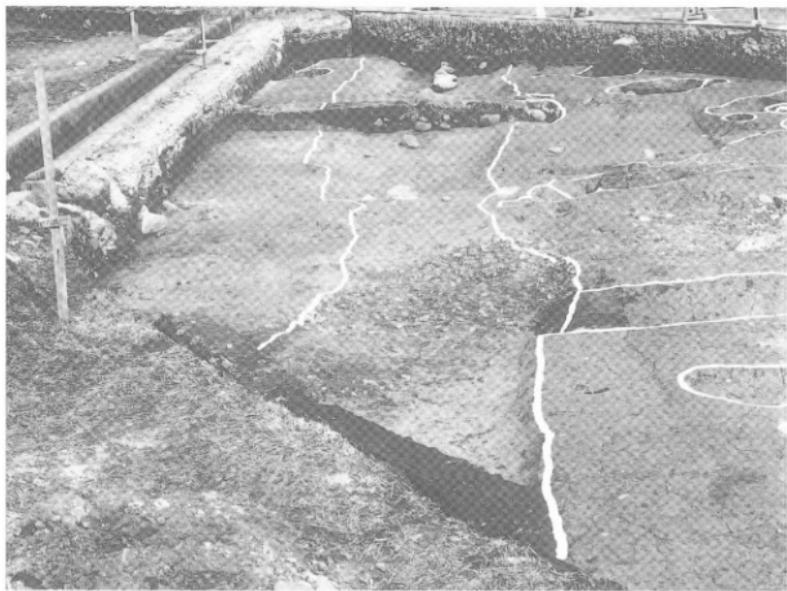


北西部中近世遺跡群 南から



SD03 北から

沢構Ⅰ地区



SD04 南から



SD04内石列 南西から

写真図版24

沢構Ⅰ地区



SK31 西から

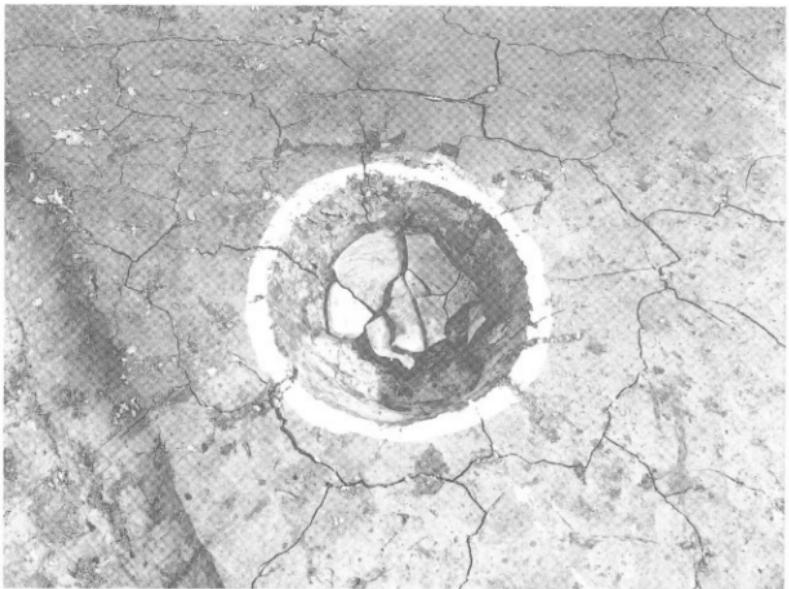


SE01 東から

沢構II地区



全景 北西から



SK02 西から



SE01 南から



SE01断面 南から

沢構



III～V地区全景 西上空から



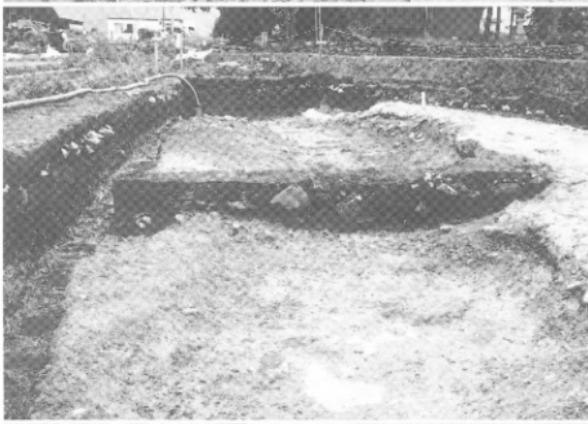
III地区全景 南から

写真図版28

沢横Ⅲ地区



SD01全景 南から



SD01断面 1 南から



SD01断面 2 南から

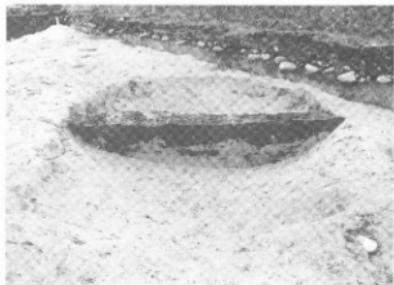
沢構Ⅲ地区



SD02全景 西から



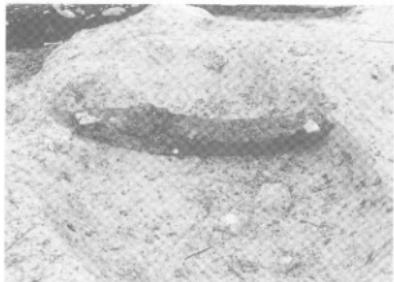
SD02断面 西から



SK01断面 南から



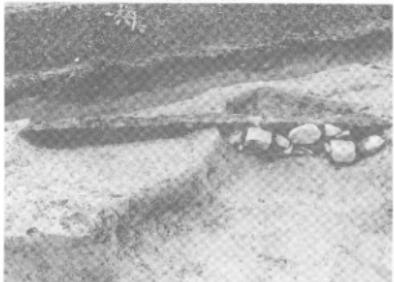
SK02断面 南から



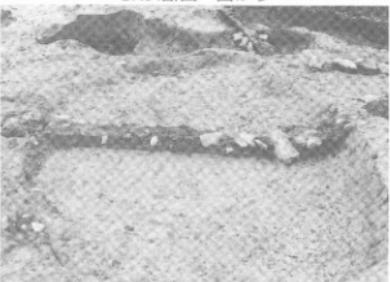
SK03断面 南から



SK04断面 西から



SK06・07断面 西から



SK08断面 南から



SK09・10断面 南東から



SK12・13・15断面 南から



SK14断面 南から



SK16断面 南から

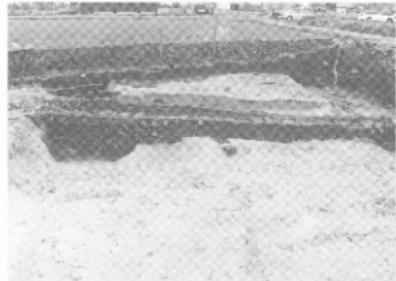
沢構Ⅲ地区



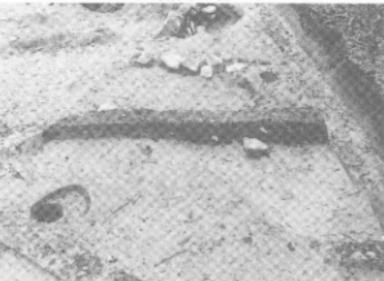
SK17断面 西から



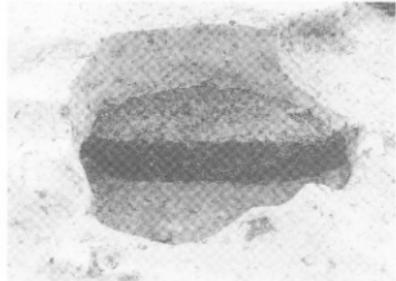
SK18断面 北から



SK20断面 西から



SK21断面 南から



SE01断面 西から



SE01 西から



SD03断面 東から



SA01 南から

写真図版32

沢横IV・V地区



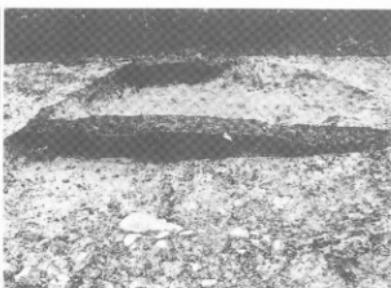
IV区全景 南から



V区全景 北から

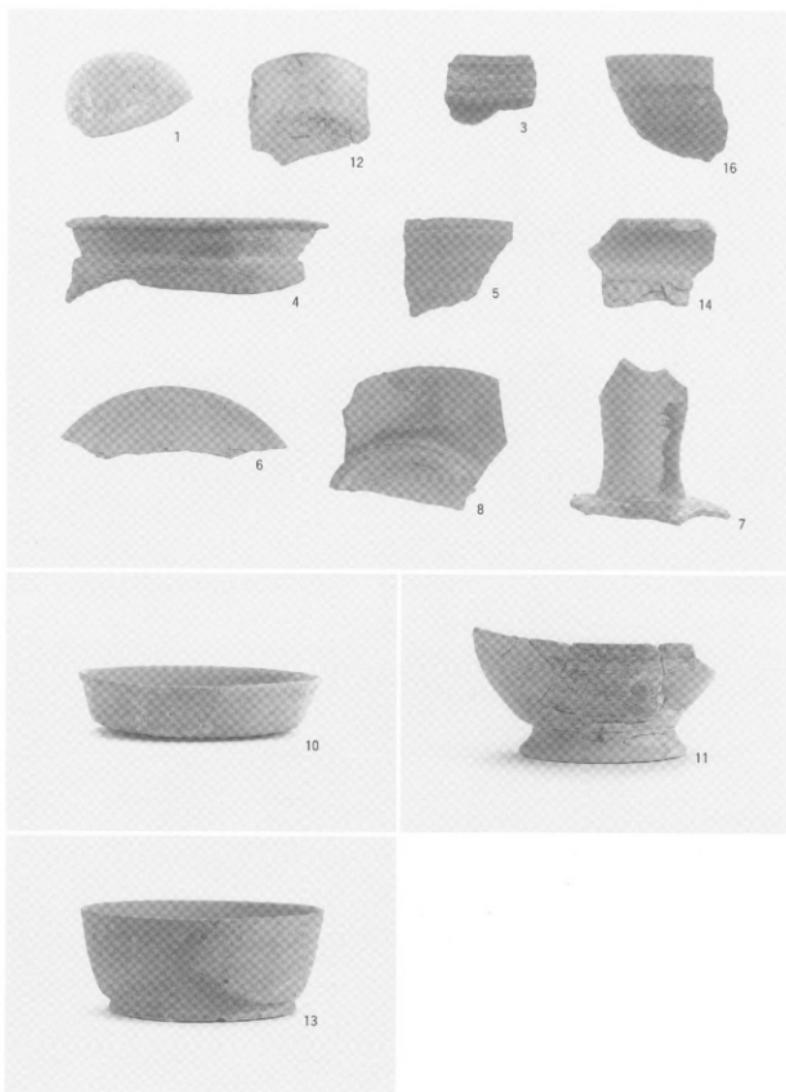


SK25断面 北から

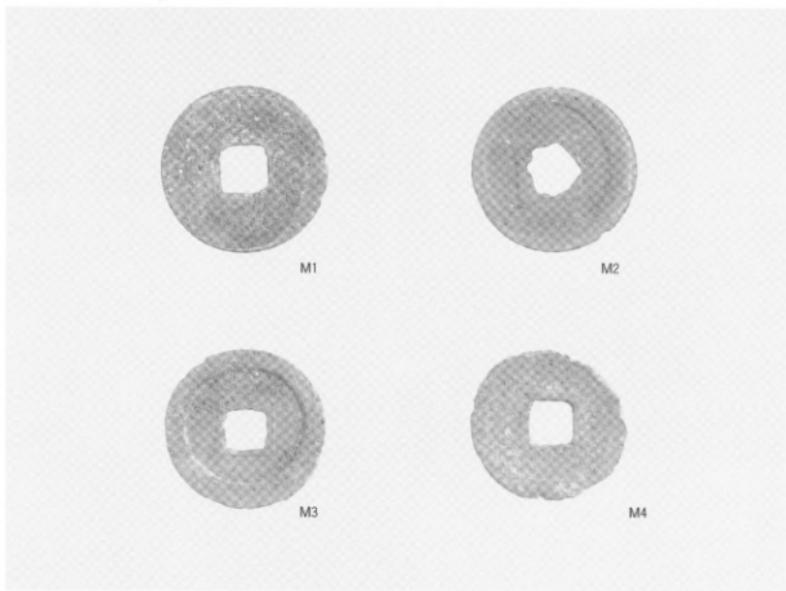
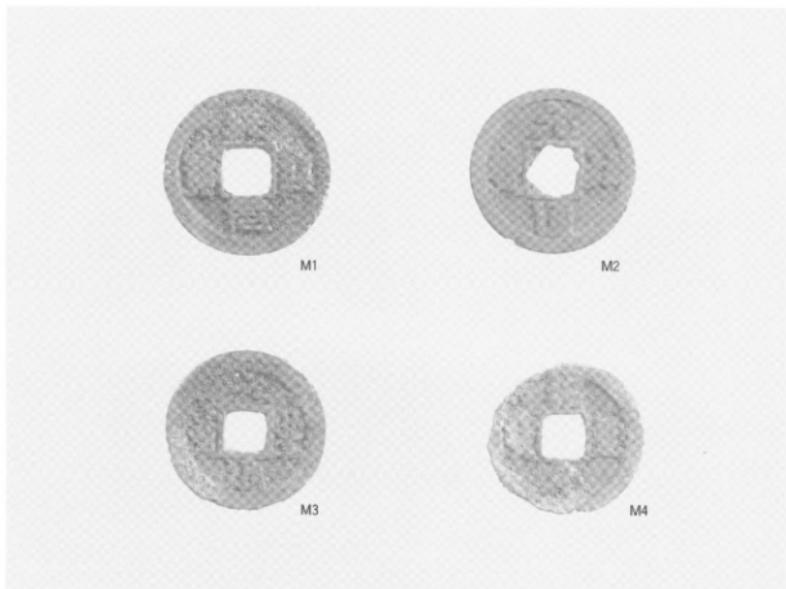


SK28断面 東から

## サルガク遺跡

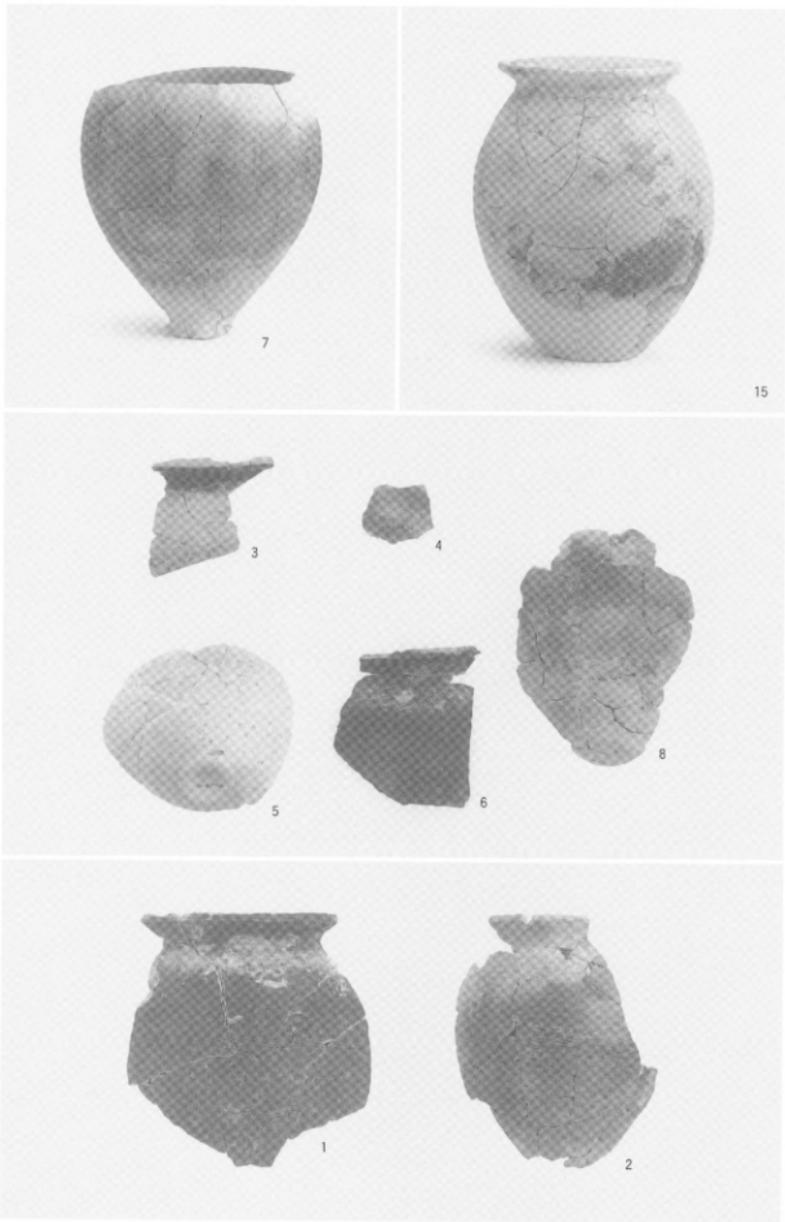


サルガク遺跡出土の土器・陶磁器

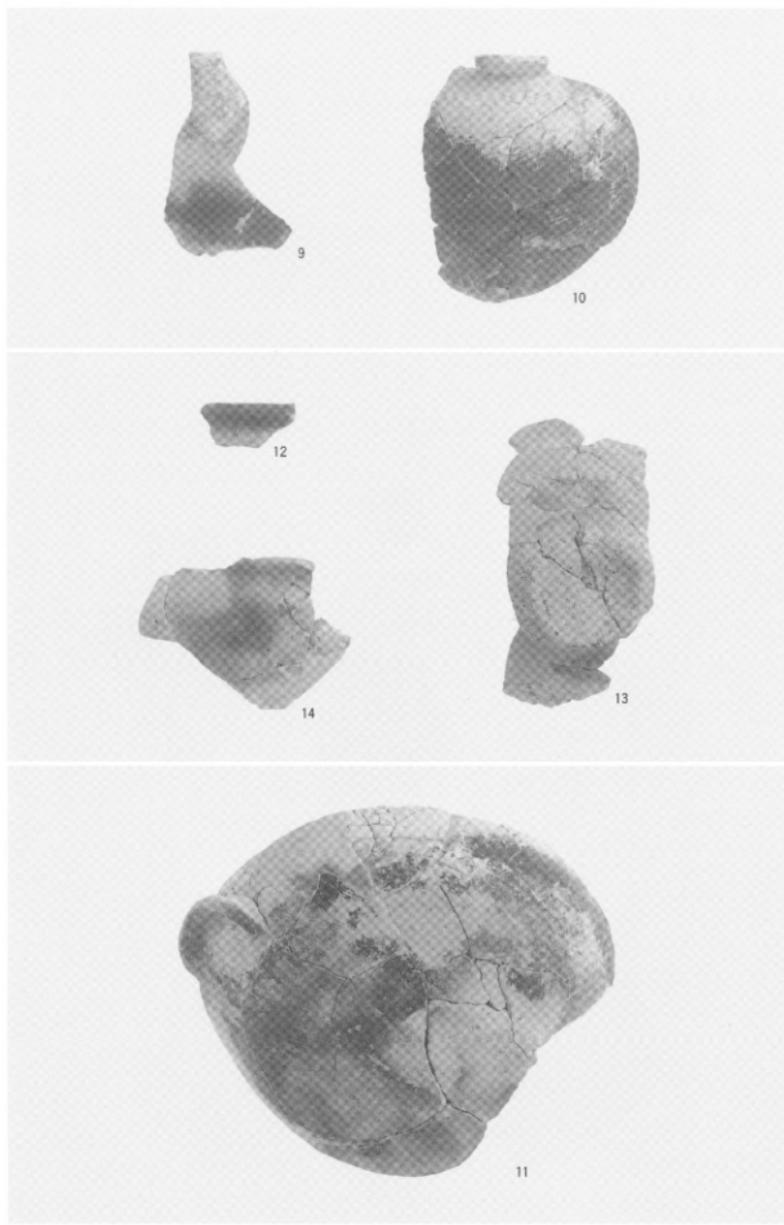


サルガク遺跡出土の銭貨

沢構

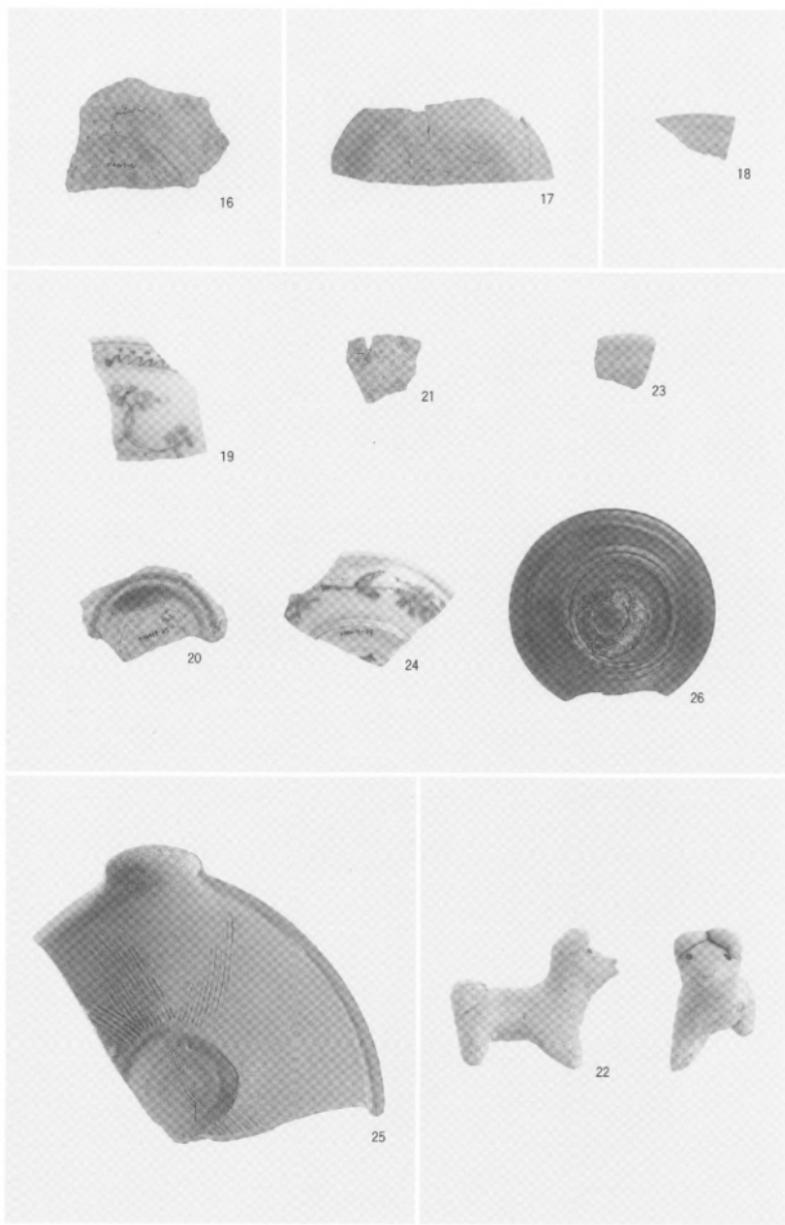


沢構 I 地区出土の土器・陶磁器（1）

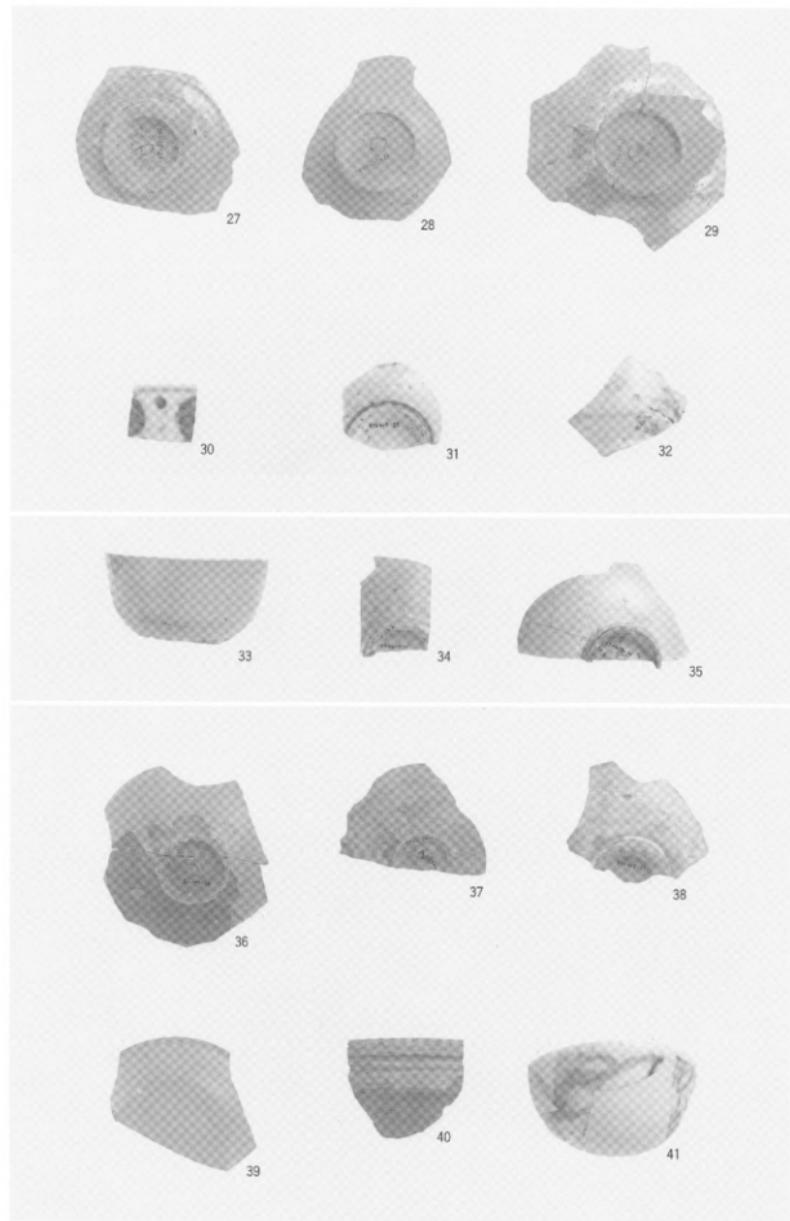


沢構 I 地区出土の土器・陶磁器（2）

沢構

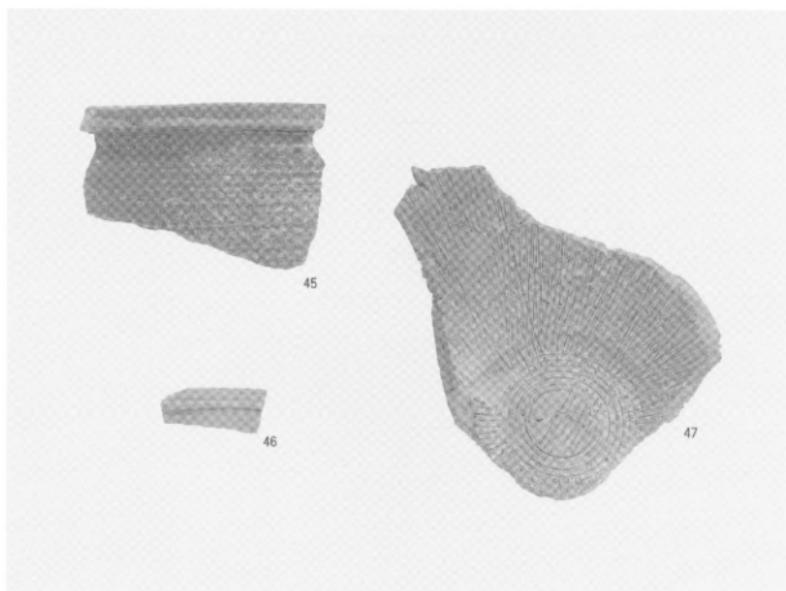
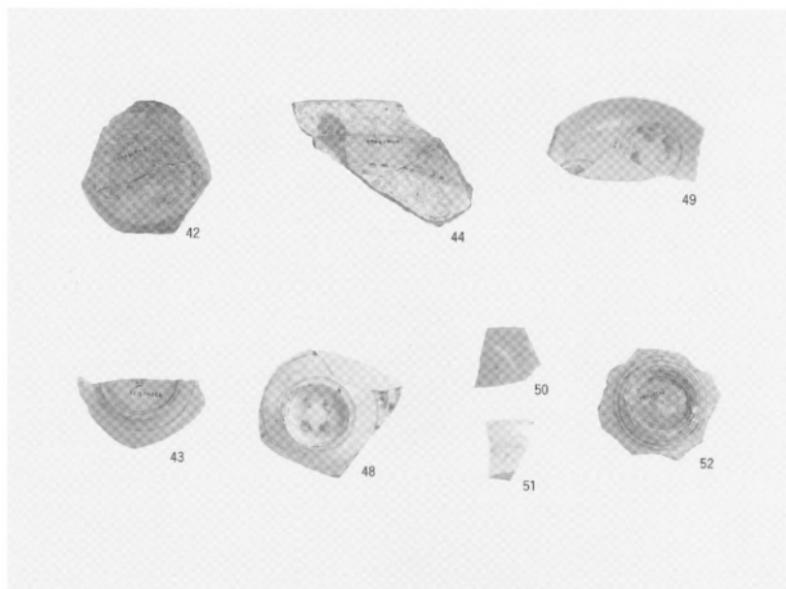


沢構I地区出土の土器・陶磁器（3）



沢構 I 地区出土の土器・陶磁器（4）

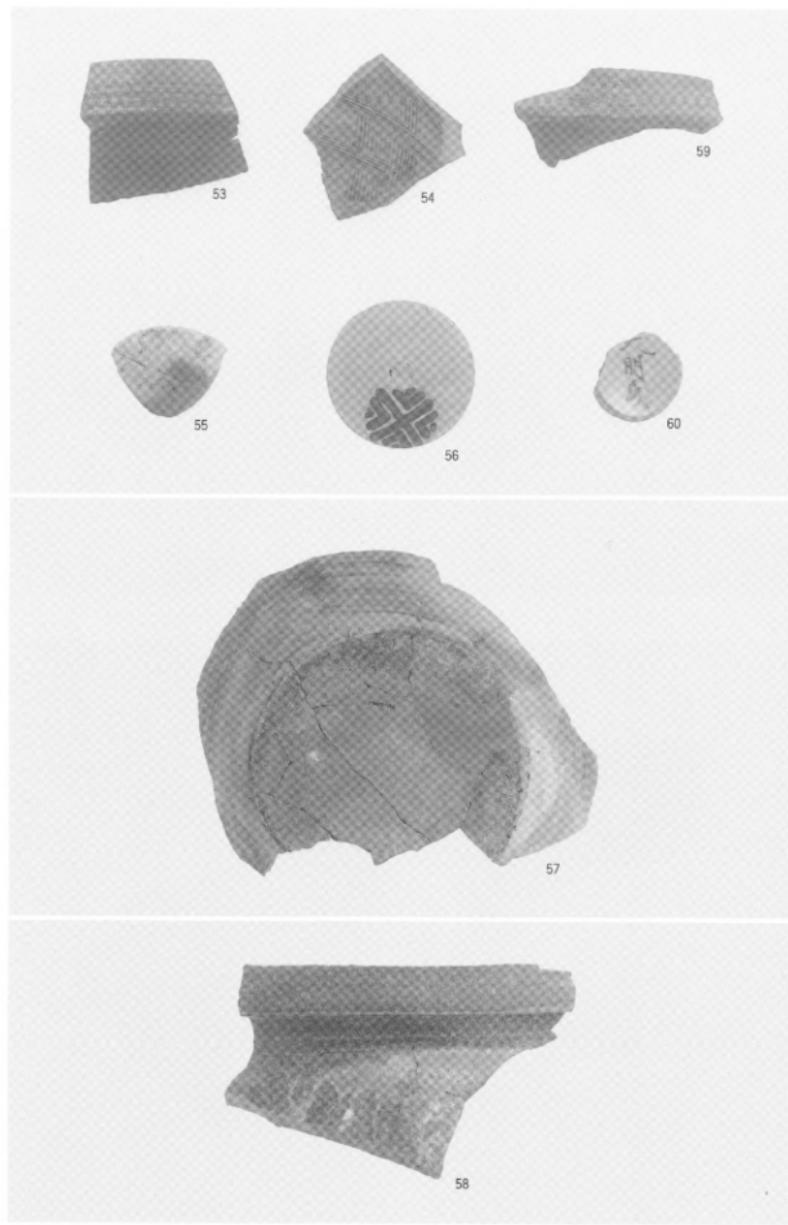
## 沢構



沢構 I 地区出土の土器・陶磁器（5）

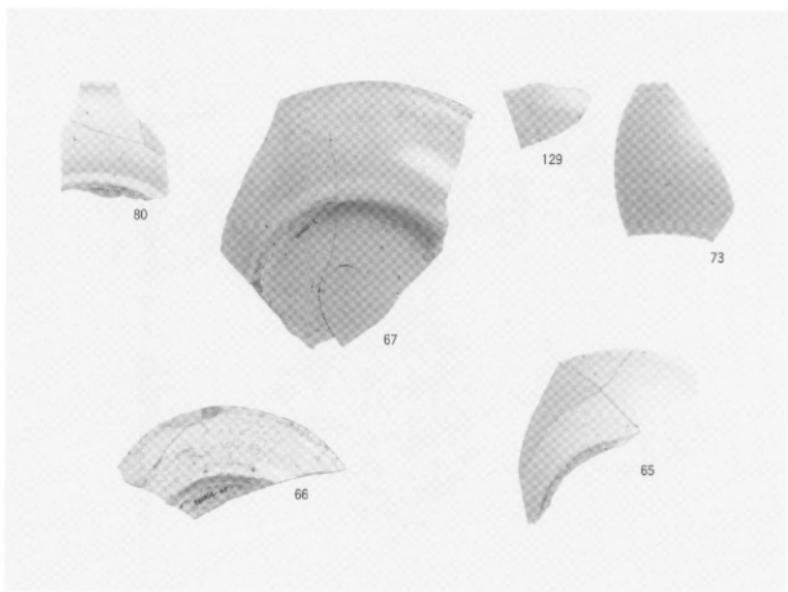
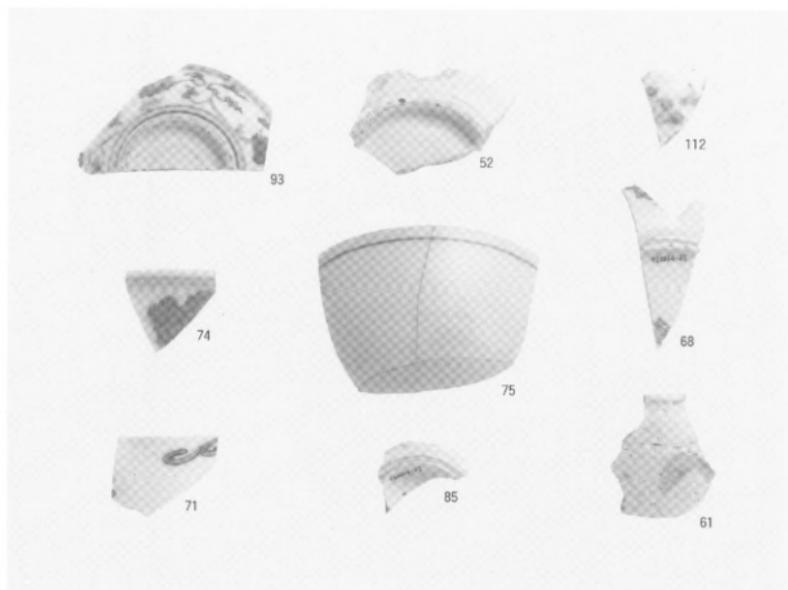
写真図版40

沢構



沢構II地区出土の土器・陶磁器

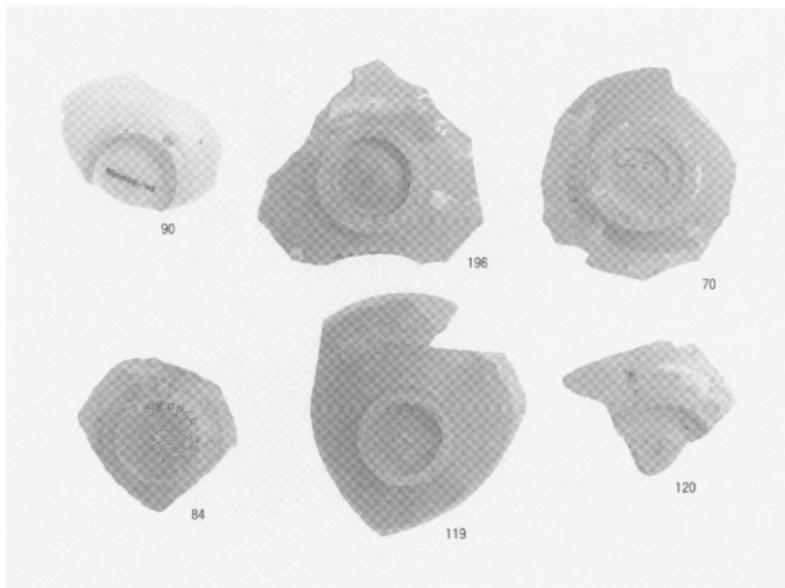
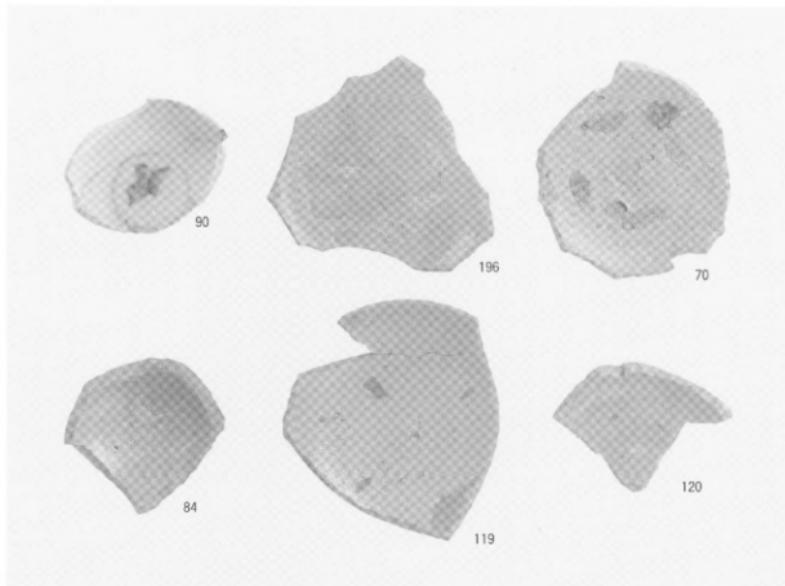
沢構



沢構Ⅲ～V地区出土の土器・陶磁器（1）

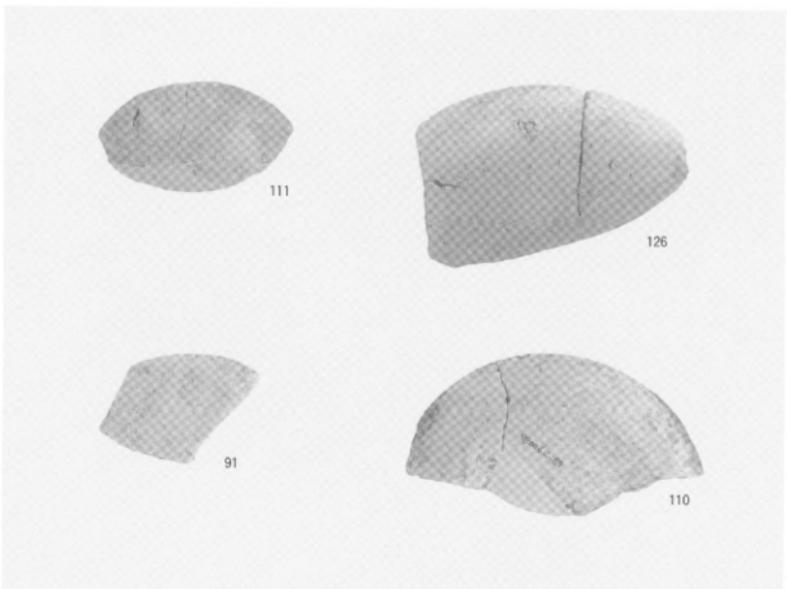
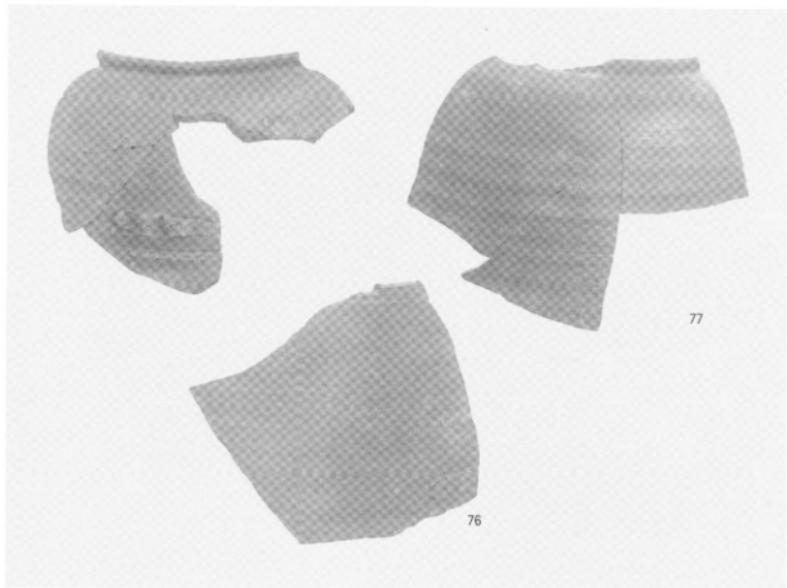
写真図版42

沢構



沢構III～V地区出土の土器・陶磁器（2）

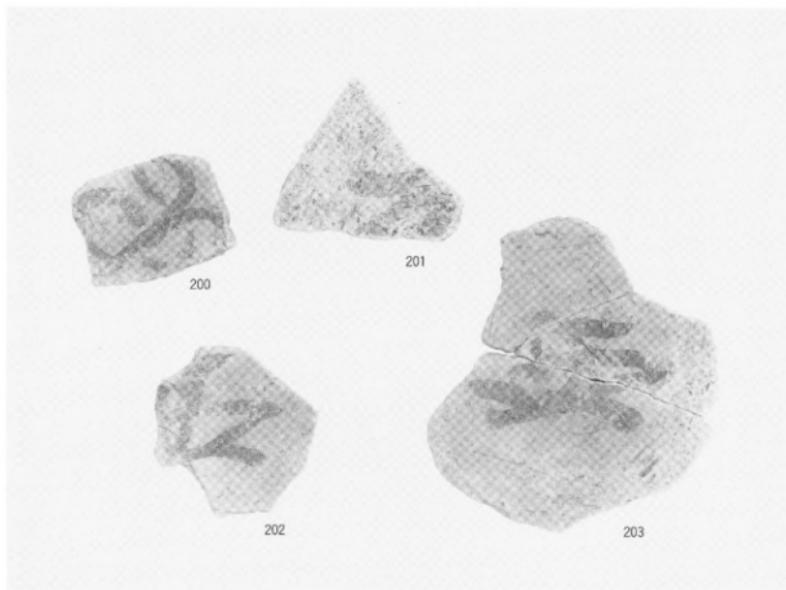
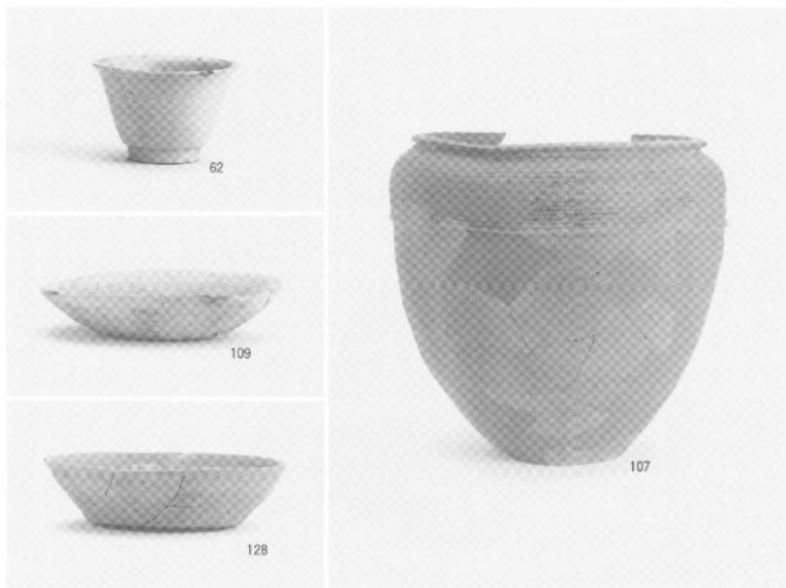
沢構



沢構III～V地区出土の土器・陶磁器（3）

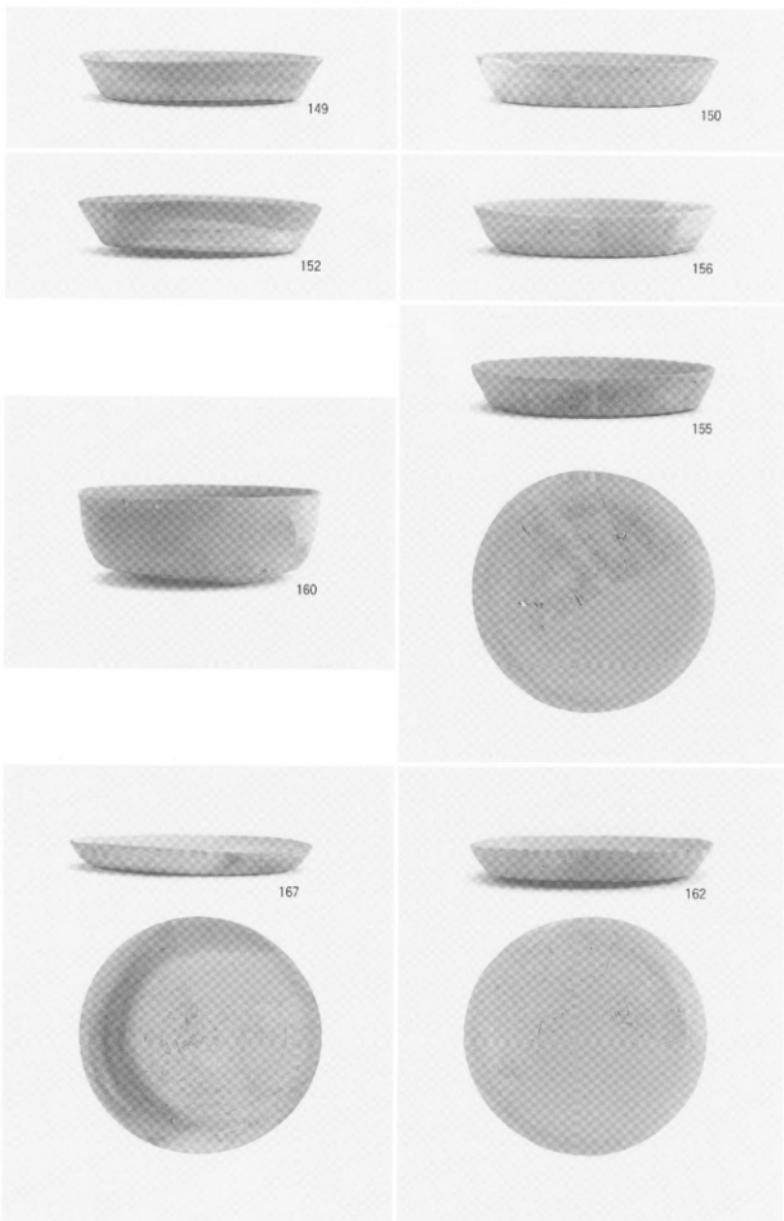
写真図版44

沢構

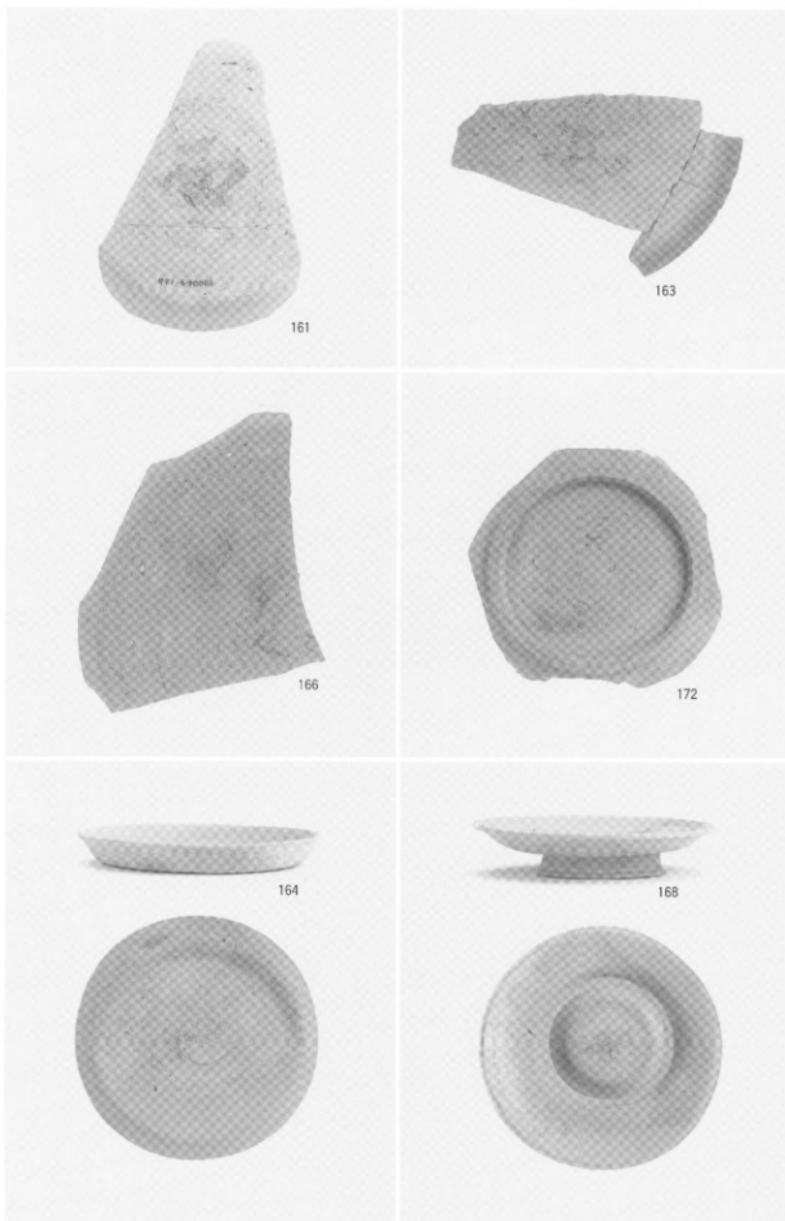


沢構III～V地区出土の土器・陶磁器（4）

沢構



沢構III～V地区出土の土器・陶磁器（5）



沢構III～V地区出土の土器・陶磁器（6）

沢構



170



171



174



176



175



179



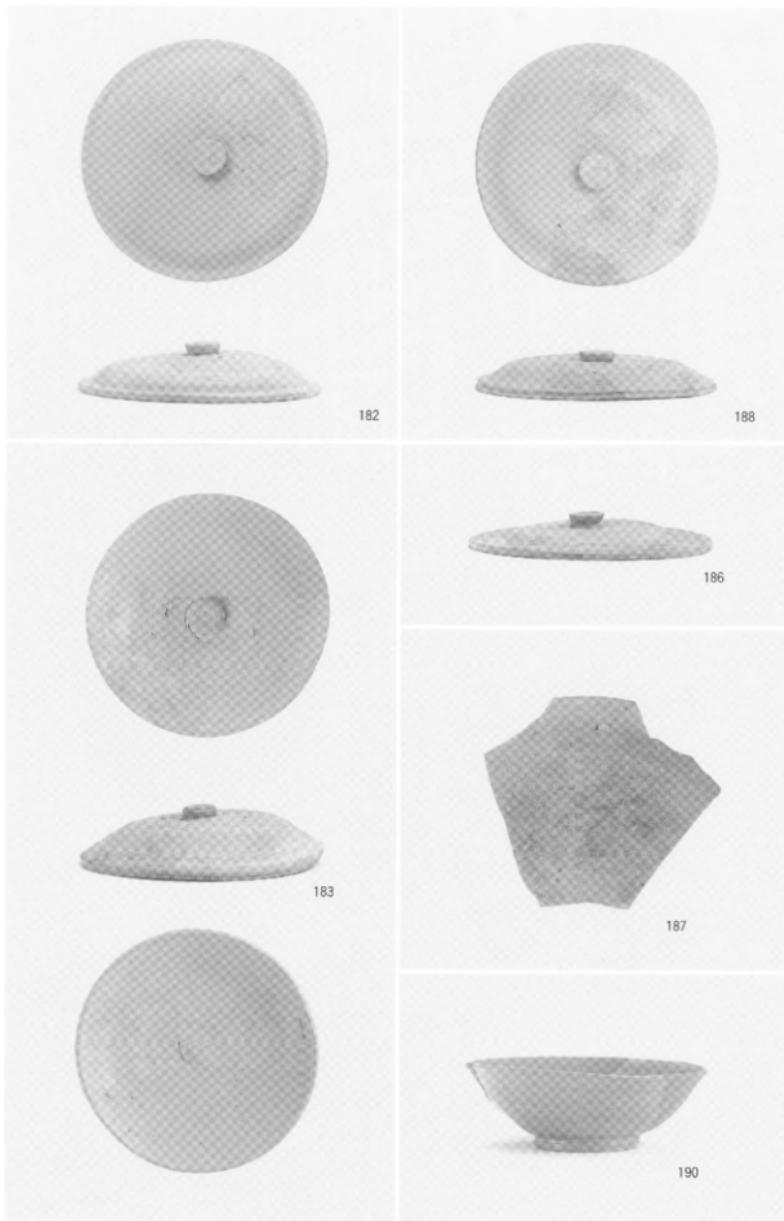
180



181

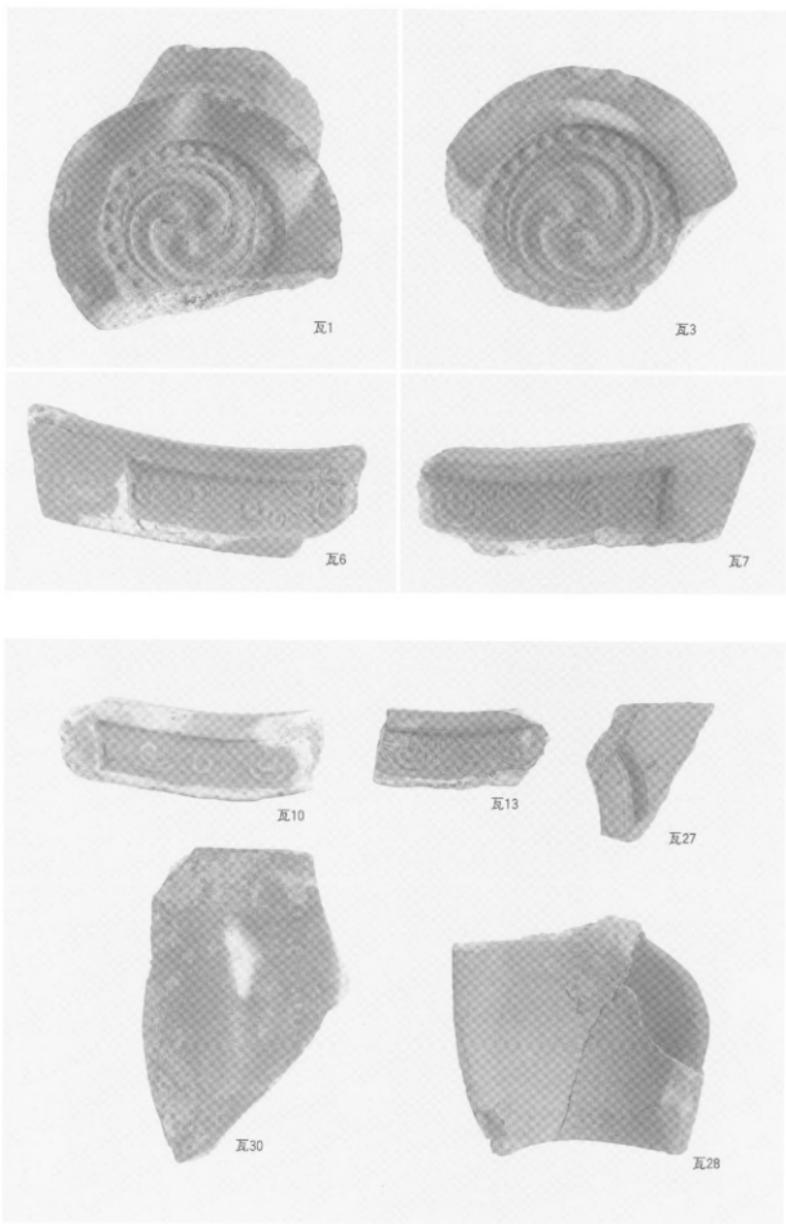


184



沢構III～V地区出土の土器・陶磁器（8）

沢構



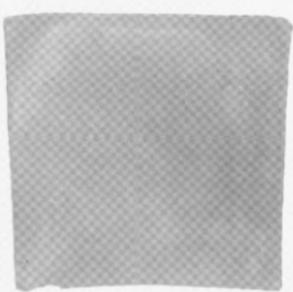
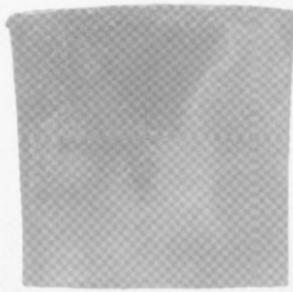
沢構III地区出土の瓦（1）



瓦18

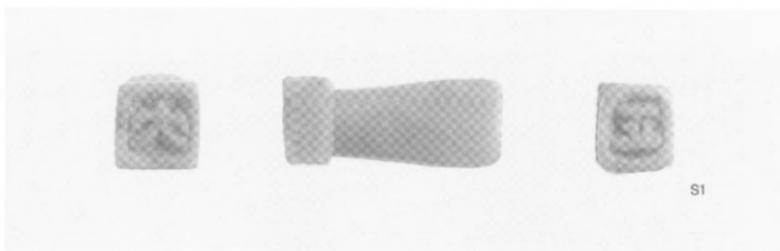


瓦20



瓦23

サルガク遺跡



S1

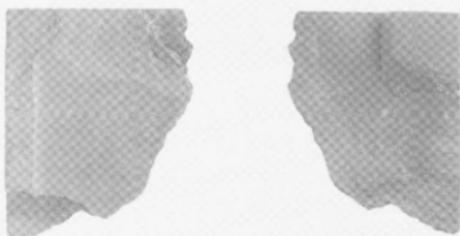
沢構



S2



S2



S1

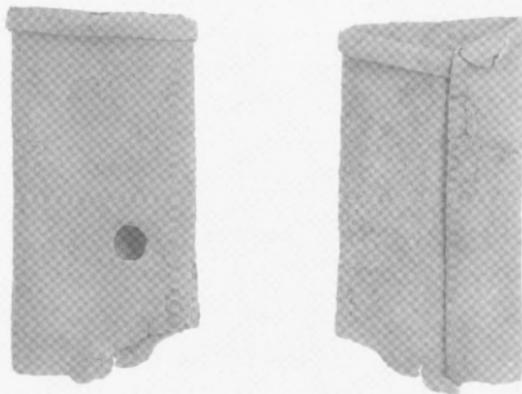
サルガク遺跡・沢構出土の石器・石製品



M2

沢構出土の金属器（1）

沢構



M4



M5

M6

沢構出土の金属器（2）

# 報告書抄録

よみがな	さるがくいせき・さわかまえ							
書名	サルガク遺跡・沢構							
副書名	県道長谷市川線道路改良工事							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第343号							
編著者名	山上雅弘、鍼 美紀(編)、池田征弘							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 加古郡播磨町大中500 TEL079-437-5589							
発行年月日	西暦2008年(平成20年)3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
サルガク遺跡	神崎郡市川町沢	940128	35° 02' 02"	134° 45' 28"	確認調査 19940510- 19940516	136m <sup>2</sup>	県道長谷市 川線道路改 良工事	
			950290		本発掘調査 19951018- 19960119			2,207m <sup>2</sup>
		沢構	神崎郡市川町沢	980065		19980525- 19980717		325m <sup>2</sup>
				960452	35° 02' 09"	134° 45' 29"		確認調査 19970225
サルガク遺跡	集落	970419		本発掘調査 19980129- 19980324	1,205m			
		980064		19980525- 19980717	761m <sup>2</sup>			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
サルガク遺跡	集落	弥生・奈良 鎌倉	掘立柱建物					
沢構	集落、城館	弥生、奈良、 平安、中世 末~近世	粘土採掘坑、漆	弥生土器、墨書き土器、綠釉 陶器、戦国時代の瓦		戦国期の城館跡		

兵庫県文化財調査報告 第343冊

## サルガク遺跡・沢構

—県道長谷市川線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2008（平成20）年3月20日

編集 兵庫県立考古博物館  
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大字500

発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 邦栄堂  
〒675-2213 加西市西笠原町766